

Vivid Outlaw

勇忌煉

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

二人の少女が共に過ごした、空白の一年間。その時間は、短くも長いものだった――。

### ※注意

この作品は『死戦女神は退屈しない』のIFルート第65話と最終話の間に起きた出来事を描いたものです。

また、原作的な時系列は主になのはVividとVivid Strike!の間にある空白期となります。

# 目次

## 第一章「復活からの就任」

第1話「ヤンキー始動」	1
第2話「さらば学校生活」	9
第3話「廃棄都市区画」	16
第4話「やるしかない」	22
第5話「金の閃光vs死戦女神」	29
第6話「敗走」	36
第7話「一難去つてまた一難」	43
第8話「死んでも折れない」	51
第9話「渴望と先生」	59
第10話「新たなスタート」	65

## 第二章「第100管理外世界」

第11話「情報収集」	72
第12話「常に考えろ」	85
第13話「耐魔力繊維」	97
第14話「幕開けと工場」	108
第15話「屍兵器」	121
第16話「オリジナルと」	134
第17話「バーガンディの獣」	146
第18話「暴虐の果てに」	161
第19話「奥の手」	175
第20話「ブチ抜く一撃」	188
第三章「百発百中の散弾」	
第21話「スパルタ」	200

第22話 「目指せ南東部」	212
第23話 「接触」	222
第24話 「ヤンキーと殺し屋」	232
第25話 「食料と火起こし」	241
第26話 「もう止めだ」	251

# 第一章 「復活からの就任」

## 第1話 「ヤンキー始動」

——アタシはヤンキーだ。

ムカつく奴はぶん殴る。頭はぜってえ下げない。どんな時でも突っ張り通す。

常に自分の拳で道を切り開き、己の信念を曲げずに貫く。

例え世界中の全てを敵に回そうと、どれだけ裏切られようとか関係ない。

どんなに心が折れようと、孤独になろうと立ち止まることはない。

それでもアタシは進んでいく。終わりのない道、その先を目指して

「やっと吸えたぜコノヤロー」

お祝い感覚でボコリまくったゴロツキ共から奪い取ったタバコを一口吸い、煙を吐きながら空を見上げ、降り注ぐ雪を目に焼きつける。病院を出てから一時間ほど経ったと思うが、身体にこれといった支障は出ていない。どうやら普通に過ごせる——もといケンカができる程度には回復したようだ。

しかしあの人工呼吸器は本当に邪魔だったな。あまりにも邪魔だったんで病院から出る前にリングを握り潰す感覚で壊しちゃったよ。

「後は服だけか……」

ケンカができるという最高の収穫を得られたのはいいが、ここでの問題として挙げられるのは今のアタシの服装である。

寝ている間に着せられたであろうこの水色の病衣。意外と窮屈だ。ガキの頃に着た浴衣ほどじゃねえが、結構動きにくい。

それに加え、靴を確保する時間もなかったから病院のスリッパをそのまま履いている。場違いな病衣と合わさってさらに動きにくい状態なのだ。

……とはいえ悩んだところでどうにもならない。考えるよりも身体を動かす方が先決だ。いつ警邏隊に見つかってもおかしくないしな。

とりあえず人気の多い街中を避け、今いる路地裏の奥へと進んでいく。こんな格好で表に出ようものなら病院へ逆戻り確定だ。

「おっと。そっぴいや忘れてたわ」

その途中、服のポケットに手を突っ込みロケットペンダントを取り出す。安物だが病院から持ってきた唯一の品物だったりする。

「……チツ」

一応ペンダントの中を確認しようと開け、アタシと金髪少女のツーショット写真が目に入ったところで思わず舌打ちしてしまう。

クソが、チラ見なら大丈夫だと思ったアタシがバカだった。わざわざ病院を抜け出してまで距離を置いたのに、これじゃアイツと離れたくないって言ってるようなもんじゃねえか。

すぐさまペンダントをポケットに仕舞い、気を紛らわすべく左手に持っていたタバコを吸う。

「——おっ？」

喫煙自体が久しぶりなのでじつくりと堪能し、ぶはあーとだらしなく紫煙を吐いた瞬間、殴打によるものであろう鈍い音が耳に入ってきた。

音の大きさからしてすぐ近くだな。しかも鈍い音に混じって聞き覚えのある声もしたし。アタシがまともな服を着るためにも、これは見に行く必要があるそうさ。

堪能し終えたタバコを足下に投げ捨て、まだ火が付いているそれを軽く踏んづけてから音がした方へ視線を向ける。

するとそこには三、四人ほどのゴロツキ共を相手に戯れる、ポニーテール少女の姿があった。

「よお〜し……」

もしかするとこれはチャンスかもしれない。

そう思ったアタシは助走を付け、気づかれる前にクソガキを踏みつけるピアスの男目掛けてジャンプし――

「ごぼあっ!？」

――顔面に飛び蹴りをお見舞いした。

□

「えっ……えええ？」

――フーカ・レヴェントンは困惑していた。

自分を踏みつけていたピアスの男がいきなり吹っ飛ばされ、水色の病衣をその身に纏った女性が目の前に現れたことに。

女性はフーカの存在に気づいていないかの如く、彼女が相手にしていたゴロツキ達を一掃していく。控えめに言ってもシニールである。

フーカは割り込んできた女性を見て――自分の知っている人物だとすぐに気づいた。

服の上からでもわかる、スポーツ選手の視点で見れば完璧に引き締められた体。一度見たら簡単には忘れられない、鋭い目付き――

「お、緒方さん……!？」

――緒方サツキその人だった。

他の不良からは畏怖と尊敬の念を抱かれ、力ある者からは一目置かれ、この世界において最強のヤンキーと名高い“死戦女神”の正体である。

そんなサツキが二ヶ月前、腹部に風穴を開けられるという重傷を負って入院したのを、フーカは一度たりとも忘れたことがない。

なのにその入院中であるはずのサツキは今、目の前でスリッパを履いた足で小柄な男に前蹴りを入れ、先ほど飛び蹴りをお見舞いした男の顔面を鷲掴みにして後頭部から地面に叩きつけている。

おそらく、というか間違ひなく力技で病院から脱走したのだろう。どういう目的でそんな無茶をしたのかはわからないが。

「ははっ、もう終わりかよ」

と、フーカが考え込んでいたところでゴロツキの集団を片付け終え、つまらなさそうに呟いて痰と一緒に唾を吐くサツキ。

それにしても病衣とスリッパという、いかにも動きにくそうな格好で平然とケンカができるのはさすがと言ったところか。

「よおレヴェントン。久しぶりだな」

「あつ、はい……」

「時間がねえから単刀直入に言うぞ——」

未だに状況が把握できず、ポカンとした顔でサツキを見上げるフーカ。

サツキはそんな彼女の頭を鷲掴みにし、強引に立たせる。どうやらフーカが自力で立ち上がるまで待つ気はないようだ。

そして目が点になっているフーカの顔をジッと見つめ、どこからともなくタバコを取り出し、火の付いたそれを軽く吸って一言。

「——金、持ってる？」

□

「えーつと、ここにこうして、ここはこうで……」

「あ、あの……」

十分後。レヴェントンに助けた札として、彼女が持っていた金で裁縫セットを買ってもらったアタシは、町外れの廃墟で自分の服を縫っていた。

というのも、アタシが入院する前に着ていた服は店に売っていな



い、いわゆる非売品だ。だから自力で、それも一から作らなければならぬ。

しかし、今回は病院から抜け出して間もないため、素材や道具を買うお金なんて当然持っていないし、その時間も必要になる。

そこでゴロツキにやられていたレヴェントンを見て、絶好のチャンスだと白羽の矢を立てることにした。全くの偶然だがな。

「あ？ 今忙しいんだけど」

「な……なして病院から抜け出したんですか？」

やはりそう来るか。絶対に聞かれるとは予想していたが。

レヴェントンの質問にどう答えようか。アタシは一瞬迷ったが、コイツなら正直に話してもいいと思ったので嘘はつかないことにした。

「……いろいろあつたんだよ。いろいろな」

「いろいろ……ですか」

とはいっても何をどう言えば、どこからどこまで言えばいいのかわからなかったので、やむを得ず省くことにした。嘘はつかないとか言つといてこのザマだよクソが。

しみりとした雰囲気になったところで服が完成し、一刻も早く着ようと汗で少しべたついている病衣をその場で脱ぎ捨てる。

ここで露わになるのはアタシの Downing 姿。自分で言つちやうのもアレだが、そこらの女よりは整ったスタイルをしている。

——女性らしくない、無駄に引き締まった筋肉も含めて。いつの間に付いたんだか。

「わわ……っ！」

当然、まともな感性（多分）のレヴェントンは男性のアレを見たかのように赤面し、両手で真っ赤になった顔を隠す。

……いや待て。これがまともな奴の反応なのか？ 異性ならわからなくもないが、同性相手にその反応はどうかと思うぞ。

それでも気になるのか指の隙間からこちらを見つめていたレヴェントンだったが、視線を腹部へ向けたところで驚きの声を上げた。

「お、緒方さん。その傷は……」

「傷? ……ああ」

何故そこまで驚く。そう思っただけで彼女の視線を追うように自分の視線を腹部へ向け、納得した。

視界に入ったのは傷痕。それも身体中に付いているしよぼいやつとは違う、大きくて生々しい、腰辺りまで届いている刺し傷の痕。

……右腕の引つ掻き傷の痕もそうだが、こういうのは魔法で治せないもんなのか? それとも治せないレベルに達しているとか?

「気にすんな。もう治ってる……ッ」

アタシは元気だ、と言わんばかりに傷痕をグーで強めに叩いた途端、まるでバチが当たったかのようにズキツとした痛みが走った。

大口叩いという弱いところを見せるわけにはいかない。不安そうにこつちを見つめるレヴェントンをスルーし、作製した服を着る。

「ふむ……肌触りよし。サイズよし。柔軟性よし。強度よし」

我ながら完璧な服に仕上がっているな。よしよし、こうでなくちゃ。

続いてジーンズによく似た、それでいてジーンズとは違う素材で作ったズボンと靴を履き、蹴りの素振りでその心地良さを確かめる。

「よしよし、上出来だ。じゃあなレヴェントン、助かったぜ」

「へっ!?!」

何を言っているんだこの人は。唾然としたレヴェントンの顔から、そんな感じのメッセージが伝わっている気がしてならない。

さっきのゴロツキ共から略奪したタバコを一口吸い、とりあえずこの町を出ようと一歩踏み出したところで、

「ま、待ってください!」

レヴェントンに声を掛けられた。それも待ったの声を。

「……もうお前に用はないんだが」

「緒方さんにはなくとも、わたしにはあるんじゃない!」

どこか一歩下がった感じの態度から一変、以前揉めたときに見せた度胸ある態度でこちらを睨みつけるレヴェントン。

なんかムカついたので一発殴ろう。その答えへたどり着いたアタシが拳を握り込んだ瞬間、彼女の口から信じられない言葉が飛び出し

た。

「——お前についていってもよろしいじゃろーかッ!？」

アタシについていく。地球でいう広島弁じみたレヴェントンのそれは、標準語で言うところの舎弟になりたい的なものを意味していた。

真剣な表情のレヴェントンが馬鹿げた要件を言い終えると同時に、アタシは迷うことなく彼女の胸ぐらを両手で掴んだ。

これにより、凶らずともレヴェントンの身体を持ち上げることになったがどうでもいい。体格差あるからこうなるのは必然だしな。

「テメエ、それ本気で言ってるのか？ アタシについてくるのがどういう意味か、わかって言ってるのかゴラア!？」

「お……押忍……ッ!!」

念を入れてドスの利いた低い声で確認していくと、レヴェントンは少し苦しように顔をしかめながらもしつかりと肯定の意を見せた。

これ以上やると首を絞めかねないので雑ながらもレヴェントンを解放し、啞えていたタバコを吸って冷静に考え、ゆっくりと口を開く。

「……今までお前が積み重ねてきたもん、全部失うくらいの覚悟はあるぞ。それでも発言を撤回する気は?」

「ないです。あるなら最初から言ってます。それに——」  
「ああ?」

「——これがわしのやり方じゃ。自分がどうすればええか。その答えを見つけたいんです」

ここは譲れないと言わんばかりに拳を握り締め、まっすぐな瞳をアタシに向けるレヴェントン。この感じ、何を言っても無駄らしいな。

ここまで覚悟決められちゃあ仕方がない。その覚悟が正しいかそうでないかはコイツ自身が一番知っているはずだし。

「……………一年だ」

「えっ?」

「一年我慢してやる。それと——」

一旦言葉を句切り、ムカつきのあまり言いたくて堪らなかつたことをはつきりと告げる。

「——人にモノを頼むときは態度と言葉遣いに気を付けろ」

これでよし。タバコを吸い、彼女の嬉しそうな顔を一瞥して今度こそ町を出るべく歩き始める。

その途中、最初の進路をミッドチルダ南部に決めたとところで後ろを振り向いてみると、レヴェントンがちゃんとしてきていた。

——ヤンキーと孤児。似て非なる二人の関係はこうして始まった。

## 第2話 「さらば学校生活」

「……………(こ)も見納めか」

フーカ・レヴェントンという舎弟——もとい腰巾着——もとい付き添いができてから二日後。

アタシはある要件を済ませるべく、警邏隊やその他大勢に見つかるリスクを承知の上で、ミッド南部のエルセア地区にある高校へ訪れていた。

ここは言うまでもなく、アタシが通っている学校だ。ちよつとした有名人の知り合いがいて、当時は格上だった後輩もいる、市立の高校だ。

現在、時刻は夜明け。生徒はさすがにいないだろうが、警備員はいる。さつき一人で三階の廊下を歩いている姿が見えたし。

「よつと——あつ」

固く閉ざされている校門を飛び越え、鍵の掛かった正門を強引にブチ開ける。今のでちよつと壊れてしまったが気にしたら負けだろう。

……………いや気にしないわけねえだろ。甲高い金属音が校内に響いてしまったんだぞ。警備員が近くにいたりしたらすぐにやってくるわ。

背を低くして忍び足ならぬ忍び走りで廊下を進んでいき、目的地の一つである職員室に到着する。意外と近くにあつて助かった。

「チツ。やっぱ開いてねえか。だったら……………」

正門のようにブチ開けてもよかつたが、二度も同じ音を立てると確実にバレるため、方針を力ずくからピッキングへと変更する。

「えーつと、鍵穴にこのピックを入れて、鍵の開く音がするまで……………おっ?」

ピッキングは初めてだったので時間が掛かると腹を括っていたが、五回ほど鍵穴をピックで弄ったところで、カチャリという音が聞こえた。

今のを鍵の開く音だと判断し、大きな音を立てないよう、静かにドアを開ける。

もし鍵が開いてなかったらやり直しだったが、今回は成功したよう

でガラガラと開いてくれた。こういう音は大丈夫だろうか。

ポケットから一枚の封筒を取り出し、窓から見られないようしやがみながら、壁に沿って足を進める。キツイなこの体勢。

「よし——これで目的達成だ」

特にハプニングもなく担任の机にたどり着き、少し躊躇いながらもその上に『退学届』と書かれた封筒をそつと置く。

もうこここそ隠れる必要はないので窓を開け、脚に力を入れて跳び上がる。

目指すは——屋上だ。

□

「ふう〜……」

一つ跳びで到着した屋上、その一番高いところにて。いつものようにタバコを一口吸い、東から昇ってくる朝日をただただ眺める。

相変わらずここから見る景色は綺麗なもんだ。これはアタシの独断だが、初日の出が目じやないくらいには綺麗な眺めだと思っている。

誰もいない下の方へチラツと視線を向けると、以前は酷かった床のヒビがほとんどなくなっていた。どうやら復旧が進んだらしいな。

「……………」

今思えば、こんな取り柄しかない屋上でもいろんなことがあった——。

入学早々、ここを占拠しようとしたらガラの悪い上級生三人にケンカを売られ、喜んで——もとい仕方なく買った結果、ハイになって一人残らず血祭りに挙げてしまったな。

しばらく経ってから屋上を私物化するべく、炬燵とお手製の旗を設置。できる限り誰も近づけないように頑張ったつけ。最終的に約一

名——赤髪の侵入を許してしまったが。

その次の年——今年だな。今度は癖のある下級生にケンカを売られたからこれも買ったよ。でも上級生のときと違ってギリギリの勝利だったのは記憶に新しい。

——やっぱり、ここでの思い出と言えばこんだけしかねえわ。ほとんど寝てたし。

それでも、今のアタシにとっては大切な思い出と言っていい。アタシは今日を以って退学する。ここに来る機会はもう二度とないのだ。……正直言つて名残惜しいけどな。

学校の屋上はヤンキーの定番の一つだ。強者同士のタイマンが行われる場所として指定されることがよくあるし、単純にバカ共の溜まり場として使われることもよくある。

実際、アタシはそういう目的で屋上に留まっていた。格好のサボり場だったし、この学校のでっぺんに立っているみたいで心地よかったんだ。

でも、本当にてっぺんに立っていると実感したのは癖のある後輩をブチのめしたときだったな。あのとき見た景色はマジで心に残っている。

「おお………いい眺めじゃねえか」

朝日が完全に昇った瞬間、右手に持つタバコ存在を忘れるほど圧倒された。たった今呟いた通り、素晴らしい光景が出来上がったのだ。

雲一つなく、雑音も邪魔も入ってこない。そんな最高のシチュエーションで、最高に綺麗な朝日を見ている。あっぱれの一言に尽きる。

「——ん？」

朝日が昇ってからどれだけ時間が経ったのか。

その壮大な景色に見惚れていると、グラウンドに生徒が入ってくるのが見えた。ユニフォームを着てるってことは……運動部か。

ていうかマズいな、もうそんな時間か。全然気づかなかった。

「……………いくか」

今見ていた景色を忘れないよう、できる限り目に焼きつけ、きつき『退学届』を出したときよりも躊躇いながら、屋上から飛び下りる。そして大きな音を立てずに着地し、目に見えないほどのスピードで走り、近所の家の屋根を伝って学校を後にするのだった。

□

「——待たせたな」

「うわっ!？」

太陽の位置からして午前九時ごろ。アタシは学校から数十キロほど離れたところにある、比較的人気のない公園でレヴェントンと合流していた。

屋根から屋根へ、木から木へと跳び移りながら移動し、ちようどレヴェントンのそばにあった木から彼女の背後へ飛び下りたところだ。後ろから降ってくるとは思わなかったのか、驚きのあまり腰を抜かすレヴェントン。

前にも同じようなことはあったが、さすがに二回で慣れるのは無理だったか。

「んじゃ、行くぞ」

「も、もう行くんですか?」

当たり前だ。ここにも見つかるだけだし、用なんて何も無い。戸惑うレヴェントンを尻目に、新しいタバコを吸いながら歩き始める。

待つてくださいと言わんばかりにこつちを凝視していたレヴェントンだったが、大きなため息をついて立ち上がり、アタシの後に続く。

「緒方さん」

「なんだ?」

「ひ、一つ聞いてもええじゃろか」

どこか好奇心に満ちた顔のレヴェントンはそう言うと、意を決したように告げる。

「——学校たあどがいなところなんですか?」



……忘れてた。そういやコイツ、義務教育的なのは経験なかったんだっけか。

学校とはどんなところ、ね。正直、わからないどころかアタシが知りたいくらいである。

勉強する場所、青春する場所等々……。一般的な解答なら浮かんでくるが、アタシ個人の答えはなかなか出てこない。

「一般的には勉強するところ……って認識だな」

「勉強……何の勉強をしとるんでしようか？」

「さあな。ただ、アタシが知ってるのは二つ。クソみたいな執筆と運動をさせられること、友達ごっこをさせられることぐらいだ。他の奴らは楽しそうにしていたけどな」

アレの何が楽しいのか、アタシにはさっぱりわからない。前者はおふくろに散々仕込まれたからある程度はこなせるが、後者は吐き気がする。

何が友達だクソが。都合の良いときだけそう言っつて、用が済めばすぐに切り捨てる。例外もいるにはいるが、基本的にはこんな奴らばかりだ。

今のは全部アタシ個人の意見なんだが、レヴェントンはアタシの言ったことを真に受けたくらく、わりと真剣な顔になっていた。

「リンネの奴は何が楽しくて学校に行つとるんじゃないやろか……」

「個人の意見を真に受けんな」

タバコを一口吸い、天に向かって紫煙を吐く。真面目な奴だとは知っていたが、ここまでバカ正直な奴だとは思わなかったぞ。

ていうかリンネって誰だっけ……。ああ、ベルリネッタのご令嬢か。確か格闘技をやってるんだったな。全然覚えてねえが。

トントんとタバコの吸い殻を落としていると、レヴェントンが何かを思い出してハツとした感じの表情で話しかけてきた。

「これからどうするんですか？ わしとしては、生活のためにも新しい職を見つけないんですか……」

「あー……そんなら一週間以内に見つけてこい。無理なら置いてく」

「そ、そげな無茶な……」

お前の生活事情なんざ知ったことじゃねえよ。テメエがそうして  
る間にも、アタシは進んでいく。決して立ち止まりはしねえ。

むしろ一週間の猶予を与えたことに感謝してほしいもんだ。本当  
なら問答無用で切り捨てていたのだから。これも例外つてやつか？

立ち止まったレヴェントンには目もくれず、次の行き先を考えなが  
ら足を進めていく。

「どこ行きやいいのかわかんねえな」

行くところは行ったからな。強いて言うなら北部には一度も足を  
踏み入れてないが……あそこには聖王教会とやらがあるしなあ。

はつきり言って行きづらい。例えるなら力なきヒヨロヒヨロが、無  
防備で敵のアジトに突っ込んでいくようなもんだ。

……でもまあ、今は行くところ、そこしかねえな。気が引けるけど、そ  
こしかねえな。

「……仕方がない。おいレヴェントン」

「は、はいっ」

「北に行くぞ」

今までミッドチルダ北部はとことん避けていたが、それも今回で終  
わりだ。

吸っていたタバコを投げ捨て、人に見られないよう路地裏に入り込  
む。

レヴェントンは……ついてきてる、か。認めたくはないが、やはり  
本気のようなだ。まあ、アイツと違ってあまり文句は言わない分はマ  
シカ。

「はぐれたら置いてくからな」

「緒方さん、さっきからそれしか言うたらんのじゃが気のせいとか!？」

残念ながら気のせいではない。普通なら冗談で終われるだろうが、  
アタシの場合はマジだ。

「……………はあ」

確かに屋上での出来事を除けば、ろくな思い出なんざこれっぽっち  
もねえよ。行ったところで何も学べちゃいないし、学ぶ気もなかつ

た。

そんなの、誰かに言われなくてもわかることだ。でも、それでも登校してたってことは全部が全部クソってわけじゃない。心のどこかで、そう思ってたのかもしれないねえな。

「ありがとうとは言わない。だけど、過ごした時間は本物だったよ。」

「もう一本吸うかあ……」

——さようなら、アタシの学校生活。

### 第3話 「廃棄都市区画」

「こんなところがあったとはな」

レヴェントンに一週間の猶予を与えた日の夜。

警邏隊や管理局に見つからないよう、コソコソと北に向かっていたアタシは、ついに念願のミッドチルダ北部へ足を踏み入れた。

そんでさっそく例のJS事件とやらが起こった、廃棄都市区間を呑気に口笛を吹きながら見物していたのだが、近くに空港らしき場所があったのでそこへ向かい、今に至る。

確かここは……大火災が起こったせいで閉鎖されたところだった気がする。少し前まで使われていた形跡はあるものの、今は誰もいない。

「ふう……これからどうすっかなあ」

当面の目的は達成したのはいいが、その先を全く考えてなかった。

子犬のようについてきそうなレヴェントンとも別行動中だし、呼び出そうにも通信端末の電源が切れているから無理だし。

そうだ、いつその事ここに拠点でも作っちゃうか？ 暑さや寒さを凌げないのが痛い、路地裏で汚く野宿するよりはマシだからな。

とりあえず何かないかと散策していると、すぐ近くに奇妙なデザインのお面が落ちていた。それも一つではなく、三つほど。

「……………これ、使えるか？」

何でこんなところにお面があるんだ。そう思いながらも、活用自体はさせてもらうことにしよう。特に壊れているわけでもないし。

上着のフードだけじゃ顔は隠しきれねえからな。そういう意味では貴重なアイテムだ。まあ強度がわからないから慎重に使う必要はあるな。

さっそく三つのうちの一つ、民族的なデザインのお面を付け、周りを見渡す。うーむ……視界が狭いことを除けば問題はないが、こればかりはどうしようもないか。

お面を少しずらし、タバコを一口吸って紫煙を吐く。この状態、面の端が鼻元に引っ掛かってる感じで凄く息がしにくい。

「おいねーちゃん。ここは俺らの場所だぞ」

タバコを足下に投げ捨て、ずらしていたお面を戻したところで、五人ほどの男性グループが堂々と正面口から現れた。見かけと雰囲気は大人しそうな奴らばっかだ。

——滾るような殺気までは隠せてないが。

連中の容姿を観察していると、三人の男がアタシの見つけたやつと同じデザインのお面を持っていた。持ち主はコイツらか。

しかも女のアタシを性的な対象ではなく、単純に敵として認識している。まあすぐさま攻撃態勢に入らない辺り、比較的穏便だな。

「痛い目見たくなけりやさっさと失せろ」

「お断りだね。どのみち見逃してくれない奴の言うことなんか聞くとでも思った？」

ゆっくりと立ち上がり、足下のタバコを踏み潰して背筋を伸ばす。

お面のせいで周りを見渡せないが、じりじりはこちらへ歩み寄る音が複数聞こえてくる。

いつでも動けるよう、両脚に力を入れ、自然体のまま脱力して気配を探る体勢を取る。

そして、戦争の引き金を引くかのように——

「——来いよ」

たった一言。そのたった一言で状況が動いた。

さっそく背後から何らかの攻撃を仕掛けてきた奴をかわし、すれ違いざまに腹部へ鋭い蹴りを入れ、顔面に右膝をブチ込む。

次に至近距離から額目掛けて撃ち出された銃弾を咄嗟にキャッチ。それを握り締めたまま銃を構えるバンダナの男を殴り飛ばし、銃弾を粉々になるまで握り潰す。

これにより鉛の粉末が出来上がり、それを払い落とそうとしたところで脇腹を鉄パイプらしき鈍器で殴られ、体勢を崩されてしまう。

「隙ありっ」

「チイツー」

その瞬間を好機と見た茶髪の男が振り下ろした質量のあるナイフを、彼の頭を片手で掴み、頭上を舞って背後に回り込むことで回避。

すかさず首元へハイキックを叩き込む。

茶髪が沈んだことを確認し、間合いを詰めてくるマスクの男を、沈めた茶髪を片手でタオルのように振り回し、マスクの顔面にぶつける。

さらに間髪入れず茶髪をぶん投げ、右から迫っていた三人の男をまとめて仕留めると同時に、彼らの武器であろう拳銃を踏み潰した。

「っ……最近のゴロツキはこれがデフォなんかねえ？」

いつものように痰を吐こうとするも、お面を被っていたことを思い出し、口内に痰を溜めたところでそれを飲み込んだ。

……てかコイツら、ただのゴロツキにしちゃあ物騒すぎねえかこれ。得物持つてる奴の大半が拳銃持ち何だけど。素手の奴がいないんだけど。

リーダー格だけが持つているのを見たことはあるが、リーダー格のみならず下っ端までもが当たり前のように所持しているのは今回が初めてだ。

——また厄介事に首を突っ込んだか？

だとしたらちよつとマズイな。こういうのは大体、警邏隊や管理局の連中が出しやばってくる。いや、それだけならまだ大丈夫。

問題なのは、ここがベルカ自治領だということ。領内には管理局とも繋がりがある、聖王教会の本部が存在している。

古代ベルカの聖王とかいう訳のわからんものを崇める、次元世界で最大規模の宗教団体。それだけなら大丈夫、まだノープロブレム。

マズいのは教会と繋がりのある管理局と、団体の一部である教会騎士団なる戦闘集団だ。

管理局だけでもめんどくさいのに、それなりに強いであろう騎士団が加わると万全の状態でも手に負えない可能性がある。

……違った、手に負えないのは管理局の方だ。騎士団は人数次第でどうとでもなるわ。数が多いと増援を呼ばれてしまうからな。

まあ、とりあえず——

「——さっさとくたばりな！」

「(っ)はアー！」

いつものドスを利かせた低い声ではなく、大人の女性っぽい高めの声を出しながら、目の前に迫っていた男へ頭突きをかます。

お面で充分だから別に隠さなくてもいい——と思っていたが、よく考えたらアタシは失踪中の身だ。できるだけ隠しておくべきだろう。

「このアマツ!?!」

復活した茶髪が背後から刺そうとしてきたので、かわしながらナイフを持つ右腕を脇に抱え込み、左の肘を裏拳のように振るってこめかみへ叩き込み、最後に頭部を蹴りつける。

今度は念のために気絶した男からナイフを奪い取り、それを銃弾の時と同じように、連中に見せつける形で粉々になるまで握り潰す。

ここで一旦距離を取り、一息ついて状況を確認する。最初は十五人もいた男達も、気づけば半分の七人にまで減っていた。

「どうすんだよ! このままじゃ全滅するぞ!?!」

「せっかく盗むもん盗んだつてのに……っ!」

「バカッ! 口に出すな!」

こちらに聞かれるとマズイのか、リーダー格が下っ端を黙らせる。しかし残念、耳の良いアタシには嫌でも会話の内容が聞こえていた。

盗むもん、ねえ……。

どうやらこの連中、強盗の類っぽいな。さつきから隠すように置いてある大きな袋を見る限り、結構なものを盗んだようだ。

この手の連中が盗むものと言えば、大体が売れば金になるものだ。

——アタシが頂戴するのもアリだな。

「ごちやごちやと喋ってんじやないよ。来ないならこっちから行くぞっ!」

ちよつとだけ口調を変え、一人一人が適当に魔力を練りながらも、なかなか攻撃してこない連中に向かって足を進めていく。

……どうか奴らの盗んだものが、金になるものでありますように。

□

「く、クソが……ッ」

「はい終了〜」

最後の一人をクレーターが生じるほどのパワーボムでブチのめし、ソイツが腰に付けていたラジオのような小型の機械を奪い取る。

あれから全員仕留めるのに五分も掛かったが、腹部に拳を二発ほど叩き込まれただけで苦戦はしなかったよ。ダメージも大したことなかったし。

さっそく強奪したラジオのスイッチを入れ、連中が守っていた大きな袋の中を確認する。さーて、何が入っているのやら。

「これ……宝石か？」

袋に入っていたのは宝石のように綺麗な、地球でいうところの鉾石みたいな石だった。というか間違いないこの世界の宝石だな。

ルビー、サファイア、エメラルド、プラチナ、その他諸々。見かけだけならそれらの宝石と何ら変わりないが、表面の質が微妙に違う。

一息つこうとタバコを取り出し、オイルライターで火をつけて一口吸ったところで、ラジオからアナウンサーの綺麗な声が流れてきた。

『次のニュースです。今日の午後六時頃、ミッドチルダ中央区の宝石店で強盗事件が発生しました。犯人グループは今もなお逃走中と見られ、警邏隊による捜索が進められていますが、発見には至っていないとのこと——』

アタシがボコった連中、マジで強盗だったらしい。グループだし、宝石店で盗みを働いてるし、実際に盗んでいたものは宝石だったし。

どうもニュースの内容からして、まだ他の地域には捜索の手が伸びていないようだ。

まっ、それでも見つかるのは時間の問題だろう。さっきまでちゃんと魔法使ってたからな。それを管理局辺りにサーチされた可能性はある。

……となればアタシも危ないな。さっさと宝石とお面をもらってズラかるとしますか。宝石はその手の連中にでも売り飛ばせばいい。「ひいーふうーみいー……これで全部だな。時間もないし、さっさと行くか——!？」

袋に入った宝石を数え終えた途端、神経という神経に寒気が走っ



た。

今まで感じてきた寒気とは別の意味で比較にならない。まるで大鎌を持つ死神が、命の終わりを告げに来たかのような寒気。

それが現在進行形で、しかもかなりのスピードでこちらへと近づいてきている。

完全にしくじった。宝石のせいで周囲への警戒を怠っていた……！

よし、一旦落ち着け。アタシがこうして考えている間にも、敵はどんどん距離を縮めている。走って逃げるのは不可能に等しいだろう。

「あー、あー！」

こうなったら素性がバレないように適当に相手しつつ、上手く逃げるしかない。

急いで地声を隠すべく再び高い声を出し、近くにあったマンホールのふたを開け、宝石の入った袋をやや強引に押し込む。

「——動かないで」

マンホールのふたを閉め、廃墟の屋上へ上ったところで制止の声を掛けられ、同時に金色のバインドで拘束されてしまう。

バインドを引き千切りたい衝動を抑えつつ、ゆっくりと声がした方へ振り向く。

そこにいたのは黒を基調としたバリアジャケットを纏い、月をバックに綺麗な金髪をなびかせる一人の美女だった。

大鎌みたいなデバイスを構え、周りの状況を確認した彼女は紅い瞳を細めると、凜とした声でアタシにはつきりと告げる。

「時空管理局執務官、フェイト・T・ハラオウンです。速やかに投降してください」

さあ、ここからが本当の地獄だ——。

## 第4話「やるしかない」

——マズイなこれは。

時空管理局の執務官であるフェイト・T・ハラオウンにバインドで拘束され、迂闊に動けなくなったアタシは、顔を隠すために被ったお面の下で非常に険しい表情をしていた。

アタシを拘束したのがその辺のチンピラやマフィア、無法者なら問題にすらならない。いつも通り殴り飛ばせばいいのだから。

だが、今回は相手が悪すぎる。目の前にいるのは警邏隊同様、法の下に犯罪者を討てる管理局員。それも実績のある執務官ときた。

入院先の病院から脱走してまだ二日。失踪中で身バレを避けるアタシにとって、コイツが最悪の敵であることは間違いないだろう。

「——被疑者らしき人物を拘束しました」

この場をどう切り抜けようか。アタシがそう考えている間にも、テスタロツサは誰かと連絡を取り合っていた。連絡先は警邏隊か本部ら辺か。

まあどちらにせよ、状況がさらに悪くなった。このままじや魔力サーチか、お面に隠した素顔を見られるかで身元がバレてしまう。

それに先ほどのテスタロツサの会話内容を聞く限り、増援を呼ばれた可能性もある。

——やるしかない。

「何をやって——!?!」

アタシはすぐさま行動に移った。自分を拘束していたバインドをあつさりど振りほどき、テスタロツサが動く前に全力でその場から離脱を図る。

その際、アタシが通過した直後に衝撃波——ソニックブームが発生し、不意を突かれたテスタロツサが足止めを食らっていた。

——さてどう撒こうか。

相手はまだ一人なので真正面から戦ってもいいが、後のことを考えるとこれが妥当な選択である。情けないと本気で思うが。

そして今回に限るが、戦うのはあくまで最後の手段だ。地球じゃヤンチャが過ぎて、この手の選択で何度も痛い目見たからな。

全力疾走しつつ、周囲の廃墟を忍者の如く跳び跳ねながら、廃墟都市区画の外にある川を目指す。水に入りさえすればこっちの勝ちだ。

「止まりなさいっ！」

声が出た方……上の方へ振り向くと、お怒りのテスタロッサが驚異的なスピードで、飛行魔法で飛びながら追い上げてくるのが見えた。ふざける。こちとら失踪中の身なんだぞ。捕まったらこれまでの苦労が水の泡だつてのに、止まるわけねえだろうが。

少しずつ距離を詰めてくるテスタロッサを振り切るべく、妨害目的で廃墟の一部を破壊しつつ、廃墟と廃墟の間をジグザグに進む。

「この……！」

効果はあったようでも鬱陶しそうに端正な顔を歪め、アタシが通った跡を丁寧に飛びながら追いかけてくるテスタロッサ。

すかさず近くにあった柱を蹴りで破壊し、その破片を彼女目掛けて蹴り飛ばす。

ちよつとだけ当たればいいと思っていたが、凜とした顔になったテスタロッサはそれを最低限の動きでかわしていた。

ならばこれはどうか。

「ッ、ラァ……！」

「岩塊……!?!」

一旦立ち止まって右腕に力を込め、建物の壁を引き剥がし、そのまま持ち上げ間髪入れずに、これもテスタロッサ目掛けてぶん投げる。

瓦礫となった建物の壁を今度は細めていた目を見開き、身体を螺旋のように回転させながらスレスレで回避するテスタロッサ。

その隙にアタシは全力で走り出し、再びソニックブームを発生させる。

これが破片みたいに小さかったら何の問題もなかったろうが、アタシが投げたのは十メートル以上もある巨大な瓦礫。

そんなものが唸りを上げ、高速で迫ってくるのだから堪ったもんじゃねえ。

「クソ……ッ」

が、それでも全然振り切れない。やっぱり飛んでいるってのが大きい。

隠れようにも向こうは広範囲をサーチできるから簡単にはいれないし、隠れても逃走経路を確保していないと手間が掛かってしまう。というか、それでどうにかなるなら最初にそうしてる。

しかもサーチのせいで砂埃や雑音を使った攪乱は迂闊にできねえし、気配を消そうにも姿が丸見えの状態じゃ意味がない。

チツ、魔法の使用による差がこんなところで明確になるとはな。今だけは身バレを気にせず魔法を使用できる連中が羨ましいぜ。

「ッ……」

「追いついたッ！」

ほんの一瞬、腹部に痛みを覚えると同時に回り込まれてしまう。おい誰だ戦うのが最後の手段だったバカは。このままじゃマジでそれしかやることなくなっちまうじゃねえか。

もう一度テストタロツサを振り切るため、脱力した自然体で左、右、左、左、後ろ、前、右の順に動いて揺さぶりを掛ける。

これはガキの頃、テレビで見たバスケット選手の動きをそのまま再現してみたものだ。

さすがに思い付きだけのものじゃダメかと思っただが、テストタロツサはこの動きを目で追っていた。意外と効果あるのね。

——ここだっ。

「あっ……!?!」

テストタロツサの身体が右に傾いたところを狙い、左側から彼女を抜き去る。

全力で動いたので三度ソニックブームが発生するも、三度も同じ手が通用するかと言わんばかりに平然と追ってくるテストタロツサ。

にしても廃墟都市の外までそう遠くはないはずだが……それともアタシの感覚がおかしいだけで結構な距離だったりするのか？

「ハア、ハア……………」

確かにさつき、一瞬だけ腹部に痛みを覚えた。二日前よりはマシなものだったが、この場合は無理をすると悪化のパターンだな。

しかも久々に全力で逃げ回ったせいか、戦う気力は残っていてもスタミナ的にはもう限界と言っている。喫煙者の宿命ってやつか。

「……………」

完全に足を止め、追いついたテストタロツサと真正面から対峙する形になる。悲しいが、これ以上の逃走は厳しいと見た。

ホントに誰だよ戦うのが最後の手段だったバカは。その手段を今使うはめになっちまったぞ。

ひとまず体力回復に専念するべく、少し乱れた息を整え、

「——い、行くぞ」

「っ!」

鎌型のデバイス——バルディッシュを構えるテストタロツサとの間合いを一瞬で詰め、渾身のハイキックを繰り出した。

一気に距離を縮められたことに驚愕の色を見せるも、冷静に迫り来る右脚を屈んで回避し、バックステップで距離を取るテストタロツサ。

思わず素の声で喋りそうになったが、咄嗟に声色を一般女性のそれに変えたから問題はない。

「プラスマランサー……………」

テストタロツサが周囲に発射体——スフィアを八個ほど生成し、その一つ一つに環状の形をしたものが取り巻かれていく。アレも魔法陣かな。

アタシもすぐさま一瞬の隙も与えないよう、五感が最も研ぎ澄まされる脱力した自然体で構える。ここまで集中するのは二年前のインターミドル以来か。もちろん例外を除いてだが。

「ファイアー!」

という掛け声と共に、スフィアから槍のような魔力弾が発射される。

スフィアが八個なので弾幕の数はキツチリ八発だと思っていたが、その倍の十六発くらいは発射されている。しかも連射で。

スタミナが切れかかっている今、あの弾幕を動いてかわすのは難しい。なので両手の甲を使い、一つ一つ受け流すように弾いていく。……思ったより体力使うなこの動き。普通に弾いた方が良かったかもしれない。

「——ッ!?!」

気づかれないように一息ついたところで、背後からテスタロツサとは別の、今までのものとは比較にならない寒気を感じた。これは……。

「無駄だよ……ターン」

テスタロツサの言葉を聞いてハツとなり、後ろを振り向くとついさつき弾いたはずの弾幕全てがこちらに向かっていた。こりや誘導弾か。

Uターンして戻ってきた弾幕を今度は壊さずに受け止め、一つに纏めて握り潰す。

いつもなら螺旋の回転というおまけ付きで弾き返すのだが、相手は顔見知り。それをやるだけで正体がバレてしまう可能性も拒めない。

「はあああぁっ!」

握り込んだ右手を開いた直後、背後から気合いの入った掛け声と共に、テスタロツサがバルディッシュを振り下ろしてきた。

アタシはその攻撃をバックステップで回避し、助走からの鋭い蹴りを彼女の顔面に放つ。

が、それを直撃する寸前でかわされ、再び背後を取られてしまう。

今までいろんな奴と戦ってきたが、コイツはそこでもかなり速い。迷彩幻術ミラージュユナイトで小細工していたバカと違って、単純に速い。

「ふっ!」

「ッ!」

アタシは水平に振るわれたバルディッシュの魔力刃を屈んでかわし、テスタロツサは上体を少しだけ後ろへ反らすことで、アタシが屈んだ状態から右手を地面について身体を支え、斜めに跳ね上げる感じで繰り出した左脚をかわす。

「はぁっ!」

「ッ!!」

続いて立ち上がったところを魔力弾で狙撃され、回避した直後に振り下ろされたバルディッシュの魔力刃を片手真剣白羽取りで受け止め、空いている左手を拳に変え、それを本気で突き出すことで矢のような拳圧を飛ばした。

テストタロツサはこれをバルディッシュでガードするも、威力は殺せなかったようで数メートルほど後ろへ引き摺られてしまう。

もちろんその機会を逃すわけがなく、両脚に力を入れ、彼女が体勢を整えるよりも先に間合いを詰めて後ろ回し蹴りを放った。

「ぐあ——っ!？」

体勢を崩していたこともあり、咄嗟に魔法陣を展開して蹴り自体は防いだものの、やはり威力を殺しきれずに吹っ飛んでしまい、踏ん張ることなく廃墟の壁に激突するテストタロツサ。

それにしても、管理局の執務官を相手にここまでやれるとは思いつしなかったな。

向こうはまだまだ本気じゃねえだろうが、これならヴォルケンリッターの騎士が相手でも、ある程度は大丈夫かもしれない。

「いたた……」

瓦礫の中から姿を現し、呑気な声を出しながら立ち上がるテストタロツサ。その際、一瞬だけ顔を歪めているのが見えた。

バリアジャケットの構造を見るに機動力でも重視しているのか、どうやら装甲は薄いらしく相応のダメージを受けているようだ。

「……まさか君のような子供に、ここまで手こずらされるとは思わなかった。だから——」

ガシャンツ、というロードらしき音が二回ほど聞こえ、テストタロツサの身体が光り出す。音源はバルディッシュか。

……待てコラ。コイツ今アタシを子供扱いしやがったぞ。どこをどう見たら190近くはあるガタイの女を、顔も見ずに子供認定できるんだよ。

「——ちよつと本気でいくよ」

そう言つて光の中から現れたのは、装甲が薄くなったテスタロッサ  
だった。



## 第5話 「金の閃光 V S 死戦女神」

「……………」

「……………」

元々薄めだったバリアジャケットの装甲をさらに薄くし、バルデイツシュを鎌から二刀流に変形させ、痴女同然の格好で構える執務官のテストロッサ。それを見て、アタシも迎え撃つべく脱力した自然体の構えを取る。

完全に物理的な防御を捨て、極限まで機動力に特化した形態。しかもさっきまでの——通常のスピードからして、攻撃を当てるのはより難しくなっているに違いない。

逆に言えば一発当てるだけで勝てるが、それはテストロッサ自身が一番よくわかっていているはずだ。集中力も尋常じゃないし。

右足をほんの少し、滑らすようにジリジリと音を立てながら動かすと、テストロッサもそれに反応し、右手に力を込める。

なるほど。いつでもいけるってか——

「——ッ!!」

「はああっ——」

時間にしてほんの一瞬だった。テストロッサの姿が視界から消え、背後から殺気を感じ、彼女の大きな声を聞いたのは。

上半身を狙ったであろう攻撃を見ずに前進して回避し、すぐに振り向くとアタシが立っていた場所をテストロッサの双剣が薙いでいた。

身体を前のめりにし、踏み込んだ右脚に力を入れ、地面を蹴ってテストロッサに肉薄するも、攻撃を仕掛ける前に距離を取られてしまう。

「リア……ッ——」

咄嗟に両足でブレーキを掛け、完全に停止したところで右拳を突き出し、拳圧を飛ばす。

テストロッサは自然現象のように迫り来る拳圧をかわし、一定の間合いまで詰めると両手の剣を振り上げ、二本同時に振り下ろしてきた。

攻撃が斬撃というのもあるが、今のアタシにそんなものをどうにか  
できる力は残っていない。

すぐさま右に逸れて回避し、右のアッパーを繰り出すも上体を後ろ  
へ反らすことで避けられたが、追撃を入れるため真上に跳び上がり、  
テスタロツサを踏み潰そうと両足を突き出す。

テスタロツサは余裕を持ってかわし、空中へ離脱するとバルディツ  
シュを双剣から戦斧に変形させ、二回ほどロード音を立ててから前方  
に程よい大きさの魔法陣を展開した。

当然、突き出した両足は地面に突き刺さり、凄まじい轟音と共に巨  
大なクレーターを生み出す。この踏みつけをやると毎回こうなるな。

まあこれは想定内だ。こんなもん、スピード特化のテスタロツサに  
当たるわけがない。

……さつきから聞こえるロード音の正体はカートリッジシステム  
か。

アタシの記憶が正しければ、アームドデバイスという武器型のデバ  
イスに搭載されている、魔力込みのカートリッジをロードすること  
で、瞬時に爆発的な魔力を得られるシステムだ。

欠点はその分制御が難しく、さらにミッドチルダ式の魔法や繊細な  
インテリジェントデバイスとの相性が悪いことだが、どうやらテスタ  
ロツサのデバイスはそれを克服しているらしいな。

「トライデント——スマッシャー！」

地面から足を引き抜いた瞬間、空中でスタンバっていたテスタロツ  
サが、左手から三ツ又の矛みたいな砲撃魔法を発射してきた。

チツ……最悪の形で先手を打たれたか。ただでさえ全力疾走で疲  
労困憊なのに、ここで雷の砲撃とか追い討ちにも程があんだろ……!?  
「ぐう……ガア……!!」

その場で地面が酷く陥没するほど強く、かつ自分の身体を固定する  
ように踏み込み、両手を突き出して砲撃を受け止める。

それと同時に両手から全身に掛けて電流が走り、徐々に感覚が麻痺  
していく。

ただアタシは腕の力を緩めない。少しでも気を抜けば押し切ら

れるからだ。

「——オラアッ!!」

「なっ……!!?」

バルデイツシュを戦斧から双剣に戻したテストアロッサが、目にも止まらぬスピードで背後に回り込む姿をしつかりと視認し、肉薄してきたところで受け止めていた砲撃の軌道を、身体を捻るように動かして後ろへと逸らす。

アタシが受け止めた砲撃を自分に向かって逸らしてくることは想定していなかったのか、目を見開いて驚きの声を上げ、咄嗟に加速してその場から離脱するように回避するテストアロッサ。

そこへ追い討ちを掛けるべく両脚に力を入れて跳び上がり、テストアロッサの背後に回り込んで組んだ両手を脳天目掛けて振り下ろす。

テストアロッサはこれを見ずに交差させた双剣で防御するも、威力を殺しきれず地面へ叩きつけられそうになるも、ギリギリ飛行魔法で踏ん張り、一息ついてゆっくりと着地した。

……：：：：「いや砲撃を逸した際、素の声はモロに出ちまつたな。向こうが聞いていなければいいが、ちよいとヤベエかもしれない。」

「んなろ……ッ!」

アタシは着地すると同時に全力で地面を蹴りつけ、ソニックブームを引き起こしながら再びテストアロッサの背後を取り、彼女がこちらへ振り向いたところを狙い、少しだけ跳び上がったハイキック——延髄切りを放つ。

不意を突かれたこともあつてか、テストアロッサはアタシが放った右足をバックステップでかわし、反撃はせずに一定の距離を保つ。

次に逃がすまいと握り込んだ右の拳を溜めるように構え、間髪入れることなくそれを全力で打ち出し、今度は周囲への被害と身体への負担を顧みないほどの凄まじい拳圧を飛ばす。

これにより、攻撃の反動によるものであろう全身の骨が軋む音が聞こえるも、顔には出さず歯を食いしばって必死に堪える。

飛ばされた拳圧は驚異的な速度で瓦礫や小さな廃墟を破壊しながらテストアロッサに襲い掛かるも、彼女はまたこれくらいならと言わん

ばかりにあっさりとかわし、

「ハーケンセイバー！」

いつの間にか双剣から最初の大鎌へと変形させたバルディッシュを振るい、三日月の形をした金色の刃を飛ばしてきた。

放たれた刃は飛翔しながら高速回転し、三日月から円形状へと変化するしながら、攻撃の反動でその場に止まっているアタシに迫ってくる。当然、そのまま食らって上半身と下半身が綺麗に真っ二つになるのはごめんだ。例え向こうが非殺傷設定にしていようとも。

「グウ……！」

なのでアタシは一步も動かずに右を向きながら上半身を大きく後ろへ反らし、円盤のような刃をどうにか避けることに成功した。

——と、思っていた。

「ん……!?!」

回避した金色の刃を目で追っていると、いきなり刃が方向転換してこちらへ戻ってきたのだ。しかも弾幕の時と違って合図がなかったのを見るに、どうやら自動追尾っぽいな。

さっきのプラズマランサーといい、このハーケンセイバーといい、コイツの使う飛び道具系の技は誘導型ばかりじゃねえか。

「チツ——ラア……!!」

そうとわかればやることは一つしかない。

後ろへ大きく逸らしていた上半身を急いで起こし、目前まで迫った金色の刃の側面を、両掌で押さえ込むように受け止める。

「あつっ……!?!」

それでも刃の高速回転は止まらず、アタシの手を摩擦で容赦なく焦がし、アタシの胴体を切断しようと猛獣の如く暴れ続ける。

ちなみにこれを飛ばした張本人であるテストタロツサは、さっきから飛行魔法で宙に浮いたまま何もしてこない。追撃してこないのを見る限り、この技に自信があるのだろうか。追撃してこないのを見

つと、そんなことを考えている場合じゃねえな。

「ナ、メんなア……!!」

両腕にできる限り力を入れ、受け止めていた金色の刃を粉々に砕

く。

「——ッ!？」

が、その直後だった。

アタシがハーケンセイバーを破壊して消耗するのを待っていたかのように、テストarroツサはアタシを金色のバインドで拘束したのだ。

しかもお面越しに殺意の籠った視線を向けるバツテバテのアタシとは異なり、テストarroツサは涼しい顔で息一つ切らしていない。

「ここまでだよ。諦めて投降しなさい」

あれだけ体力を消耗したんだ。もうバインドを振りほどく力も残っていないはず。

そう思ったのか、アタシの顔を隠している民族デザインのお面を取ろうと、空いている左手をゆっくりと伸ばすテストarroツサ。

「っ……」

冗談じゃねえ。ここまで来て、というか病院から脱走してこれといったことはまだ何もしていないのに、終われるわけねえだろうが……!

「■■■■■■■■——ッ!!」

バインドで拘束されたまま力を溜める体勢を取り、天に向かって——いや、目の前のテストarroツサに向かって獣の如き咆哮を上げる。

「う……うう……!!」

廃墟都市区画全域を振動させるほどの大音量が響き渡り、ほぼゼロ距離でそれを聞いてしまったというのもあり、端正な顔を歪め、魔力を纏った両手で耳を必死に塞ぐテストarroツサ。

その隙に胴体に掛けられたバインドを力づくで振りほどき、無防備になっているテストarroツサの腹部へ渾身の左ボディブローを叩き込み、ほぼ同時に音の嵐を終わらせる。

「が……はあ……!!」

バリアジャケットの装甲が薄くなっている状態で食らったこともあり、目を点にして血を吐きながら腹部を押さえるテストarroツサ。

そんな主人を見かねたのか、バルドイツシユは独断でカートリッジを四回ほどロードする。

「ツ……!?」

その直後、全身の血が冷え渡って、動悸が高まるのを感じた。

早いところカタを付けないと、奴が何をしてくるかわかったもんじやねえ。

すぐさま彼女の頭を両手で掴み、しっかりと固定して左の膝を三回ほど顔面に突き刺し、最後にハイキックで地面へ叩きつけた。

「はあ、はあ……………」

テスタロツサが動かなくなったのを確認した途端、安堵したかのように息が乱れる。

装甲の薄い相手にこれだけ重いのを叩き込んだんだ。くたばりはしなくとも、かなりのダメージは確実に与えたはず……。

倒れ伏しているテスタロツサからできるだけ距離を取り、廃墟に身を隠していつでも逃げられるよう周囲への警戒を強める。

まあ兎にも角にも、これで邪魔者はいなくなった。逃げる方法も考えてあるし、後は気配を殺して体力の回復を待たただけだ。

「ふう……………」

それにしても、まさか勝ってしまうとは思いもしなかった。ある程度動きを鈍らせてから逃げるつもりだったのだが、テスタロツサの強さが予想外過ぎたので話にならなかったのだ。

安心しきったアタシは、そろそろ邪魔くさくなってきたお面を取ろうと――

「――残念だけど、そうは問屋が卸さないよ」

お面を取ろうとしたところで、凜とした声が聞こえると同時にしゃがみ込み、腰目掛けて振るわれた双剣をかわす。

そして足払いで双剣の持ち主を牽制し、距離を取られたところでその姿を視認する。

「チツ、マジかよ……………」

苦虫を噛み潰したような顔になり、思わず素で舌打ちをしたアタシは絶対に悪くない。

「まだ、終わってないから……!」

何故ならそこに立っていたのは、傷だらけの顔で双剣を構えるテスタロッサだったのだから。

## 第6話「敗走」

「まだ、終わってないから……！」

傷だらけの顔で双剣を構え、脚を多少震わせながら啖呵を切るテストロッサ。

スピード特化の紙装甲であるにも関わらず、アタシの連撃をモロに食らってもなお立ち上がり、反撃までしてくるとは思わなかった。

それに加えて今のも危なかったわ。お面を取ろうとするのがもう少し早かったら、確実に身バレして社会的に詰んでいたに違いない。

一体どうやって反撃するだけの体力を残していたのか。

気になったアタシがテストロッサの全身を舐め回すように観察していると、彼女がそれを意図せずに教えてくれる形で、両手に持つ双剣——バルディッシュに話しかけた。

「——ありがとうバルディッシュ。さっきは助かった」

「クソ……！」

自分の愛機に対する感謝の言葉。たったそれだけで、アタシは全てを察した。

——身体強化。

己の肉体を魔力で強化する、この世界の魔法における基本の一つ。

そして——アタシが最も嫌う魔法だ。

テストロッサがアタシのボディブローを食らった際、このままじゃやられると判断したであろうバルディッシュが、独断でカートリッジを四連続ロードして主人の肉体をありったけ強化した。

アタシが抱いた疑問に対する答えとしてはこれで間違いないだろう。

特別なギミックなんて何もない、シンプルな対処法。だが、それを豊富な魔力を持つテストロッサがやると脅威でしかないのだ。



「はあっ！」

「んなろ……っ！」

と、こちらが考え込んでいる隙にテストタロツサは一気に間合いを詰め、今度は脳震盪でも起こす気なのか顔面目掛けて双剣を薙いでくる。

咄嗟に上体を後方へ反らすことでそれを回避し、間髪入れずに両手を地面につけてブリッジの体勢となり、テストタロツサの下顎を蹴り上げようと右足を突き出す。

「っ——！」

だが当たる寸前でかわされてしまい、彼女が掬い上げるように振るった双剣を避けられずに両腕でガードするも、威力を殺し切れずそのまま吹っ飛ばされてしまう。

「が、ア……!?!」

そして壁に激突し、何かのタガが外れたかのように鈍い痛みや鋭い痛みなど、痛みを始めたとするいろんな感覚に襲われた。

「い、つてえなア……!」

ここで止まるわけにはいかない。そう自分に言い聞かせて立ち上がり、呼吸を整える。

次に斬られた両腕へと視線を向け、傷が付いていないことを確認する。まあ残念ながら、斬り跡は袖に残ってしまったが。

しかし、傷はなくとも痛みはあるので思わず顔を歪めてしまう。

「……そろそろ観念してくれると助かるんだけど」

「ほざけ……!」

すかさず足に力を入れて地面を蹴り、テストタロツサの眼前まで肉薄したところでさらに加速し、彼女が振るった双剣を残像で凌ぐ。

続いて背後に回り込み、あらかじめ構えていた左の拳をテストタロツサ目掛けて突き出し、さつきも使った凄まじい方の拳圧を飛ばす。

拳圧を至近距離から飛ばされたことに驚きの表情を見せるも、飛行魔法と高速魔法を併用することで空中へと回避するテストタロツサ。

さらに一瞬の間もなく自身の周囲に生成した複数のスフィアから、最初に見せた槍のような魔力弾を容赦なく連射してきた。

「こなくそツ……!!」

迫り来る弾幕を両手で一つ一つ弾いていき、直後に飛ばされた円形状の刃——ハーケンセイバーを咄嗟にミドルキックで破壊する。

さすがに一度食らった技を二度も通用させるほど、アタシはヤワな人間じゃねえ。

テストロツサは大鎌へと変形させていたバルディッシュを双剣に戻し、それを連結して非常に重そうな大剣へと変形させた。

いや……ちよつと待て。何だあの大剣は。ある意味さっきの砲撃よりもヤバそうなんだが。

内心不安になりながらも構えようとした瞬間、テストロツサが大剣の重量を感じさせないほどの凄まじいスピードで肉薄してきた。

「はあああつー!」

「ぎげんな……!!」

すぐさま脳天目掛けて振り下ろされた大剣を、真剣白羽取りではなく普通に両手で受け止める。それでも若干白羽取りに近くなったが。

加えてアタシが大剣を受け止めた瞬間、自分の立っている場所が陥没し、思わず体勢を崩しそうになってしまう。

もちろん刃を素手で受け止めているため、両掌から血は出ていないものの鋭い痛みを覚え、腕の力が緩みそうになるも必死に耐える。

「う、ぐう……ッ!」

というかヤバイ、掌に続いて腹部が痛い。ズキズキする。今にも傷口が開きそうだ。

「——おおおおつ!!」

「ぐ、ああつ……!!」

正面からは斬れないと判断したのか、今度は大剣を真横から薙ぎ払うように振るい、アタシの身体をボールのように吹っ飛ばした。

きりもみ回転こそしなかったものの、音速に近いかなりの速度で壁に叩きつけられ、息が詰まると共に血を吐いてしまう。

「このやろ……」

息を整えてゆつくりと立ち上がり、お面を少しズラして血の混じった痰を吐き捨てる。

何だコイツ。ホントにダメージ食らってるのか？ 動きに何の支障も出てないんだけど。

それに対してアタシは満身創痍。コイツを倒す力なんてとてもじゃねえが残っていない。

——やっぱり逃げよう。

最初からそのつもりだったし、今のところ力で勝つてもスタミナで完敗している。何度でも言うがアタシが先にくたばるだろう。

「チイツ……い！」

脱力した自然体の構えを取り、本来の目的である逃走を実行に移すべく、テスタロッサから少しずつ離れてバレないように周囲を見渡す。

強引に変えていた声色もいつの間にか元に戻っているし、戦う分の体力も限界だ。これ以上戦うと身バレどころか、先にアタシがくたばっちゃう。ここは逃げの一択が妥当なのだ。

こちらの考えには気づいていないのか、テスタロッサは構えたまま動きを見せない。

「ん——あつ!？」

そこで彼女の視線を中途半端に壊れた廃墟へと誘導し、その隙に全速力で逃走を開始する。

もちろん、ただ逃げるだけじゃすぐに追いつかれてジ・エンドだ。だから今度はさつき以上にこの建造物を利用させてもらう。

ソニックブームを発生させながら大きな廃墟の下へ潜り込み、それを支えている柱を拳で一本ずつ丁寧に、跡形もなく破壊していく。

追いついたテスタロッサはアタシの行動を訝しげに見ていたが、こちらが全ての柱を破壊し終わると察したように空中へと離脱する。

——そしてその直後。

柱という支えを失った廃墟が凄まじい轟音と共に崩れ始め、膨大な量の砂煙を舞い上げながら無数の瓦礫となった。

「っ、砂埃に紛れて逃げるつもりか……い！」

砂埃の中に立っているアタシにもはつきりと見えるほど眉を吊り上げ、首をキョロキョロさせながら忌々しそうに呟くテスタロッサ。

アホかお前は。このまま逃げてもすぐに見つかるのがオチだつたの。

煙幕代わりの砂埃を払ってしまわないうよう、その中を慎重に移動し、すぐ近くにあったさらに大きな廃墟の元に辿り着き、分厚そうな壁の前で左の拳を溜めるように深く構える。

今からやることは、一種の賭けだ。この一撃でアタシは戦う分の力を使い果たす。次にできることは尻尾を巻いて逃げることだけ——！

「オ……ニア……!!」

深く構え、文字通り持てる力の全てを乗せた左拳を、全身の筋肉を連動させて身体を捻るように放ち、廃墟の壁を思いつきりぶん殴る。

——次の瞬間、廃墟がさつきとは比べ物にならない轟音を立てて粉々になり、廃墟都市区画全域を吹き飛ばしかねないほどの拳圧が発生した。

「なんて風圧——!!」

拳圧は生きているかのように渦を描いて空中にいたテストタロツサを、彼女が咄嗟に展開した魔法陣ごと飲み込んでしまい、そのままこちらが見えなくなるほど遥か上空へと連れ去っていった。

「ザマア、みやがれ……!!」

いくら飛行魔法と高速魔法を併用できても、あの調子ならしばらくは降りてこれないはずだ。

まっ、最初からこれが狙いだったんだけどな。あのままだとマジで勝ち目なかったし。ただ、結果的には期待以上だったし問題はない。「ぐアア……!!? いっ……てえなクソが……!!」

その光景を見届けた直後、いきなり全身から血が噴き出し、骨と筋肉に想像を絶するほどの痛みを覚え、目の前が一瞬だけ白黒になった。

あれだけの一撃を疲労した状態で放ったんだ。それなりの反動は覚悟していたが、いざ味わってみると想像以上にヤバイな。

「でも……今しかねえ……！」

全身が悲鳴を上げる中、今がチャンスと見たアタシは最後の気力を振り絞って動き出す。

目指すはさつき奪い取った宝石を隠す際に使った、瓦礫の下に埋もれるマンホールの蓋だ。

おそらく、こいつは今のアタシに残された唯一の逃走経路だろう。失敗するわけにはいかない。己の人生も掛かっているしな。

「こん、のお……！」

無数の瓦礫を力づくで退かし、マンホールの蓋を強引に引っこ抜き、それを持ったまま力尽きるように下水道へ飛び込む。

続いて痕跡を残さないよう、持っていた蓋でマンホールの出入口を閉じる。少し探られたら見つかるだろうが、時間は稼げるはずだ。

□

「チツ……」

それにしても……こういうところに来るのは久しぶりだな。下水道でケンカしたことは何度かあるが、長時間ここにいたことは一度もない。

最初に落とした宝石を回収し、付けていたお面を乱暴に外してその場に投げ捨て、強がりもせず壁にもたれながら、ダメージと反動で非常に重くなった身体を引き摺っていく。

途中で血を吐き、腹部を始め全身から激痛が走っても足を止めなかったが、ある実感が湧いてきたところで一旦立ち止まる。

「ッ、クソ……！」

ここに来てテストアロツサから逃げられたことに安堵し、不甲斐ない自分に対する怒りと悔しさが込み上がってきたのだ。

逃走に成功したからといって、勝ったわけじゃない。少なくとも、今回は完敗だ。

しかも相手が相手だったため、仕方ないといえはその通りなのかもしれないが、アタシとしてはこれっぽっちも納得していない。

だから次は――

「——次はぜってえぶつ殺す……!!」

いつになるかはわからねえが、次にやるときはアタシが勝つ。絶対にな……。

## 第7話 「一難去つてまた一難」

「ハア……ハア……」

あれからどれくらい歩いただろうか。ただ歩いているだけなのに、気が遠くなりそうだ。というか、生きている実感も薄れている。

全身から感じる激痛を必死に堪えながら、偶然真上にあつたマンホールの蓋を力ずくで開け、まず手始めに首から上——頭だけを出して周囲の状況を確認する。一体ここはどこなんだ。

「……………あれ？」

視界に入ってきたのは、病院を抜け出した日にレヴェントンの金で買った裁縫道具を使い、いつも着ていた服を作るために利用した廃墟。

——まさかいきなり当たりを引くとは思わなかった。

こいつは当たりだわ。もしもここが知らない場所だった場合、傷を癒すための隠れ家を探す必要があるからな。それも超短時間で。

周りを警戒しながら下水道から出て、持っていた宝石袋をその場に置く。どうしよう。結局ここまで持ってきてしまったよ、これ。

「……………やっぱ売るべきだよなあ」

返すなんてとんでもない。そんなことをすればアタシが捕まるし、身バレによってさらに活動が制限されてしまう。ただいま絶賛失踪中だし。

それに売り飛ばせば、上手くいけば結構な資金を得られるかもしれない。そうなれば、わざわざバイトを探す必要もないし、生活にも困らない。

もう逃げる力も残っていない、抜け殻のような身体を引き摺るように動かし、壁にもたれ掛かって腰を下ろしつつ、ポケットに手を入れる。とりあえずここは一服して——

「あれ？」

ない。買ったばかりのタバコがない。テスタロツサとやり合ったときに落としたか？ それとも下水道で落としたか？ ライターはあるのに。

これは諦めるしかない。深くため息をつき、すっからかんになっていたライターをやや乱暴に投げ捨てる。せつかく事が終わったというのに、アタシは一服すらできないのか……。

さて、これからどうしようか。一度動きを止めてしまった今、簡単には立てない。

「なーにやってんだかなあ……」

ミッドチルダ北部へ足を踏み入れたときにも思っていた。バカみたいに意気込んで殴り込みを掛けたところまでは良かったが、その先をこれっぽちも考えていなかったからな。

あときは拠点を作ろうと名案みたいに思っていたが、今思えば名案でも何でも無い。敵の陣地にそれを作っても、自作の牢屋に閉じこもるような状態になるからな。

ここに来て思い知らせる、計画を立てることの重要性。今までは力だけのゴリ押しとその勢いでやりたいことをやってきたから、計画はついでぐらいにしか考えていなかったのだ。

「……チツ」

それにしても、さつきから妙に視線を感じるな。それも複数。まるで監視されているみたいだ。ふぎけやがってクソが……。

「げほっ……」

壁にもたれ掛かったまま強引に立ち上がり、咳き込んで血を吐きながらも周囲を警戒する。遠くからサイレンの音が聞こえるな……。

できれば無駄な体力は使いたくなかったが、今向けられている視線が明らかに普通じゃない。隙あれば殺す。そんな感じで見られている。

早い話、こつちが動けば向こうも動くだろ。そう思っていたのだが……

「いい加減うざってえなア……!」  
いつまで経っても、視線の主は姿を現さない。時間だけが過ぎていく。

もしかして、アタシが背中を壁にくっつけているのが原因か？ だとしたら、相手はプロか？ それともプロ気取りの素人か？



少し危険ではあるものの、一步、二歩、三歩と少しずつ前進する。これだけでこなかつたら完全にストーカーだぞ。気味が悪い。

「——やっと思中を見せたな。緒方サツキ」

「ツ……!!」

やっと思中を現したか。そう思いながら、純粋な怒りと視線の主をぶつ殺せるという喜びを抱いて、バツと後ろを振り向く。

そこに立っていたのは黒いフードを身に纏う、精悍な顔立ちと青紫色の髪を持つ巨漢だった。

「クソが……！」

すぐさまその男と向き合い、対峙する形になる。にしても身長高すぎだろコイツ……優に二メートルはあるぞ……。

視線の主、その一人はコイツで間違いない。この巨体で一体どこに隠れていたんだ？

「……お前を殺すよう、依頼された」

「そのセリフ……まるで殺し屋みてえな言い方だな」

身体の震えが止まらない。さっきの戦いで受けたダメージによるものか、それとも恐怖から来るものか。今はまだわからない。ただ――

——こうして直に対峙してみると、この男のヤバさが雰囲気だけで伝わってくる。

相手がどんな奴かは大抵、ある程度の会話、もしくは直接殴り合ったらわかることが多い。もちろん、雰囲気の変化でわかったこともある。

……だが、初対面の雰囲気だけでヤバイと思ったのはコイツが初めてだ。もしかしたら、アタシは本当にビビっているのかもしれないねえな。

「ふう……」

対峙したはいいが、どうすればいいのやら。こっちは力を使い果たしたせいで完全に抜け殻状態だ。戦う力も、逃げる力もない。ここは

サイレンの音が近くに来るまで時間を稼ぐか。

「お前……いやアンタ、依頼されたつったな。殺し屋か」

「そうだ」

短く、それでいて力強い声で肯定する巨漢。やけにあっさりとしてるな……まさか、こっちの考えにもう気づいているのか？

にしても殺し屋か……。一応、過去に同業者と戦ったことはある。その時の奴らは狙撃手と短剣使いだったので、比較的やりやすかった。

だけどコイツは素人のアタシが見ただけでわかるほど、凄まじくガタイが良い。いかにもステゴロでやっているという感じだ。それも力一辺倒ではなく、技の達人といったところか。

今まで戦ってきた奴で例えるなら……黒のエレミアと魔闘士だな。相性の悪さに関してはソイツらと同等、もしくはそれ以上と言っている。

「誰に雇われた？」

「それを聞いてどうする？」

どうするって？ そんなもん――

「――ブチのめすに決まってんだろ」

むしろそれ以外に何があるというのか。やられっぱなしじゃ終われないんだよ。

男はアタシの物騒な返答を聞いても表情を変えることはなく、お前の言い分はよくわかったと言わんばかりに、ゆっくりと構える。これ以上時間を稼ぐのは無理か……！

「……お前の話は聞いてやった。もういいだろう」

「テメエの名前ぐらい教えろよ。アタシの名前は知ってるくせに」

「標的の情報は全て把握してある」

何の情報も得られずに終わってたまるか。ていうか全部把握してあるって、地味に凄いな。多分、依頼者から洗いざらい聞き出したのだろう。

名前を聞かれた男はピタリと動きを止め、迷っているかのように目を閉じていたが、すぐにその目を開いて答えてくれた。

「……………アシンだ」

アシン……………。その名前、テメエをこの手でブチのめす時まで、絶対に忘れねえぞ。

拳を構えるや否や、アシンはアタシの胸元——心臓に狙いを定める。どうやらドツキリでもハツタリでもないようだ。クソが。

もう、力は残っていない。それこそ、拳を握る力もだ。だが、このまま何もせずにやられるのは性に合わない。せめて一矢——

「ぐう!?」

「っ！ この弾は……………」

——報おうとした瞬間、無数の魔力弾が降り注いだ。どうもアシンの反応を見る限り、コイツにとっても予想外の出来事みたいだな。

「今度はなんだよ……………」

「……………アイツか」

どいつだよ。痛みと疲労で視界が若干ぼやけているアタシには何にも見えない——いや、今廃墟の屋上で何かキラリと光ったな。

多分アレは……………銃口だな。その手のデバイスと考えるのが妥当か。銃を使っているだけあって、前に戦った狙撃手と手口が似ている。

というかここに来て、第二の殺し屋か……………。一体どれだけアタシをこの世から消したいのだろうか。アタシの殺害を依頼した連中は。

アシンは今、魔力弾が飛んできた方を向いている。つまりアタシを見ていない。逃げるなら今のうちだな。後は身体が動いてくれるかだ……………!

「まあいい——お別れだ」

しかし、そうは問屋が卸してくれなかった。アタシがこの場から離脱しようと足をピクリと動かしたところで、お前は逃がさんと言わんばかりに、静かにこちらを向くアシン。

最後の最後まで背は向けない。別に逃げるといっても、そういう意

味で逃げるわけじゃないからだ。そんなアタシを見ても、アシンはやはり表情を変えることなく――

――正拳突きを放ち、アタシの心臓を貫いた。

□

「がっ……あっ……」

視界が、暗くなっていく。

耳が、聞こえなくなっていく。

鼻が、利かなくなっていく。

全身の至るところから、力が抜けていく。

身体が、重い。今までにないほど、重い。

「……また来る。お前の墓ができたらな」

そんな状態の中、恐ろしいほどはつきりと聞こえたアシンの声。この野郎、アタシが完全に死んだと思っただけで……クソツタレが……！

視界が完全に闇となる前に、声がした方へどうにか視線を向けると、こちらが仰向けに倒れたことを確認し、タバコを吸いながら堂々と背を向けて立ち去る、アシンの姿があった。

アタシが一番やりたかったことを、このタイミングでやってんじやねえよ……！

(……ふぎ、けんな……)

ここに来て死の恐怖に勝るほどの怒りが湧いてくるも、今まさに死んでいく身である以上、それを解き放つことはできない。

呼吸が、呼吸が少しずつできなくなっていく。息が……苦しい……。

——アタシは、ここまでなのか。

こんな所で、こんな形で、無様に力尽きて、燃え尽きて終わる運命なのか。

この世に生を受けて16年。まだ、16年だ。たった16年しか生きていない。

アタシは——

まだ、ヤンキーとしての道を歩み切っていない。

口では散々『アタシはヤンキーだ』『アタシはアタシのやりたいようにやる』なんて当たり前のように言っていたくせに、今はこのザマだ。情けない。とてつもなく、情けない……。

(——諦めて、諦めて……たまるか……!)

その想いとは逆に、心臓の鼓動が、微弱になっていくのが、わかる。遅く、弱く——

(アタ、シは、まだ……)

——そして——

アタシの心臓が、鼓動を打つのを、やめた。

## 第8話 「死んでも折れない」

死ねないんだよ！

——まだだ——

（……たかが心臓が止まったくらいで、寝てんじやねえぞアタシ……  
！）

確かに心臓は止まった。アシンの正拳突きで貫かれ、心停止に陥った。

だがな——脳はまだ、生きてるんだよ。完全に死ぬまでの、僅かな時間を生きてるんだよ。

そんな最期の瞬間でも、アタシの魂は諦めていない。心臓は——肉体は死んだも同然なのに、諦めていない。生きろ生きろと叫んでいる。

アタシの魂は、死んでも折れない——！

「……ッ……！」

この世に対する未練か、それとも生に対する執着か。意識が覚醒してきた。

多分、動ける。いや、絶対に動いてみせる。動かなきゃ今度こそ終わりだ。

でも、動けたところでどうする？ 時間を掛けて心肺蘇生でもするか？

——アホか。今のアタシにそんな時間はねえんだよ。

だが、何かしないといけない。何もしないなんてそれこそ論外だ。だつたら——もう迷う必要はないし、迷っている暇もない。だから——

緒方サツキよ。

この魂が尽きるまで——働いてもらうぜ。アタシが不甲斐ないばかりに休ませちまったが、もう二度とそんなへマはしない。今を以つてお前の休息は、おしまいだ。一生無休だから覚悟しろ。

——行くぞ。

ずっと空を見上げていた上半身が、外から引つ張られるように起こされる。

本当なら使いたくはなかったが、この際だ。四の五の言つてられない。

しかも今からやることは賭け。それも正真正銘、命懸けの大博打。アタシは右手を胸に、左手を背中に、

——バツンツツツツツ——！

それらを全く同じタイミングでブチ当て——亜音速並み二発、合計およそマツハの二倍の衝撃を心臓のド真ん中で衝突させる。

すると肋骨の内側で、役目を終えたと勘違いして休んでいた心臓が跳ね回り、かつてないほど強引に鼓動が取り戻され、再び心臓から全身へ勢いよく血流が流れ込んできた。

続いて心拍が再開し、死んでいた筋肉が甦り、固く閉ざされていたアタシの瞼が開かれる。そして激しく咳き込みながらも、大きく息を吸い込む。体は……どこも破損してない。

「はあ……はあ……空気、うめえ……」

今やったのはとある小説の主人公が行った、起死回生の自己蘇生技



——その模倣版だ。

しかし、その主人公はこれを特殊な状態で行っているため、やり方がわかったところでそう簡単に再現できる代物じゃない。

——だから使った。

五体を外部から完全操作できる、身体自動操作魔法を。

今回使った蘇生技、大雑把に見えて実はとてつもなく繊細なものだったりする。

両手から放った、合計マツハニクラスの衝撃。これを内臓や骨をすり抜けさせて、ピンポイントで心臓にだけ伝える必要があるのだ。

こんな神業、仮に万全の状態だったとしても自力じゃできそうにない。だからこそ、術者の肉体の状態や限界をも無視して操作できる、身体自動操作に全てを賭けた。

……魔力を使うという性質上、マジで使いたくはなかったんだけどな。

「……………おふっ」

無事に生き返ったことに安堵した途端、起こしていた上半身がバタリと倒れた。

ああ、そうだった——もう戦う力も、逃げる力も残ってなかったの、完全に忘れてたわ。よくこんな状態であの蘇生技を再現できたなあ……。今回ばかりは身体自動操作様様だな。

「ねみい……………」

これも安心しきったせいなのか、さつきとは違う形で意識が遠退いてきた。

そりやそうだ。体力を文字通り使い切っているんだからな。まあ、身体自動操作を使えば動けるが、これ以上身体に負担を掛けたくないし、何よりもう使いたくない。だからなしだ。

だがそれは、死に掛けのアタシが、もうすぐ警邏隊に確保されることを意味している。さすがに今回は万事休すかもしれない。

その証拠に——さつきからずっと聞こえていたサイレンの音が、だんだん大きくなっている。もう、すぐそこまで来てやがるんだ。

「……………さん……………」

クソが……………ここでアタシは終わりっつてか。笑えねえよ。せつかく使いたくもない魔法を使ってまで生き返ったのに、このままじゃ地球で言うムシヨ——刑務所へ連行されるんだからな。

「……………緒……………さん……………」

……………さつきから誰だよ鬱陶しいな。人の苗字を、まるでこれから死んでゆく人間に対して連呼するように何度も呼びやがって。

「緒方さんっ!!」

誰かがバツと勢いよく覗き込んできたと思ったら、バイト探しをしているはずのレヴェントンだった。なんでここにいるのこイツ。

ていうか顔近い、顔近い。アタシに力が残っていれば問答無用で殴り飛ばすくらいには顔が近い。頼むから、離れてくれ……………。

「な……………なしてこんなことに——っ!? 緒方さん、しっかりしてくださいっ—」

レヴェントンの顔を見て、安心でもしたのだろうか。さつきよりも視界が暗くなってきた。でも、呼吸は安定しているし、心臓もちゃんと動いている。……………これなら大丈夫だな。

——お休み、レヴェントン。

□

『あなたは——』

ああ、またか。またこの夢か。

『あなたは一体、どこへ進もうとしているのかしら？』

うるさい。アタシはアタシのやりたいようにやる。どんな時でも突っ張り通し、頭はぜってーに下げず、ムカつく奴、アタシの行く道を邪魔する奴は誰であろうとぶん殴る。

『——あんたには護るものとかないわけ？』

あつてたまるかそんなもん。アタシはアタシのために生きているんだ。なんで自分の人生を他人のために削らなきゃなんねえんだよ。

『クソはお前だ。今さら善人気取りとか笑わせんじやねえよ』

わかってる。お前らに言われなくとも、このアタシが誰よりもわかってんだよ。これが世間では、現実逃避として扱われていることも。

『——なあ、もういいだろ？』

何がもういいんだよ。今度はアタシと同じ声で話しかけやがって。まるで善人の自分と会話してるみたいで気持ち悪いんだよ。

『本当は戻りたいんだろ？ アイツらのいる世界へ』

違う。アタシは今いる世界が好きなんだ。この世界の方が、向こうの世界よりも居心地が良いんだよ。あんな善意に満ち溢れた世界、アタシには無理だ。居心地が悪すぎる。

『大丈夫だ。今ならまだ間に合う。さすがに相応の罰は受けるはめになるがな』

知ったことか。大方、これ以上取り返しのつかないことになる前に、あの甘ちゃんばっかいる世界へ戻れって言いたいんだろ。

……ふぎけんのも大概にしろ。どんなに大きな見返りがあるろうと、

あそこにだけは死んでも、心がバツキバキに折れても戻らねえよ。

「じゃあ、お前はこのままで良いのか？」

だから、お前は何が言いたいんだよ。

「このまま一生、半端者で良いのかって聞いてるんだよ。今はお前がガキだからそうしていられるが、それもいずれは卒業しなきゃならぬんだぞ」

……ここに来て笑わせんじゃねえよ。何かと思えばそんなことでアタシを、善意に満ち溢れた世界へ連れ戻そうとしていたのか。

確かに、お前の言うことは正しい。世間的に見れば間違いない正論だろう。だけども——

——それでもアタシはヤンキーなんだよ。

ここだけは、どれだけ多くの災いが降りかかろうと譲らない。お前らの言葉がどんなに正論であろうと、そんなもん関係ねえんだよ。

例えこの選択が、最悪の結果をもたらすことになるうとも、アタシはこの意志を曲げるつもりはない。そもそも、テメエらに決められる筋合いはねえんだよ。だから——

——もう、二度と出てくるな。

□

「——ん……」

一筋の光もない深い闇を気合いでブチ破るように、目が覚めた。

瞼を開ける前に、いつものように五感をフル活用して周囲の状況を確認する。

まずは聴覚。……何も聞こえないな。強いて言うなら、一人分の足音と息遣いの音がこっちに近づいている。心当たりがあるとすれば……レヴェントンだな。というかアイツ一択だわ。

次に嗅覚。薬品の臭いがせず、嗅ぎ慣れた生活臭がするってことは、少なくともここは病院じゃない。だとすれば、アタシは身バレせずに済んだってことか。正直ありがたい。

そして感覚。窓は閉まっているのか風はなく、人の気配を感じる。この気配は……おそらく最初に聞こえた足音と息遣いの主だろう。

「……大丈夫そうだな」

最後に目を開け、何回か瞬きをして視界が良好か確認する。……知らない天井だ。マジで。

病院の天井じゃない、どこかの住宅の天井を視認したところで、さつそく視点を室内全体を脳内で上から見たものに切り替える。

えーつと……多少散らかつてはいるが、触れたら危ないって感じの道具はなさそうだ。ただ、内装自体はまだ新しい。建物が新しいのか、部屋の主が引っ越してきたばかりなのか……。

まあ何にせよ、危険はなさそうだ。視点を元に戻し、上半身だけを起こす。

「タバコは………クソがつ」

もしかしたらと思ってズボンのポケットを弄ってみたものの、やっぱりタバコはなかった。早く吸いたい。吸いながら一杯飲みたい。

……それにしても、ここはどこだろうか。誰かにここまで運ばれたのは間違いないだろうが、あそこからはそんなに離れていないはず。だとすると、アタシはまだミッド北部にいるのか……。

「とりあえず起きろ——ッ!？」

身体を動かした瞬間、全身から激痛が走り、思わずぶっ倒れてしまう。

どうやらあの時のダメージがまだ残っているらしい。しかも痛み具合から察するに、今回も目覚めるのが早すぎたようだ。

ただ、やっぱり骨は折れていない。どっちかという筋肉痛を悪化させたものか。後、フラフラするから貧血かもしれない。

よし、こうなったらもう一度寝る――

「――あつ、緒方さん！ 目を覚ましたんですね！」

一体どうやってアタシが目覚めたことに気づいたのか、足音と息遣い、そしてこの部屋の主であるレヴェントンが、めちやくちや嬉しそ  
うに入ってきた。それはもう、嬉しそうちに。

## 第9話 「渴望と先生」

「無理せんでくださいよ。まだ傷も癒えてませんし」

「朝っぱらからうるせえなお前は。そんなに言うならお前が行けよ」

何だコイツ。死ぬほどウゼエぞこのクソガキ。この身体が全快していたら最低でも顔面を二、三発ぶん殴るくらいにはウゼエぞ。

あれから満面の笑みを浮かべるレヴェントンに話を聞いたところ、生き返ったあの日から一週間しか経過していないことがわかった。どうりで目覚めるのが早すぎると感じたわけだ。

だって全身から血が噴き出して、肉体のキャパシティを軽々と凌いで動いた挙げ句、一度死んだのにたったの一週間しか経っていないんだぞ？ 本当なら一ヶ月以上は寝ているはずなのに。

今更だが、どうもアタシの身体はこの世界に来てから変わってしまったようだ。地球人はおろか、魔法が常識のミッド人やサイボーグの戦闘機人ですら比較にならないレベルで進化している。

……いや、進化していると決めるのは早計か。だが、実際そう言われても違和感がないほど強くなっている。正直言つて認めたくはないが。

しかも以前、黒のエレミアには『自分より強い敵と戦うことで強くなった』と言われたが、皮肉なことにもその通りかもしれない。

まあ、だからどうしたって話だけどな。アイツの言うことが正しいからと言つて、自分から望んで強さを手に入れる必要はない。

アタシが欲しいのは力じゃない。自由だ。

誰の手も借りず、自分の手で掴み取る自由だ。それに比べれば、力や強さなんてクソ食らえだ。強くなりたいたいから拳を振るうんじゃない。自由を手にしたいたいから拳を振るうんだ。

「い、いや、未成年のわしじゃタバコとビールは買えませんし……」

「だからアタシが行くつってんだよ」

まあそれは一旦置いて、問題は今の現状だ。レヴェントンが外

出許可を出してくれない。タバコ買いたいのに。ビール買いたいの  
に。

「やっぱりその身体じゃダメです！もし不良なんか絡まれたら  
……」

「アタシもその不良なんだが？」

確かに身体はボロボロだが、お前ごときに心配されるほどヤワじゃ  
ねえよ。

「まあいい。わかったらさっさと上着を寄越せ。何が何でもタバコと  
ビールは買うからよ」

「わしの話を聞いたか!? その身体で行くなあ無茶じゃって！」  
「ぐうっ——!?!」

クソガキの制止を振り切って強引に起き上がるも、後ろからしがみ  
付かれた。しかもそのせいで、治まっていた全身の痛みがぶり返して  
しまった。何てことしてくれるんだコノヤロー……!!

「痛えなテメエコノヤロー！」

「ぶふっ!」

しがみ付くレヴェントンの下顎に膝蹴りをかまし、知らないうちに  
洗濯され、ご丁寧にハンガーに掛けてあるお手製のパーカーを羽織  
る。

そして玄関前まで来たところで振り返り、目を回して気絶している  
レヴェントンを一瞥する。ホントに弱いなコイツ……。

「さーて、とりあえず行くか」

まずはタバコとビールを調達、ついでに現状を把握するでしょう。

□

「うゝむ……」

路地裏で四、五人のゴロツキをストレス発散も兼ねてボコリまく  
り、タバコとライターをありったけ奪い取ったアタシは、ビールや焼  
酎ばっかりが売ってある自動販売機で迷っていた。

シンプルに生が良いか？ それともハイボールか？ 焼酎か？



ワインか？　どれも値段は一緒だ。何なら全部買ってやろうか？

「それにしても、よく見つからなかったもんだ……」

あれから現状の調査をしたところ、ここがミッドチルダ北部と東部の境目であることがわかった。レヴェントンの奴、妙なところに拠点を書いたな。今のところ支障はないから良いけどさ。

加えて周囲が落ち着いているのを見る限り、まだ管理局や警邏隊による調査の手は伸びていないようだ。アタシとしても助かるぜ。

……とはいえ、こうしていられるのも今のうちだ。長くは居られない。もしもの時はレヴェントンを置き去りにしてでも逃げないと。

つと、そんなことよりも、今は酒だ酒。どれにしようかな……。

「よし、決めた」

やっぱりここは生ビールだろ常識的に考えて。酒を飲むこと自体、約二カ月ぶりだし。

周囲を警戒しつつ硬貨を自販機に入れ、売り切れでないことを確認してボタンを押す。

取り出し口からガタンという音と共に出てきた缶ビールを素早く手に取り、再び硬貨を入れて缶ビールを二、三個ほど買い、自販機を後にする。とりあえずは目的達成だ。

「……あー、我慢できねえ。飲んじやえ」

レヴェントンの家に戻ってから飲む予定だったが、もう限界だ。一個は今すぐ飲んでやる。そんでタバコも吸ってやる。待てるかクソが。さっそく缶ビールの蓋を開け、グイっと飲む。

「かーっ！　久々のビールはたまんねえな！」

続いて取り出した一本のタバコを口に咥え、使い捨ての安物ライターで火をつける。やっぱり我慢するなんてアタシらしくねえや。

……我慢と言えば。

「借りは返さねえとな……」

一度はアタシを殺した男、アシン。二メートル越えのガタイを持つ、ステゴロの殺し屋。

アタシはアタシの道に行く。そのためにはまず、アイツをブチのめす必要がある。

後はアタシとアシンを妨害した、狙撃手っぽい別の殺し屋。一瞬だったから素性は何一つとしてわかっていないが、ソイツもいずれ見つけ出してやる。この手でブチのめすために。

「まあ、今はまだ隠れているとしますか」

あれからまだ一週間だしな。

□

「お、緒方さん。ちいと飲み過ぎじゃ……」

「ああ？ まだ五個目だぞ。これのどこが飲み過ぎなんだよ」

レヴェントンの家に戻り、小さなテーブルの前に座り込んだアタシは、帰宅途中に追加で買った五個の缶ビールを飲み干していた。

さつき膝蹴りで気絶させたレヴェントンはピンピンしているが、まだ痛むのか時々下顎を擦っている。手は抜いたはずだが……。

右手のタバコに取り出したライターで火を付け、すぐそばにいるレヴェントンにお構いなく紫煙を吐く。タバコの煙が嫌なら換気扇を回せばいいだけの話だ。アルコールの臭いは知らん。

「そういうえばお前、どうやってアタシをここまで運んできたんだ？」

答えはもう出ているようなもんだが、それでも知っておく必要はある。警邏隊がすぐそこまで来ていたにも関わらず、それに見つかることなくどうやってアタシを運び出したのか。

「おぶってきたに決まっつとるでしょう。……すごい重かったんですよ？」

「やかましいわ殺すぞ」

悔しいことに、こればかりは自覚があるだけに言い返せない。何せ本来なら肥満体型ってぐらいの体重だからな。アタシのそれは。

……待てよ？ コイツの言い分が正しいのなら、あそこからここまでアタシをおぶったってことになるんだよな？ もしかすると……

「おい、逃げる途中で変な奴見なかったか？」

アタシとアシンを狙撃した奴、もしくはその関係者を目撃した可能性がある。まあ、基本単独の殺し屋に同行者がいるとは思えんが。

「すみません……逃げるのに必死で、誰がどこにおるのかすら見とらんかったので……」

「チツ……だろいな」

そんなホイホイと事は進んじやくんねえか。進んでくれたら今後の方針も結構楽に決められたんだがな……。まっ、仕方ないか。

ここは気を取り直して飲むとしよう。今日は地球で言うところの大晦日だしな。確かこつちの世界でも初詣ぐらいはやっていた気がする。……こつちの初詣はまだ行ったことなかったな。

「おいレヴェントン。明日は初詣に行くぞ」

「は、ハツモーデ……ですか？」

「おう、初詣だ。せつかくだし説明してやる」

この様子からして、やはり初詣を知らないようだ。まあ元は孤児だったわけだし、知らないことが多いのは当然だろう。

レヴェントンに『初詣とは何か』と聞かれるよりも先に、簡単かつ若干早口で彼女に説明する。小学生でもわかるように説明したつもりだが、わかってくれるだろうか？

「——というわけだ。覚えてるか？」

「えーっと、つまりハツモーデというなあ年が明けてから初めて神社や寺院やらに参拝して、一年の感謝を捧げたり、新年の無事と平安を祈願したりする行事……じゃるか？」

「よく覚えられたな。偉いぞクソガキ」

「ガキ扱いせんでください……」

よしよしと頭を撫でると、レヴェントンは恥ずかしいのか顔を赤くし、俯いた。どうもこういうのには慣れていないようだ。

「まあ、そういうことだから飲むぞ」

「わ、わしは飲めませんよ……？」

「誰が飲ませるかバカ。こいつを飲むのはアタシだけで充分なんだよ」

レヴェントンは自分が飲まされると思ったようで困惑していたが、

アタシはそれを即行で却下した。お前にビールはもつたいない。

右手に持っていたタバコを一口吸い、懐かしむように紫煙を吐き出す。やっと、やっとアタシの元にタバコとビールが戻ってきた。

ぶつちやけ帰宅途中ですでに飲んだり吸ったりはしていたが、落ちて着いてそれができる今だからこそ、そう実感せずにはいられない。

「……お前も何か飲めよ。今日は大晦日だぞ?」

「そう言われましても、今は水しかないけえ………オオミソカつてなんじやろか?」

「嘘だろお前……」

また説明しなきゃなんねえのかよ。義務教育の経験がないからつてこんな知らないもんかね? 孤児院の連中は何を教えているんだ。

いや、多分コイツがいた頃はまだ大晦日や初詣といった習慣が世間に浸透していなかったのかもしれない。あくまで可能性だけど……。

「もう頭痛えわ……」

「飲み過ぎはいかんって言うたじやろう!? ええ加減横になりましようよー!」

「頭が痛えのはお前のせいだクソヤロー!」

「ぐふっ!?!」

結構な量を飲んでいたこともあり、あつさりとレヴェントンをぶん殴ってしまった。だって寝ろ寝ろしつこいんだもんコイツ。

もちろん、酒のせいで頭が痛いわけじゃない。先が思いやられるから頭が痛かったのだ。アタシはお前の先生じゃねえんだぞ……。

右の頬を押さえて悶絶するレヴェントンをよそに、七個目の缶ビールを一気飲みする。

「………先生、か……」

そういうのも、アリなのか……??

## 第10話 「新たなスタート」

「こげなときに外へ出ても大丈夫なんじゃろか？」  
「どういう時だよ」

元日。アタシとレヴェントンは予定通り、幸いに近所にあつた神社へ初詣に訪れていた。長い長い階段の前に、人がわんさかいる。

……大丈夫、大丈夫。こういう神聖じみた場所での居心地はすこぶる悪いが、レヴェントンがいるおかげかまだ吐き気はしない。

それとアタシは立場上、周りの視線も気にしなければならぬ。病院脱走からまだ一ヶ月どころか、二週間も経っていないしな。

「緒方さん、病院から脱走したせいで警邏隊や管理局に追われとるんじゃろ？ それなのに——」

「外へ出ても大丈夫つてか？ お前なア……アタシが何のためにこんな変装してると思ってたんだコノヤロー。好きでやってんじゃねえんだぞ」

「変装、と言われましても……」

うん、わかってる。お前の言いたいことはわかってるぞレヴェントン。

今のアタシの服装はいつものパーカーに、キャップ帽とサングラスという、マスクが追加されたら不審者待ったなしの際どい格好だからな。これは自分でも似合っていないと思ってる。

……サングラスは意外と気に入ってるがな。ヤンキーがよく持つアイテムの一つだし。

「うし、んじゃ行くぞ」

「こ、これを登るんですか……」

そう、今からアタシとレヴェントンが登る階段だが……めっちゃくちゃ長く、下手な坂道よりも急だ。その証拠に、上では登り切った人の九割がバテバテになっている。これももうただの試練だろ。

とまあ内心愚痴りながらも、アタシはトロトロしているレヴェントンを後ろから押すように階段を登っていく。さすがにキツイなこれ。

そして無事に登り切ったところで一息つき、今は冬なのに汗だく

で、よほどバツテバツテなのか大の字で仰向けになっているレヴェントンへと視線を向ける。ホントだらしねえなコイツ。

「こ……これはさすがに、キツイです……」

「とりあえず起きろ。通行人の邪魔だ」

それにここで立ち止まっていたら、アタシの顔見知りと遭遇する可能性だってある。幸いなのは誰も動画を撮っていないことか。

起きろといったのにレヴェントンが全く動く気配を見せないのも、強引に右足を掴んでズルズルと引き摺ることにした。こうなるもはやただのお荷物である。邪魔臭い。

「いたたたたっ！ 痛いです緒——ッ!？」

「騒ぐなクソガキ」

大声でアタシの名前を言おうとしたので、右足を握る左手に力を入れる。

微かにメキメキと骨が悲鳴を上げ、目尻に涙を溜めて目を見開くレヴェントン。仮に泣き喚いても悪いのはお前だからな？

「全く、世話焼かせやがってこのクソガキ……」

「じゃから、ガキ扱いせんでください……!？」

人気の少ない木陰に来たところで、ようやくお荷物のように扱っていたレヴェントンを解放する。物凄く文句を言いたそうにこちらを睨んでいるが、そんなことは気にしたら負けだ。

しかし何だかんだでアタシの意図を察してくれたのか、レヴェントンは何かに気づいたかのような顔になり、ため息をついた。

そんな不貞腐れ気味のレヴェントンはさておき、人が多くなる前にやることは全部やっちゃまおう。早くしないと知り合いとエンカウトする可能性が上がってしまう。

「早く立て。これ以上人が多くなるとアタシがヤバイ」

「は、はい……」

痛そうに右足を両手で押さえていたレヴェントンだが、アタシが急かすと慌てて起き上がった。一人は寂しいのだろうか？

周囲の視線に最大限警戒しつつ、レヴェントンがついてきていることを確認して長蛇の列、その最後尾につく。早く進んでくれよ……。

ちなみに今からやる参拝についてだが、レヴェントンにはもう教えである。昨日、寝る前に散々聞かれたからな。そのせいで寝坊して、危うく初日の出を見逃すところだったわ。

「あつ、列が進みましたよ！」

「思つたよりも早く終わりそうだな……」

だが、ありがたいことに列が予想以上に早く進み始めた。これなら吐かずに済みそうだ。さつきから我慢してた甲斐があつたぜ。

そして三分後。アタシとレヴェントンは何事もなく賽銭箱の前にたどり着いた。

「この箱にお金を入れたらええんじやろか？」

「小銭だけな。間違つても札は入れるなよ」

レヴェントンから受け取つた小銭を賽銭箱に放り投げ、鈴を鳴らし、て拝礼を行う。ここは神社だから……再拜二拍子一拝だな。

さあ、いよいよ神仏への祈願だ。

(……これしかないよな)

——明日を迎えられますように。

あの日から、アタシの明日は止まっている。アシンに一度殺された、あの日から。

アイツだけはこの手でブチのめす。そうしないと、アタシの明日は永遠にやって来ない……！

「……こ、これでええんじやろか？」

「……ああ。さつきと行くぞ」

用は済んだ。お守りなどを見たり、絵馬に願い事や目標を書いて飾つたりしたいが、人がさつきよりも多いから無理だ。

……いや、やつぱりレヴェントンには書かせよう。おそらく人生初であろう、絵馬を。

□

「で、お前的にはどうだったんだ？ 人生初の初詣は？」

「え、えつと……」

あれからレヴェントンが絵馬を書いて飾り終えたところで、慎重かつ迅速に神社を後にし、帰路についたところで彼女に感想を聞いてみた。

わざわざ無理してまで連れてきたのだから、それくらい教えてもらわなきゃ困る。これでつまらなかつたとかほざいたら叩きのめすぞ。

レヴェントンはどう言えば良いのかわからないという感じで迷っていたが、ある程度の整理はできたようで、真面目な顔で口を開いた。「ぶち貴重な体験をさせていただき、ありがとうございます」

「……………いや、礼は良いから感想を言え」

感想を聞いたのに感謝の言葉を述べられても困るんだが。まあ、それはそれで悪くないが。少なくとも嫌な印象は抱いてなさそうだし。「すごい楽しかったです。アマザケ……でしたっけ？ それは美味しかったし、お守りも買えましたし、願い事も言えましたし」

「ああ、そう。そりゃ良かったな」

とりあえずコイツが初詣をエンジョイできていたのはわかった。だからそんなキラキラと目を輝かすな。サングラス越しでも眩しいんだよ。

レヴェントンの満足そうな笑みを確認し、取り出したタバコに彼女からくすねたマッチ棒で火を付ける。ライターは昨日使い切った。

「ふう……………」

「お、緒方さんっ」

「ん？」

一服して当然のように紫煙を吐いていると、いきなりレヴェントンが真剣な表情で話しかけてきた。少しはリラックスしろよコイツ。

「あ、あの……ほんまに良かったんでしょっか？」

「何が？」

「——緒方さんに、ついていっても」

「……まさかとは思いが、ここに来て嫌だとか言うんじゃねえだろうな？」



もしそうなら両腕を原型がなくなるまで押し折ってやる。あと両足も。

万が一に備えて右手に力を込めるも、その心配は一瞬で霧散することとなった。

「ち、違いますっ！ そうじゃなくて、その……緒方さんは嫌なんですよね？」

心配は霧散したが、今度は今更なことを聞かれた。いや、今更過ぎるわ。

少しムカついているので殴ろうとも考えたが、ここは我慢することにした。

というか、そろそろこのすぐに手を上げるパターンも控えた方が良いか？ アタシとしてはこのまま続行したいんだけど……。

「お前がついてくるのが、か？」

「はい……」

アタシから目を逸らし、しょんぼりするように俯くレヴェントン。そんな顔するなら最初から聞くなよ。自信がないってことじゃねえか。

「まあ確かに、嫌だね。少なくとも良い気はしねえよ」

アタシは一人の方が好きだ。その方が気楽で良いし、誰かに気を遣う必要もない。誰にも邪魔されず、アタシのやりたいように動ける。だからこそ、コイツがついてくるまでの間は窮屈で堪らなかった。全部クソだったというわけじゃねえが、思い出すだけで反吐が出る。

——ただ一人の例外を除いて。

ソイツのことだけは今でも、アタシの隣を歩いても良い存在であると認めている。認めざるを得ない。後の連中は……どうでもいいや。「——けどな、あのとき見せたお前の意志は本物だった。だから我慢することにした。その意志をここで蔑ろにするほど、アタシは落ちぶれちゃいねえよ」

「緒方さん……」

アレは今でも記憶に強く焼き付いている。まさかこんなクソガキに、あんな敬意もクソもない態度と言葉遣いをされるとは思わなかったからな。

……もちろん、それだけならコイツを半殺しにしていただろう。でもそうはしなかった。たつた今言ったように、あの時レヴェントンが言ったことに嘘も偽りもなかったからだ。

「……ちようど良い。この際だ、お前に言っておくことがある」

昨日、ある単語を聞いてからずっと考えていた。アタシがコイツに何をしてくれるのか。

こんなの、アタシの柄じゃねえ。それは百も承知だ。だが人生は何事も挑戦だ。柄じゃなくとも、興味が湧いてきたことはやりたくなる。

「言つとくこと……ですか？」

「ああ、大事なことだから一度しか言わねえぞ——」

一旦言葉を区切り、レヴェントンがちゃんと聞いているかを確認してから告げる。

「——アタシはヤンキーだ。間違ってもアスリートじゃねえから、お前を肉体的に鍛えてやることはできない。だから教えてやる。お前の知りたいことを、可能な限り教えてやる」

アタシは格闘技に関しては素人だ。だけど学校の先公みたく、知識を与えることはできる。まっ、アタシを助けた礼つてやつだな。

「お——押忍っ！」

一瞬嬉しそうに微笑むも、すぐさま真剣な表情で返事するレヴェントン。どうやらアタシの言いたいことをわかってくれたようだ。

さつきも思ったが、冗談抜きでアタシの柄じゃねえ。一人で全部やって、全部解決してきたアタシにできるかはわからない。

だが、やってやる。恩を返すという意味でも、コイツを導くという意味でも。

だから腹ア括れよ、レヴェントン。躓くようなら容赦なく置いてい

くからな。

この日を境に、アタシとレヴェントンは『先生と教え子』の関係と  
なった。

## 第二章 「第100管理外世界」 第11話 「情報収集」

「この辺りのはずなんだが……」

初詣から二日後。さつそくアシンと例の狙撃手の情報を得るべく、アタシは一人で裏の情報屋が潜んでいる場所を探し回っていた。

当初はギャングやマフィア、さらに重罪クラスの犯罪者多数が集う「バザー」と呼ばれる裏街で情報収集を行う予定だった……のだが、向こうではたまに命知らずのバカ共が後ろから襲ってくるし、その始末で無駄に時間を費やしてしまう可能性が高いから断念することにした。

それに「バザー」へ行つたところで、必ずしもお目当ての情報が得られるとは限らない。前述の理由と合わせて無駄足になるだろう。

ちなみに、というか当然レヴェントンは置いてきた。アタシが今いるのはお馴染みと言っていい路地裏だが、ここは「バザー」に近いのか、表には出られないような連中の縄張りとなっている。

なので色んな連中をブチのめしてきたアタシはともかく、チンピラ程度しか知らないあのガキが、この辺りに来るのは自殺行為だからだ。

「女神の嬢ちゃん！ 腹にでっかい穴開けられた気分はどうよ？」  
「うっせ。黙って飲んだくれてろ」

少し苛立ちながら言い返すも、それが面白いのか突つかかってきた薄汚い男は端に座り込んだまま、ゲラゲラと笑ってタバコを吸う。

そこらの路地裏と違い、こここの路地裏はこうした連中がうようよと表にいる。しかも顔の知れた奴もいるため、今のように絡まれることが多いのだ。ここが「バザー」だと襲ってくるんだがな。

それと男が口にした『女神の嬢ちゃん』という名前だが、もちろんこれはアタシのことだ。

いつから知っていたのか、ここと「バザー」の連中はアタシが「死戦女神」だということ把握しており、語呂が良くて面白いからとい

う理由で『女神の嬢ちゃん』と呼んでくるようになった。今ではすっかり通り名になってしまっている。

……ていうかちよつと待て。アタシが腹に風穴を開けられたってもう知れ渡ってるのかよ。情報が回る早さも相変わらずだな。

「……ところで情報屋を見なかったか？　ちよつと用があるんだけど」

「情報屋の旦那ならさつき、あそこに入っただけ」

そう言っただけで男が指差した先には、既視感を感じる階段があった。昔、闘拳クラブに突入したときもあんな感じの階段を下りた気がする。

さつきそく教えてもらった場所へ行こうとするも、やはりと言うべきか引き止められた。

「ちよいちよい、教えたんだから何かくれよ」

「……ほらよ」

ここに来る途中、ゴロツキから調達した札の一枚を上着のポケットから取り出して渡すと、男は嬉しそうにそれを受け取った。

まあ、これがこの平常運転だ。基本的に人の面や事情はそれほど気にしない奴ばかりだが、人の持ち物——特に金銭関連には今のようにな、ちよつとしたことで強請ってくるほどのささいなのだ。

なので、ここや「バザー」へ行くときは必ず事前にゴロツキから資金を調達している。持参したもんを取られちゃたらまらんからな。

「おっす嬢ちゃん。お前さんがここに来るなんて珍しいな」

「おう、アタシもそう思うわ」

「お久しぶり、女神のお嬢さん。後でお腹に穴を開けられた話、聞かせてちようだいな」

「……はあ」

何か一人一人、すれ違う度に声を掛けて来やがる。というか、今日はやけに人が多いな。何かイベントでもあるのだろうか。

「つと、ここか」

そうこうしているうちに、教えてもらった階段の前に辿り着いた。マジで闘拳クラブを思い出すな。この地下へと続く階段は。

□

「クソッ、マジで長えな。この階段は」  
階段を下りて五分ほど経ったところで、ようやく目的の場所に到着した。

ここに来るのは初めてじゃないが、頻繁に来ていたわけじゃないので階段の長さを忘れてたよ。酸素が届いているのか気になるところだ。

さっそく目の前にある鉄の扉を開け、中に入る。……ここも相変わらずだな。警邏隊や管理局対策なのか、外から見たら牢獄の類に見えるのに、中はバーのような集会場なのだから。

「おいおい、女神の嬢ちゃんじゃねえかよ！」

「生きてやがったのかこんちくしょう！」

「腹に穴開けられたんじゃねーのかよ!？」

「そこは空気読んでくたばれよ！ せつかくの札束が台無しだコノヤロー！」

中に入ったのは良いが、いきなり罵声の嵐である。アタシの生死で賭け事してやがる。

「ほら見る！ 俺の言った通りだろ？」

「チッ！ 今回もテメエの一人勝ちかよ！」

「お前らなア……」

別に賭け事自体はどうも思わないが、アタシでするのはやめてもらいたい。お前らの期待には絶対に応えられない自信があるんでね。

「……情報屋のおっさんがここにいて聞いてたんだが」

「あそこで飲んでるぜ」

受付みたいな場所に立っている店員はそう言うと、店の奥の方を指差す。

店員が指差した先には、サングラスを掛けた細身の男が一人でワインのようなものを静かに飲んでた。間違いない、情報屋のおっさんだ。

店員に一言礼を述べ、バカ共の罵声をスルーしながらカウンター席の奥へ向かう。

「……よう、おっさん」

「ふはっ、誰かと思えば緒方ちゃんじゃないの」

「ガキみてえに呼ぶな」

「とりあえずそこ座りな。俺に聞きたいことがあるんだろ？」

「話が早くて助かる」

とりあえず店員に生ビールを頼み、言われた通りおっさんの隣の席に座る。

……相変わらずだな、コイツも。情報屋だからか言うほど胡散臭くはないが、掴みどころはまるで読めない。気味が悪いぜ。

「珍しいじゃないの、君がここに来るなんてさ」

「アタシだつて来たくて来たわけじゃねえよ」

そう、情報を得るだけならそこら辺の路地裏を何度も徘徊し、何か知ってそうなゴロツキをボコって吐かせるだけで良い。何もわざわざこんな腐れた場所にまで来る必要はないのだ。

だが、今のアタシにはレヴェントンと交わした『制約』がある。それを踏まえた場合、のんびりと情報収集している時間はない。だからこそ、裏の情報屋であるこのおっさんを頼るに至った。

「……それにしちや、馴染んでるみたいだけど？」

「別に居心地が悪いわけじゃねえからな」

むしろ居心地はかなり良いと思っている。何せ治安がそれなりに維持された表の社会と違って、クソみてえなルールに縛られることなく、それによる息苦しさもないのだから。

もちろん自己責任の範囲で警戒する必要があるが、それを差し引いてもここや「バザー」の、喧騒と馬鹿さ加減による混沌は良いものだと断言できる。

そして集うはアウトロー。つまりこのルールもアウトロー、アウトサイダーのためのルールだ。アタシにとっては理想とする自由、その一つと言える。

「そうかい。だけどそれ、もうヤンキーの範囲で納まるとは思えない

んだよね」

「んなこたあわかつてる。だけど、それでもアタシはヤンキーなんだよ」

おっさんに痛いところを突かれ、イラつとするもできるだけ冷静に返す。ここで騒げばそれこそ時間の無駄になってしまう。

別に誰かが決めたことじゃないし、自分からそうする必要もない。だけど、アタシはヤンキーとして生を受けた。直感だけの根拠なしだが、これだけは昔から確信している。

「ていうか、もういいだろ。そろそろ本題に入らせろ」

「はいよ。——で、何の情報欲しいんだ？」

少しだけおっさんの雰囲気が変わるも、特に支障があるわけでもないのでもそのまま進めることにする。ちゃんとした情報をくれると良いのだが……。

「——アシンと散弾のスナイパーについてだ」

次の瞬間、バカ共の騒ぎがピタリと止み、無音の空間が生まれた。

『オイオイ、アシンってあのアシンか？』

『よりもよって“蒼天の一閃”かよ……』

『なんつーもんに目え付けられてんだよ、あのアマ』

『てか、知ってるってことは狙われたってことだよな？ よく生きてんな……』

そして聞こえてくる、バカ共のコソコソ話。連中の話を聞く限り、どうもアタシは相当ヤバイ奴に殺されていたらしいな。

「……………驚いたよ。まさかアシンの旦那に狙われて、生き延びる奴がいるなんてね」

いや、一回殺されてるんだが。起死回生の神業がなけりや確実に死んでたんだが。

「で、情報はあるのか？」



「もちろん。……でもその前に、ズボンのポケットに隠してるものを全部出しな」

鋭い目付きのおっさんにそう言われ、素直にポケットに忍ばせていた宝石を全部取り出す。テストロツサに出くわしたあの日、見つかる前にコツソリと盗んでおいたものだ。

……当然まだ換金していないが、大丈夫だろうか？ クールに笑われて『ウチは質屋じゃないんだぜ』とか言われねえだろうか？

「まあ……情報代にしちや充分な量だな。スナイパーの分も含めといてやる」

「……ああ、そう」

ここは素直に礼を述べた方が良かった気がするが、そこは頭を下げるのが嫌いなアタシだ。そう簡単にやれるもんじゃねえ。

おっさんもそれがわかっているようで、宝石を回収すると同時に口を開く。

「まずはその散弾のスナイパーって奴だが、コイツで間違いないね」

そう言うとおっさんは懐から一枚の写真を取り出し、アタシに差し出す。オイオイ、顔写真まで持ってんのかよ。このバカは。

迷うことなく受け取ったその写真には、案の定一人の男——  
「えっ」

——ではなく、一人の女が写っていた。

地球出身のアタシから見れば特徴的な、白のメッシュが入った黒の短髪。

常に獲物を狙っているかのような、鋭い目付きに澄んだ瞳。

顔写真なので完全な体型はわからないが、見切れるように写っている肩を見る限り、それなりに鍛えられた肉体をお持ちのようだ。

「名前はランナー。ここいらの連中からは『魔の散弾』と呼ばれている」

「『魔の散弾』？」

「ああ、殺し屋としての通り名だよ」

「アシンの『蒼天の一閃』と同じようなもんか？」

「その認識で合ってる」

名前の由来は何となくわかるが、それにしたって安直過ぎやしねえか？

「まっ、俺の知る限り拡散する魔力弾を使うスナイパーはその子だけだ。年は君より上……二丁拳銃の執務官と同じくらいかな」

「あつそ」

最後の情報がどうでもいいものだったので聞き流そうかと思っただが、一応頭の片隅に記憶しておくことにする。念のためってやつだ。

「それじゃ次は——アシンの旦那についてだ」

ついにきた。アタシが一番欲しかった情報。あまりの欲しさにこんな裏の社会にまで出向いたんだ。失望させるなよおっさん。

「もう顔は知ってるとは思うけど、名前はアシン。通り名は『蒼天の一閃』。君が次元世界最強のヤンキーであるように、旦那もまた次元世界最強の殺し屋と言われている」

へえ……殺し屋の中じゃ一番強いのか、アイツ。顔、というか容姿は確か……精悍な顔立ちに青紫色の髪、そして二メートル越えのガタイ、だったな。あんなの嫌でも忘れられん——って、ちよい待ち。

「なんでアタシが最強扱いなんだよ」

情報自体はこれまでのおさらいとも言えるものなので、特に言うこととはない。だけど比較対象はアタシなのは何故か納得がいかない。

「知ってるんだぜ？ 君が決闘で黒のエレミアを下したのは。あのエレミアを制しておいて、最強の一角に入らないわけがないでしょ」

「アイツはあくまでアスリートだ。持つ能力こそ実戦で本領を発揮するものばかりだが、メンタルがモロに足を引っ張っているせいで実力が伴っていない。良く言えば優し過ぎ、悪く言えば脆い、だな」

ふざけんなよクソが。どうしてここに来てまであのエレミアのことを思い出さなきゃならんだ。アイツとは決別したも同然。アタシにとっちゃもう過去の存在なんだよ。

「うーん、君がそう思うのならそれで良いよ。でもね、君が最強の一角という事実はどこまでもついてくる。それだけは覚えておきな」

「……チツ。さつさと話を戻せ」

これ以上はもう聞いてらんねえ。アタシが最強の一角だとか、エレミアだとか。

おっさんも引き際は良い方だったのか、新たにグラスへ注いだワインを一口飲み、一息ついてから逸れた話の路線を戻し始めた。

「わかったわかった。そんなに噛み付くなって。そんでだな……これも知ってるとは思うが、旦那の基本スタイルは何らかの体術を駆使したステゴロ。主に使うのは拳による一閃だ」

まあ、確かに知っている。というか、あのととき直に食らったので身を以って実感していることになる。アレは痛いとかそんなレベルじゃなかったな。一瞬で生命を刈り取られた感じだ。

「……つーかよ、さつきからアシンを旦那呼びわりしてるのはどういうことだ？　もしかしてアイツ、お得意さんなのか？」

「詳しくは言えないけど、まあそんなところかな」

それが本当なら、おっさんの近くにいればアシンと出会える可能性がある。あるってことじゃねえか。レヴェントンとの『制約』がなけりや実行してたかもしれない。

何にせよ、これで大体は聞けたことになるな。ほとんどが事前に知っていたことだが、その辺は仕方がないだろう。言えない部分も含めば、殺し屋の情報は元々少ないし。

……とはいえ、アタシはまだ肝心なことを聞いていない。これだけは聞き出さなければ。

「そんじゃ、最後に一つ教えてくれ。——ソイツらに会う方法とか、呼び出す方法とかないのか？」

これだけは何があっても知っておく必要がある。というかこれが本命である。

アタシの言うことを予想していたらしいおっさんは『やつと口にしたか』と言わんばかりの呆れ顔になるも、軽く一服しながら答えてくれた。

「コンタクト方法ねえ……これは依頼用だが、ランナーは特定のアドレスにメッセージを送れば呼び出せる。ただ本人のルールに『同じ依

頼人とは会わない』ってのがあから気をつけて」

「つまり一回でもしくじったら二度と会えないのか」

大体の殺し屋が持つてそうなルールだが、こうして聞くとなかなか厳しいルールだな。まあ、何度も会おうと相手に素性が知られてしまう危険があるのだろうか。

「次にアシンの旦那だけど……これが結構特殊だね。とある廃墟の掲示板に漢字で『下剋上』とメッセージを書き込むと呼び出すことができる」

「とある廃墟？」

「君が腹に穴を開けられた場所だよ」

「……マジかよ」

呼び出し用とは思えないワードにもツッコミを入れたかったが、それ以上に掲示板が置かれている場所に驚かされた。まさか、掲示板のある場所がミッド西部の山林地帯にある廃墟だなんて。

こりや今すぐ奴を呼び出すのは危険だな。あそこはまだ警邏隊の搜索範囲内だろうし、知り合いと鉢合わせする可能性もある。傷も癒えてないし、しばらくは様子見に徹するか。

「まっ、今話せるのはこれだけかな。まだまだ情報はあんだけど、これ以上は追加料金になるからやめた方が良いいぜ」

「別に良いいさ。聞きたい情報も聞けたしな」

それに、まさかこんなに話してくれるとは思わなかったしな。嬉しい誤算だよ。

後ろでバカ共が再び騒ぎ出し、取り出したタバコで一服しながら、ようやく来た生ビールを一口飲む。やっぱビールは良いな。

「それじゃ、俺は嬢ちゃんが死ぬ方に賭けるぜ！」

「ならオレは敢えて生き延びるに賭けよう！」

「今回は生きてたが、次はあのアシンだもんなあ……無難に死ぬ方でいくわ」

「死ぬ方に札束入れてやつから、生きて帰ってくんじゃねーぞ！」

まーたアタシの生死で賭け事始めやがった。しかも最後の言い分が理不尽過ぎる。その期待、絶対に投げ捨ててやるから覚悟しとけ

よ。

そんなことを思いつつも少し呆れ、怒りを通り越して苦笑いしていると、ワインを飲み終えたおっさんが神妙な顔付きで話しかけてきた。

「ところで緒方ちゃん。これからどうするの?」

「ほとぼりが冷めるまで隠居に徹するさ。今すぐアシンに会おうにも、いろんな意味で場所が悪すぎる。それに、これでもまだ病み上がりなんでね」

「その割には管理局の『金の閃光』と元気にやり合ってたじゃないか」

あれでも逃げるつもりだったんだよなあ。スタミナ切れで逃げられなかっただけで、やり合う気は毛頭なかった。仮に最初からやり合ったとしても、デメリツトしかなかったし。

さて、しばらく隠居するとして……レヴェントンの教育はどうしようか。ただ知識を教えるだけじゃ成長は望めない。さすがに多少の実践経験は必要になるか……。

レヴェントンをどう教育するかで内心頭を抱えていると、すでにこちらの事情を把握していそうなおっさんが助け舟を出してくれた。

「君の言うほとぼりが冷めるまで、この世界から離れてみたら? 気分転換になるかもしれないよ」

「離れるって……どこ行きや良いんだよ」

ここを離れても大体の世界は管理局の手が行き届いているんだぞ。しかも安全な交通手段がない。家用機でも用意するか、警備がガバガバな場所にも行かないと確実に見つかる。

「そう言うと思って、あらかた調べておいたよ」

「……今度はいくらだ?」

「札五枚で。これでも安くした方だぜ?」

懐から一枚の紙を取り出し、慣れた手つきで渡してくるおっさん。事前に調べたとか、こういうところはさすが情報屋だな。

アタシも財布から札を五枚取り出し、紙と交換する形で支払う。これくらいなら財布はまだ持つ。結構ギリギリだけど。

紙には次元世界の名前が書かれており、そこがどういう世界なのかもご丁寧に記されている。次元世界つて百以上もあるのか……ん？

「――第100管理外世界？」

気になるものが一つあった。

えー、名称はサハラツタ。魔法技術と人間も存在し、ミッドチルダには劣るけど地球に匹敵する文明を持つ。ちなみに詳細が不明なため現在調査中で、未だ管理世界には加入されていない。……と、ここまでが一般的に公表されている部分。

次に一般どころか管理局ですら把握していない部分。治安はミッドチルダ並みに悪く、一部の地方に至ってはあの「バザー」を表に出したかのような状態だとか。詳細を把握されていない今なら、違法入国も可能らしい。

管理の外にある世界……。詳細を読み終えたアタシは思わず微笑んでしまい、口元を右手で隠す。ここなら一時的な拠点にできるな。「おつ、サハラツタに興味がおアリで？」

「ああ、気に入った」

安全な入国方法も記されているし、警備的にも田舎の次元港を利用すればどうにかなる。これで残る問題は資金くらいか。

……そう言えば昔、闘拳クラブで手に入れた大金があったな。アレで資金は賄えるか。確かクラナガンの南西に位置する都市、そのロッカーに隠したままだったはず。アタシはまだ表に出られないし、一か八かレヴェントンに取りに行かせるか。

「サンキューおっさん。いろいろと助かったわ」

「そりゃ良かった。また情報が欲しくなったら、その時はここに来な。額次第でそれなりのもんを提供してやるよ」

「ふざけろ。今回みてえに緊急でなけりや来ねえよこんな所」

残っていたビールを一気に飲み干し、アタシの笑いを含んだ返答を聞いて、同じく笑いながら「だろうな！」と言うおっさんに軽く手を振ってから、ビール分の代金を受付に置いてバーを後にする。

鉄の扉越しにバカ共の喧騒が聞こえるも、アタシは振り向かない。ここは確かに居心地が良い。だけど、今はやるべきことをやらなければならぬ。次に来るのは全てが終わった後だ。

「ふう〜……」

さてと、これから忙しくなるぞ。

□

「あつ、緒方さん！」

「……おう」

あれから誰にも見つからないよう、街頭やビルの屋上、樹上へ跳び移っていき、一度も地上に足を着かせることなく無事に帰宅した。

さつそく一息ついてタバコを吸い、遠慮なしに腰を下ろす。やつぱり落ち着ける場所があるって良いなあ。まあ、あと少ししたらその場所からも離れるんだけどな。

「？ おいレヴェントン」

「は、はいっ」

「なんでそんなに深刻な顔してんだ？」

さつきからボロが出るように落ち込んだ表情になるのが気になったので、吸っていたタバコを灰皿に押し付けながら聞いてみる。

最初のうちは視線を泳がせて迷っていたレヴェントンだが、アタシが相手だと嘘をつけないのか、ため息をついて口を開いた。

「実は、その……バイトをクビになってしまいました……」

またやらかしたのかコイツ。まあいい、アタシとしても都合だ。過ぎたことは仕方がねえ。……レヴェントン。頼みたいことがある」

「た、頼みですか？」

「ああ。今からこのロッカーの中身を取りに行ってくれ。なかったらそのまま戻ってきていいぞ」

「えーつと……そのロッカーつちゆうのはどこにあるんじやろか？」

レヴェントンにロッカーのある街への行き方を説明し、買ってきた

焼酎を一口飲む。

彼女が玄関で靴を履いたところで、アタシは一旦レヴェントンを引き止めた。

「それともう一つ。後で自分の荷物まとめとけ」

「引っ越してもしよーるんですか？」

予想通り疑問符を浮かべて首を傾げるレヴェントンに、口元を歪めて一言告げる。

「——異世界合宿に行くぞ」



## 第12話 「常に考えろ」

「やっと着いたか……」

ゲートが開かれ、サハラツタという次元世界への第一歩を踏み入れる。

情報屋のおっさんが調べた情報通り、ここへの入国審査はガバガバだった。ミッドの——田舎の次元港も同様だ。中央区画に比べると人がいないせいか、警備が疎かになっていたのだ。まあ、そのおかげでアタシはここに来れたわけだが。資金もレヴェントンが回収してくれたし。

目の前に広がるは大都市。それも地球の、日本の首都である東京とさほど変わらない大都市。強いて言うならタワーの類いがなく、風景の一部が山や川などの自然になっている。

他にもすぐそばの道路で自動車が走っており、遠くの方をよく見ると電車のような乗り物もある。交通機関に関しては次元船以外、マジで地球と同レベルだなここ。バイクもあるに違いない。

「ここが、異世界……!」

周りを見渡して情報を集めるアタシをよそに、目を輝かせながら一人はしやぐレヴェントン。

さすがに無理もないか。何せこのガキ、孤児院出身ということもあってか、旅行なんて一度も行ける機会がなかったみたいだしな。

だけどもあ、これがレヴェントンにとって初めての異世界旅行になるわけだ。思い出にはならずとも、記憶には残してもらいたいね。

「にしてもお前、よくパスポート持ってたな」

「身分証明のために必要じゃと、院の先生に教えてもらってたもので」

どうせなら大晦日や初詣についても教えてもらえば良かったのに。そういうところは地球でもミッドチルダでも一緒なんだな。

サハラツタに着いた記念として取り出したタバコを口に咥え、久々のオイルライターで火を付ける。

「ふう〜……」

さて、まずは宿とテレビとラジオだ。とりあえず寝床と情報の集ま

るものが欲しい。

「レヴェントン、行くぞ」

「お、押忍ッ」

はしやぐあまり迷子になろうとしていたレヴェントンに声を掛け、紫煙を吐きながら歩み出す。一人だけ遠足気分とは良いご身分だな。

人よりも良い目で遠くを眺めるように、どこかに手頃な宿屋がないか探していると、レヴェントンがパンフレットのようなものを開きながら話しかけてきた。

「緒方さん」

「あア？」

「ここに着く前から気になつとつたんですが、どのホテルを予約してるんでしようか？」

そう言つてレヴェントンが見せてきたのは、この世界……いやこの都市にあるホテルの一覧だった。そういやコイツには言つてなかったわ。

「——そんなもんしてねえよ」

「えっ」

アタシの言ったことが信じられなかったのか、今のは聞き間違いだと言わんばかりに間の抜けた声を出すレヴェントン。

先に言つておけば良かったとほんの少しだけ後悔するも、すぐに切り替えて彼女の知りたいことを口にする。もちろん、ストレートに。「宿は今から探す。日没までに見つからなかったら野宿な」

「そがいなこたあ先に言つてくださあーい!!」

アタシがそう言った瞬間、レヴェントンの叫び声が響き渡った。

□

「緒方さん！ ここは宿じゃありません！ 廃墟じゃ！」

「ちつたあ黙ることを知れクソガキ」

怒気の籠った声で叫ぶレヴェントンの言う通り、アタシ達は街中にある宿ではなく、街の外れにあった廃墟に潜入している。

最初は無難に適当なホテルを予約しようかと思っていたが、この世界で過ごす日数が決まっていけないのと資金のことを考えた結果、無料で人の目に付かない廃墟が一番だという結論に至った。

冷暖房とシャワー、そして心地の良い寝床がないことに目を瞑れば最適な宿だろう。変なところに泊まってぼったくられるよりはマシである。

「特に変わったものは……なし、と。おいレヴェントン」

「はい、まさかたあ思いますが……」

おつ、コイツにしては察しが良いな。

「ここを拠点とする」

「ほ、ホテルじゃダメなんか……？」

「ダメだ」

本気で反論したそうなレヴェントンを一言で切り捨て、寝室として使われていたであろう部屋に入る。この世界における寝床はここで決定か。

このガキはともかく、家を丸ごと失ったことのあるアタシは宿無しには慣れてるからな。建造物の形をしている廃墟がありがたく思えるぜ。

……まあ、清潔さを保つのは大事だよな。主に衛生的な意味で。

「あーわかったわかった。銭湯ぐらいは行ってやるよ。だからそんな目で見るのやめろ」

さすがに首を横に振りながらの涙目は効く——いや、ウザい。次やったら絶対に膝蹴り叩き込んでやる。

アタシの言葉を聞いてホッと胸を撫で下ろすレヴェントンだが、まだ文句はあつたようですぐに抗議の眼差しを向けてきた。

「ご飯はどうするんですか？」

「各々で調達に決まってるんだろ」

なんでアタシがお前なんぞに合わせなきゃならんのだ。

「……もうそれでええです。ホテルも諦めます。なんか、これ以上文

句を言うんは時間の無駄な気がしてきたけえ」

「最初からそうしとけ」

レヴェントンが折れてくれたところで……次はテレビかラジオの確保か。廃墟で過ごす以上、前者は使えねえ。なのでここは後者一択だ。

よし、そうと決まれば早速街へ繰り出すとしますか。情報集めも兼ねて一応観光したいしな。……おっとそうだ。忘れるところだったわ。

ポケットから取り出したタバコに火を付け、一口吸ってから口を開く。

「レヴェントン」

「は、はいっ」

合宿といった手前、ただ向こうのほとぼりが冷めるのを待つだけじゃダメだ。というか、コイツの教育は来る前から計画していたことだ。

「今からお前に一つ、大事なこと言っとくわ。こいつはお前の今後にも影響することだから、他の大事なことを忘れても絶対に忘れんじやねえぞ」

次元船の中の貴重な睡眠時間を割いてまで考えたことだ。コイツも納得してくれるだろう。

右の人差し指をレヴェントンの額に当て、真剣ながらも若干ポカンとした感じの顔の彼女に告げる。

「——常に考えろ。人間って生き物はそうやって次の道を見出すんだ」

ここに来てアレだが、先生らしい教育は一切してやんねえ。アタシの柄じゃねえし、ただ一方的に教えるだけじゃ教育とは言わねえからな。少しはレヴェントン自身に経験を積ませないと。

それに……コイツは今が成長時だ。アタシの今後を考えておくと、ここで冒険に出しておくのが得策だろう。今回の合宿はコイツに『自

分で考え、行動する』を達成してもらわねえとな。

「どうしても一人で答えが出せなかつたら、そんなときは教えてやる。だから常に考えろ。そのうえで『テメエのやり方』を見つけ出せ」

そんなの誰でもできるだろ、って思うかもしれないが、意外とできてない奴もいたりする。このレヴェントンも間違いなくその一人だ。簡単にできると思えるものほど、難しいことはない。

「そんなん、わしでもできま——ツ!？」

天誅。

「な、何しよるんですか……!？」

「何ができてるだバカヤロー。全然できてねえからそうしろつってんだろうが」

お前にそれができているなら、仕事中に絡まれてやり返すという大ポカを何度もするはずがねえんだよ。要は学習しろってこった。

なんで自分が拳骨されたのかわかっていないようで、レヴェントンは両手で脳天を押さえながら、アタシを睨みつけて抗議してきた。

「できとるんです! わしもそこまでバカじゃ——ツ!？」

バカなので天誅。

「はア……じゃあ、今から簡単な問題を出す。正解できたら認めてやるよ」

「お……押忍……ッ!？」

よし、まずは簡単な問題でいこう。

「では問題。あなたが仕事をしていると、チンピラが二人絡んできました。近くに味方は一人もいません。ここであなたはどのような行動を取りますか?」

「やり返すに決まっとするでしょう」

お前がアタシの言うことを理解していないのはよくわかった。

「正解は『適当にあしらう』だ。まあ、通報するだけでも言うか本当に通報すれば効果はあるだろ」

実を言うとアタシはレヴェントンのように、仕事中に絡まれたことは一度もない。……というのも、当時の職場が結構ブラックだったからな。仕事上、こっちから絡んでいたの方が正しいだろう。

「なしてやり返したらダメなんですか!？」

「立場を考える立場を。お前の場合、やり返したら職を失うだろうが」

「じゃあ、緒方さんならどうしよるんですか!？」

「やり返すに決まってるんだろ」

「言ってることが矛盾してる! 矛盾しとりますよそれ!」

レヴェントンはダメ、アタシはオーケー。ふむ、特におかしいところはないな。

ひとまず矛盾矛盾うるさいレヴェントンを三度目の拳骨で黙らせ、左手に持っていたタバコを一口吸って紫煙を吐く。

「いいか、よく聞けクソガキ。お前とアタシとじゃ現状が違うんだよ、現状が」

「現状……ですか……?」

頭を押さえて痛みを堪えながらも、どうにか言葉を発するレヴェントン。

窓だった場所から外の様子を確認しつつ、アタシは続ける。

「お前にはまだ失うもんがある。だけど、アタシにはもう失うもんがねえ。それが現状だ」

「……………行動を起こしたあとのリスクを考えろ、ってことですか?」

「そういうことだ」

まあ厳密には『お前の行動一つで大事なものが失われる』が完璧な正解だが、今のレヴェントンにそれを求めるのは野暮だろう。

ここでようやくレヴェントンがちゃんと考えて答えを出したことに安堵を覚えつつ、どこでラジオを確保するかを考えるのだった。

□

「……相変わらず面白みのねえ世界だな」

サツキがフーカの指導に苦戦している頃。さっきまで彼女達が利用していた次元港にある一団が現れた。リーダー格であろう男は不審に思われない動きで周囲を警戒するように見回し、通信端末でどこ

かに連絡する。

「俺だ。今サハラツタ中央都市の次元港を出たところだ。街の様子に変わりはないか？」

『変わりはありません。ただ……』

「どうした？ 何かあったのか？」

部下であろう男の、震えるような声を聞いて思わず眉をひそめるリーダー。

そして端末を通じて聞こえてきた情報に、不愉快そうに口元を歪める。

「そいつあマジで言ってるのか？」

『う、嘘じゃないありません！ さつき街中をぶらついてるところを見たんです！』

「……まあいい。とりあえず念入りに警戒しとけ。少しでも動きがあったら報告するんだ。いいな？」

『りよ、了解しました！』

部下の返答を聞いたリーダーは通話を切り、独特の低い声でポツリと呟く。

「……この世界に『死戦女神』が……」

本来サハラツタにいるはずのない、次元世界最強と名高いヤンキーの異名を。

□

「資金調達、終わったぞ」

「は、はあ……」

たまたま路地裏で遭遇した五人のチンピラをボコし、有り金を全部調達したことを呆れ顔のレヴェントンに報告する。アタシは何も悪くない。悪いのは絡んできたチンピラ共だ。

「ひい、ふう、みい。これだけあればラジオを買うにや充分だ」

それどころか予想以上に貯まった。しかもラジオはおろか、液晶テレビを買えるくらいの額だ。こりゃ飯も四日分は買えそうだな。

さつそく電器店を探すべく、タバコを吸いながら歩みを進める。  
……せつかくだ。レヴェントンがいつの間にか持っていたパンフレットを利用するとしますか。

「レヴェントン。さつきのパンフレット見せろ」

「あつ、はい」

タバコを口に咥えてレヴェントンからパンフレットを受け取り、街の地図が載ってあるページを開く。えーっと電器店電器店……んん？

「二店だけ？」

「二店だけのようですね」

一店しか載っていないなかった。一店はさすがに少なすぎだろ。もしかして地図に載ってないだけで何店かあったりするのかな？

ひとまずその一店を目指すことにした。が、その前に……

「ちよつとそこで待ってろ」

「えっ——ええ!？」

レヴェントンをその場で待たせ、アタシは高所から街の様子を確認するべく、一回のジャンプで二十メートルはあるビルの屋上へ飛び乗る。

……なんか思ったよりも低く感じるな。前に高層ビルの屋上で景色を眺めたことがあるせいかな？ あのビル百メートルは軽くあったもんなあ。

そんなどうでもいいことを考えつつ、ビルからビルへと飛び移っていく。もうレヴェントンの姿は……まだ見えるわ。動いてないわアイツ。

「真面目過ぎんだろ、あのガキ……」

今でこそ普通にしていられるが、昔はこの優れた視覚が原因で、普通の距離感がわからなくなるといふ事態が何度も発生していた。優れているからといって、それが便利だとは限らないのだ。

「おっと、ここに良いか？」

この街で一番高いであろうビルの屋上で動きを止め、双眼鏡涙目の視力で街を眺める。



視界に映るは殺風景な建造物ばかりで、所々にある歓楽街や怪しげな商店街を除けば、お洒落の欠片もない……いや、一応看板はお洒落なものもあるからこの街の本番は夜だな。

当然だが、ここは都市なので人はたくさんいる。……半数ほどギャングやマフィアを連想させるような格好をしているけどな。

「……ん？」

一旦目を閉じ、すぐに開いてもう一度街を眺めていると、二、三口先にいる三人の物騒な黒服と目が合った。

三人とも黒いマスクで顔を隠しているが、体格で男だということは普通にわかる。しかも向こうの雰囲気からして、たまたま目が合ったとかじゃなさそうだ。

「最初から監視してたってか？」

だとしたら何のために？ アタシがここにいると何かマズイことでもあるのか？

その場から動かずにしばらく男達と睨み合っていたが、特に何事もなく向こうの方から去って行った。どうやら今はまだ様子見っぽいな。だけど厄介事に巻き込まれたのは確かだろう。

こうなるとアタシのそばにいるレヴェントンも巻き込まれる可能性があるが、そこはアイツも腹を括っているだろうし、問題はないな

「——あつ」

ラジオ買わなくちや。

□

「結局、電器店はあそこの一店しかなかったな」

あれからレヴェントンを迎えに行くのが面倒になったアタシは、いつも通り一人で地図に載っていた電器店に訪れ、手頃なラジオを購入していた。これで目的達成だ。

今はさっきのようにビルからビルへと飛び移っている最中だ。特に見られている感じはしないし、変な気配もアレ以降、バツタリと途

絶えている。

「……………なんで動いてないんだよ」

レヴェントンのいる場所までもうすぐで着くのだが、どうもあのクソガキさっきの場所から一步も動いている様子がないのだ。

最初のビルに到着したところで気配を殺し、気づかれないよう下を覗き込んでみると、案の定辺りをキョロキョロしているレヴェントンの姿があった。

……いや待て。なんであんなにキョロキョロしてんだアイツ。まるで何かを警戒しているように見えるんだが。変な奴にでも絡まれたか？

「——おいクソガキ」

「は、はいっ!？」

とりあえずレヴェントンを呼びながら、気配を殺したまま彼女の背後へ着地する。

完全に不意を突かれたこともあり、何事だと言わんばかりのビツクリ顔でこちらを振り向くレヴェントン。さすがに慣れたのか、驚きはしても腰は抜かさなかつたなコイツ。

普通の人には聞こえないほどの小声で「な、なんじゃ、緒方さんか……。」と呟き、安心したのかため息をつくレヴェントン。

「何かあったのか？ 傍から見ると挙動不審だぞ、今のお前」

「じ、実はその、さつき黒い服を着たいなげな奴に絡まれて……」  
もう巻き込まれたか。

「何人いた？」

「二人です。どちらも緒方さんのことを聞いてきたけえ、雰囲気も怪しかったんでちいと懲らしめちゃうかと思うたんじゃけど……」

「後のことを考えて、あしらったと？」

「は、はい」

おう、コイツにしては良い判断下してんじゃねえか。あの連中、雰囲気を感じた限りではアタシよりかは雑魚だが、レヴェントンよりは腕が立つようだったしな。

一息つこうとポケットからタバコを取り出し、さつきゴロツキから

パクったライターで火を付ける。手に入れたもんは有効活用しねえと。

「ところで緒方さん」

「ん？」

「その手に持つとるんはなんでしようか？」

そうやってレヴェントンが指差していたのは、アタシが左手に掛けている、ラジオが入っている袋とはまた別の袋だった。

「アタシにとっては必要不可欠な代物だ。詳しいことは明日教えてやる」

太陽の位置からして、そろそろ隠れている月が上る時間だしな。晩飯も調達しなきゃなんねえし、明かりも確保しなきゃならねえ。

タバコを一口吸って紫煙を吐き、溜まった吸い殻をトントンと落とす。このタバコも、普通に買うと金が掛かるんだよなア……。

「レヴェントン。明かりを確保しに行くぞ」

「へ？　なんでに明かりなんか——あつ」

レヴェントンも事の重大さに気づき、思わず開いた口を右手で隠す。

アタシもついさつきまで完全に忘れていたが、廃墟を寢床にする以上、最低限の明かりは必要である。特に夜は目の効かなくなるレヴェントンにとつては死活問題だろう。

そうと決まれば、また来た道(空中コース)を戻る必要があるな。だがレヴェントンは間違いなくついてこれないし、アタシも普通の道は知らねえから……。

「行くぞ。早くしねえと店が閉まる」

「あ、あの、なんでわしを担ぎ上げとるんです——!？」

時間がないのでレヴェントンを米俵のように担ぎ上げ、もう一度ビルの屋上へ飛び乗る。

「な、なんじゃこりゃあ!？」

「大人しくしてろ。死にたくなけりゃな」

牽制するようにレヴェントンを黙らせ、彼女を担ぎ上げているのが嘘のようなスピードで、ビルからビルへと飛び移っていく。

最初のビルから数えて四つ目のところで、レヴェントンが閉じていた口を開いた。

「こ、これ、普通に徒歩で行った方が早いんじゃない……!」

「そんな道は知らねえ」

それにアタシからすれば、こっちの方が障害物も少なく進みやすいんだよね。仮に落ちてもアタシは死なないわけだし。……このガキは別として。

これ以降、レヴェントンは電器店に着くまで黙り込んでいたが、アタシがイタズラでコイツの身体を揺らしたときだけ、面白い声を上げるのだった。

……明日は普通の道で行ってやるか。あのよくわからん連中の目もあるしな。

### 第13話 「耐魔力繊維」

「どうだ？ 確認できたか？」

「はい。アレは間違いなく本物です」

中央都市のビル群に挟まれる位置にある工場にて、黒いマスクを付けた部下の男がリーダーに偵察結果を報告していた。

彼は先ほど、この街で一番高いビルの屋上にある人物がいるのを目撃し、その人物が本人であるかを確かめていたのだ。

リーダーはその報告を受けても信じ切れずにいたが、部下が懐から取り出した一枚の写真を見て、ようやく顔色を変えた。

「マジで『死戦女神』じゃねえか……嘘だと思いたかったのによ」

写真に写っていたのは獣のように鋭い目付きをしている、赤みがかった黒髪の少女——緒方サツキ——だった。どうやって撮ったのか、本人が気付いてもおかしくないほどの至近距離で撮られていた。「残念ながら事実です。それに衝突の可能性を考えると、このまま放っておくわけにはいきません」

この二人が懸念していること——それは『死戦女神』との全面戦争。

不良一人を相手に戦争という表現は大袈裟だが、相手が次元世界最強クラスともなると話は別である。部下の言う通り放っておくわけにもいかず、今から対策を考えなければならぬ。

リーダーがイラつきながらも考えるように右手で頭を掻いていると、部下の男が「ただ……」と彼を宥めるように言った。

「ただ幸いなことに、まだこちらの思惑には気づいていないようでした」

「……そうか。なら次の段階だ。奴が少しでも変な動きを見せたら——仕掛ける。奴はともかく、一般連中に勘付かれるなよ」

「了解しました」

部下の姿が忍者のように掻き消え、その場に残るはリーダーだけとなった。

冷静になろうとタバコを取り出し、オイルライターで火を付けて一

服する。そしてズボンのポケットから、黒に輝く一枚の布切れを取り出した。

「もうすぐだ。もうすぐで次の段階に移れる」

そう呟く男の口元は、さつきまでイラついていたのが嘘のように歪んでいた。

□

「うくん……こりゃあこれでアリかもわからんのおく……」

「はア……呑気に寝やがって」

持参していた寝袋に入り、さつきまでの不満そうな表情が嘘のように緩みまくった顔で寝言をほざくレヴェントンを見て、思わずため息が出た。

このクソガキ……自覚がないだけで意外と順応性あるじゃねえか。伊達に住み込みでバイトやってたわけじゃなさそうだな。

レヴェントンを起こさないよう、音を立てずに外に出て、指の力だけでヤモリのように高速で壁をよじ登っていく。アタシの足に吸盤はないからな。登るときはいつもこうだ。

「よし……」

屋上に到達したところで、犬のお座りのような姿勢で視覚、聴覚、嗅覚で周囲の様子を探っていく。夕方の件を考えると、あの連中が夜に仕掛けてきてもおかしくないしな。

「あつ、ここならこいつを出しても大丈夫かな」

ラジオのついでで入手できた必需品——の一部をポケットに入れていたことを思い出し、周囲を警戒したまま慎重に取り出す。

取り出したその一部——一枚の布切れは赤紫色に輝いており、今宵が満月ということもあつてなお綺麗に見える。

「——ん？」

その布を月に照らし合わせて眺めていると、街の方からわずかな気配を感じた。わずかだが、殺気を纏った者の気配を。

レヴェントンは……寝ているな。さつきとは打って変わって静か

に寝息を立てている。

アタシがクソガキの様子をその場で確認していると、そのわずかな  
気配が近づいてきた。しかも数が増えている。これはもう……。

「やれやれ……」

布切れをポケットに仕舞い、街の方へと跳んでいく。覚悟しやが  
れ、クソツタレ共。人様の休息を邪魔した罪は重いぞ。

□

「……………」

「……………」

翌朝。さつきまでぐっすり眠って良い朝を迎えたと少し喜んでい  
たフーカだが、今は隣を歩くサツキを見て困惑していた。

自分が眠っていたときに何があったのかはわからないが、サツキの  
右頬には一筋の切り傷があった。昨日の彼女にはなかったものだ。

そんなフーカの視線に気づきながらも、いつものようにタバコを取  
り出し、今度はマツチ棒で火を付けるサツキ。最初の間こそ戸惑った  
が、今ではもう見慣れた光景である。

「あの、今日はどちらに？」

「昨日買った代物、覚えてるか？」

「ああ、確かラジオの袋たあ別の袋に入ってたやつですか？」

「そうだ。今日はそれが何なのか見せてやる」

確かに昨日、そがいなこたあ言つとつた気がするのお……。

わりと呑気に内心でその事を思い出していると、サツキが足を止め  
る。フーカが彼女の視線を追ってみると、前方に商店街の入り口とよ  
く似たものがあつた。

だが、そこからは裏の社会を知らないフーカでもわかるほど、怪し  
げな雰囲気漂っている。

これまで感じたようで、実は感じたことのなかった雰囲気気圧さ  
れながらも、フーカは紫煙を吐くサツキに確認を取る。

「お、緒方さん。まさかたあ思いますが……」

「ここまで来て嫌とは言わせねえぞ。腹ア括れ、クソガキ」

「じゃけん、わしはクソガキじゃないって言うとるんに……」

サツキが自分をガキ扱いするのも、一日に何度もあることなので一応慣れてはいる。だが、わかつてはいても反論せずにはいられない。全く臆さずに中へ入っていくサツキに続き、フーカも足を進めていく。

「えっ……」

初めて未知の世界へと踏み込んだフーカの目に入ったのは、幾つもの商店が開かれ、客が集うという、怪しげな雰囲気を除けば普通の商店街とそう変わらない風景だった。

そんなところを、顔色一つ変えずに歩いていくサツキがフーカに忠告する。

「死にたくなけりや離れるなよ。ここじゃ何をされても文句は言えねえからな」

「何をされてもって……」

それってマズインじゃ……。

そう言いかけたところで、出掛かった言葉を錠剤のように飲み込む。言ったところで無駄だと判断したのだ。

「……？」

先ほどから妙に視線を感じるので周りを見回してみると、商店を開いている連中や客人がこちらを見つめていた。まるで珍しいものを見るように、物好きな人間を見るように。

ここが本当にそういう場所だとすれば、慣れていそうなサツキはともかく、自分は彼らから見てお尋ね者ということになるのだろう。

入り口から百メートルほど歩いたところで、お目当ての店舗を見つけたらしいサツキが立ち止まった。

フーカも興味本位でどんな店なのか知ろうと、サツキの後ろから覗くように顔を出す。

「……服屋？」

彼女の目にしたのは、普通の商店街でもよく見かける服屋だった。



だがしかし、そこは裏の服屋。一般的な店とは違い、普通じゃお目に掛かれない奇妙な商品が並んでいる。

ブーツとするように店の様子を眺めるフーカをよそに、サツキと店長らしき男はまるで世間話をするように会話を始めた。

「よう、また来たのかい」

「ああ。こいつはこういうところにしか売ってないんでね」

そう言つてサツキが手に取ったのは、一枚の布切れ。真っ白だったそれはサツキが触れた瞬間、綺麗な赤紫色に輝き始めた。

「綺麗じゃ……」

思わず見惚れ、自分が暗部にいることを忘れそうになるフーカ。そんな彼女の頭に、サツキは目覚ましと言わんばかりに拳骨を入れた。

「あ痛あ……!」

「にしても百枚は少ねえな。いつもならどの店でも倍以上はあるのに」

「それなんだがな……実は昨日、気前の良い旦那が来てな。ちょうど百枚買っていったんだよ」

「マジかよ……じゃあ残り全部買うわ」

「何さらつと百枚全部買おうとしてんだよ。毎度あり!」

財布から相応の金銭を取り出し、それと交換する形で百枚の布切れが入った袋を受け取るサツキ。

いくら何でもそれは多すぎると、フーカは殴られた脳天を押さえながらも呆れ顔になる。しかし、サツキにとっては必要不可欠な代物であるため、これくらいが普通なのだ。

サツキはずっと左手に持っていた、少し吸っただけのタバコを投げ捨てると、新しいタバコを取り出し、来た道に戻り始めた。彼女に置いて行かれないよう、フーカも後に続く。

「おう嬢ちゃん。今日は子連れかい」

「アタシが母親みてえに言うな」

「そこ行くお嬢さん。一回で良いから占っていかない?」

「また今度な」

すれ違いう度に道行く人、商店の人に声を掛けられるサツキ。

さすがに後半は面倒になったのか適当にあしらっていたが、普段の他人をガン無視するサツキとは全く違う、ちゃんとした対応を取る彼女を見て、フーカは驚きざるを得なかった。

□

「かーっ！ やつとこの世界の初ビールが飲めたぜ」

裏の商店街を後にし、途中で購入したビールを街の西部にある廃工場場で飲み干すサツキ。

フーカも彼女に倣うように、自販機で買ったミネラルウォーターを豪快にゴクゴクと飲む。

飲み終わったビールの缶を掴まむように軽々と握り潰し、それを袋に入れたところで、サツキが思い出したように口を開いた。

「そうだレヴェントン」

「はい？」

「こいつを持ってみる」

そう言つて缶ビールの入った袋とは別の袋に手を入れ、先ほど服屋で購入した布切れを一枚取り出し、フーカに差し出すサツキ。

ペットボトルを置いたフーカがそれを何の迷いもなく手に取った瞬間、輝きを失っていた赤紫色の布切れが、綺麗な青色に変わって最初の輝きを取り戻した。

「わあ……」

またしても見惚れてしまい、その布切れに釘付けとなるフーカ。サツキはタバコを一口吸いながら、布切れをもう一枚取り出して言う。

「それが、これが『耐魔力繊維』だ」

「耐魔力の……繊維……？」

全く聞いたことのない単語に、フーカは疑問符を浮かべるように首を傾げる。

そんな彼女を見ても、サツキは特に呆れることもなく「そりやそうだろ」と続ける。

「こいつは違法物だからな」

違法物……つまり麻薬や質量兵器のようなものだろうか。フーカは布切れの裏と表を交互に見ながら、サツキに問い掛ける。

「クスリのようなもんですか？」

「部類としてはその通りだが、そんなもんと一緒にされちゃ困る」

心外だと言わんばかりに吐き捨て、吸い殻を落としてつつ紫煙を吐くサツキ。

「名前の通り、こいつは魔力に対して相応の耐性を持っている」

「魔力に耐性……じゃあ、これで服を作れば……」

「バリアジャケットに限りなく近い、防護服モドキが出来上がる。しかも布一枚分あれば十分なレベルのものが期待できる」

それを聞いて、感心するように布切れを眺めるフーカ。この布がどれだけの代物なのか、さすがにまだ理解はできていないが、サツキの説明で凄い布切れだということはわかったみたいだ。

ここでハツと何かに気づいたフーカは、サツキの服装を舐め回すように眺め、意を決して彼女に訊ねる。

「ひよつとして、緒方さんの着とる服も？」

「あー、そういうことになるな……」

普段はつきりとしたサツキにしては珍しく、曖昧な回答。いつもは深く言及しないフーカも気になったのか、畳みかけるように続ける。

「何か、欠点でもあるんですか？」

「……まアな。詳しくは知らねえが——」

どこか言いづらそうにしていたサツキだったが、吸っていたタバコを足下に捨てて踏み潰し、ため息をつきながらもフーカに説明している。

### 耐魔力繊維。

主に栄えたのは古代ベルカ初期から後期まで。諸王時代に突入する頃には騎士服が普及されたこともあってか、名前すら口に出されなくなっていたらしい。

耐魔力繊維とは名の通り、魔力にそれなりの耐性を持つ特殊な繊維

である。

布切れの状態でも効果があり、これを手に取った者の魔力に反応し、その者の魔力光と同じ、かつ綺麗な色に輝くという特徴がある。

この繊維を服に織り交ぜることにより、現代のバリアジャケットに限りなく近い性能を持った服を作り出すことができる。量は布切れ一枚分で十分に足りるらしい。

バリアジャケットがなかった当時、人々はこの繊維を最大限に活用し、打撃や魔法に耐え得る服を大量に生産していた。

——しかし、当然と言うべきか欠点は存在した。

現代のバリアジャケットとは異なり、この繊維を用いた服自体は魔力耐性を持つものの、着用した者の耐性を向上させるといった、いわゆる肉体への魔力軽減効果は皆無だったのだ。

その欠点はバリアジャケットに等しい性能を持つ騎士服が普及されると同時に浮き彫りとなり、間もなくして存在そのものを歴史から消されてしまった。

それでもこの世からなくなったわけではないので、現在ではサツキのような一部の物好きだけが、今もなおこの繊維を服に織り交ぜている。

「——こんなところかな。アタシの知っている範囲だと」

長つたらしい説明を終え、ため息代わりに新しいタバコで一服するサツキ。

その説明を真剣に聞いて、今度はそれなりに理解できたフーカだが、一つだけ気になることがあった。

「あの、緒方さん」

「ああ？」

「どうしてそれが違法物扱いにされとるんでしょっか？」

まっ、そう聞くのが普通だろうな。

予想通りの質問に思わず微笑むも、すぐにいつものふてぶてしい顔

になって口を開く。

「それがわからねえんだよ。まア、強いて言うなら原理が不明つてのが大きいんじゃないか?」

そう、この特殊繊維、どういう原理でできているのか未だにわかっていないのだ。……もつとも繊維自体はさほど希少なものじゃないので、原理が明かされるのは時間の問題だろうが。

今度こそ説明を終えたと言うように、タバコを一口吸って紫煙を吐き出すサツキ。

一方でフーカはサツキから受け取った布切れがよほど気に入ったのか、彼女に許可を取ることなくそれをズボンのポケットに仕舞い込んだ。

そして、このときのフーカはおろか、サツキさえ知るよしもなかった。

——このたった一枚の布切れが、フーカにとってかけがえのない物になるなんて。

□

「いい加減寝かせろや、クソツタレ」

レヴェントンを無理やり例の商店街へ連れ出した日の夜。アタシは昨日のように、寝る時間を惜しんで厄介者を迎え撃っていた。

それでもバレないように動いていたつもりだったが、不幸にも右頬を軽く切られたせいで隠すことはできなくなった。

あのガキ、ああ見えて意外と見るところは見ているしな。ウザいけど。

「チツ……」

いきなり眼前に迫ってきた小さな矢を、しっかりと見ながらかわす。単なる目潰しか、それとも毒が塗られた暗器か。まアこの際、当たらなければどっちでもいいか。

可能な限り音を立てず高速で移動し、矢を放ったであろう黒のマス

クの背後を取り、こちらへ振り向いたところを右のハイキックで沈める。

続いて背後から放たれた吹き矢を、振り返りながら左の中指と人差し指でキャッチし、そのまま指の力だけで押し折る。そして黒のマスクの連れであろう細身の男を、右拳で殴り飛ばした。

「……悪いことア言わねえ。さっさと退きやがれ」

「それはできない。何故なら我々が退くとき——それは其方の命を頂戴したときだからだ」

ちようど現れた三人目の男がそう言うも、アタシはできるだけ耳を貸さない。そもそもこの手のタイプは貸しても無駄だしな。

というか見た目や攻撃方法を見る限り、コイツらは奇襲を得意とする暗殺者型だ。そんなのに普通のケンカができるとは思いにくないが……。

「では参る——！」

「上等だ」

男は懐から吹き矢を取り出すと、アタシの首元目掛けて矢を撃つてきた。すぐさまこれを回避し、お返しに奴の首元へ後ろ回し蹴りを繰り出す。

男も負けじとこの蹴りを屈んで避け、再び矢を放ってくる。アタシはその小さな矢を、今度は噛んで受け止め、そのまま唇を窄め、受け止めた矢を吹き返した。

「むっ——」

自分の武器ということもあつてか、アタシが吹いた矢をあつさりと避ける黒マスクの男。

……それにしても口で受け止めて大丈夫だったか？ もし矢に遅効性の毒が塗られてもしていたら、アタシがお陀仏するのは時間の問題なんだが……まあいいや。今は生きてるし。

「せいやっ——」

「オラアッ——」

繰り出された左ストレットを受け止め、空いている右の拳を薙ぐように放ち、男がしゃがみ込んで回避した瞬間を狙って蹴り上げる。

蹴りは見事下顎に命中し、脳震盪でも起こしたのかさつきまでの俊敏な動きが嘘のように、急に男の動きが鈍くなった。

「くっ……い！」

もちろん、アタシがそんな絶好のチャンスを逃すはずもない。すかさず間合いを詰め、膝蹴りを何度も入れて、頭突きからの左拳による叩きつけでとどめを刺した。

地面が叩き割れ、それに伴った轟音が周囲に響き渡る。街の方に聞こえていないか少し不安だが、その街から聞こえる喧騒から察するに大丈夫そうだな。

とりあえず、今回の防衛戦は終わった。口内に溜まった痰を唾ごと吐き捨て、懐からタバコとライターを取り出す。倒れている男は意識こそ残っているが、戦う力はもうなさそうだ。

「……おい」

気絶したふりでもしているのか、こちらを見ようとしない男の頭を一回踏みつけ、ヒビの入ったマスクを完全に破壊する。

これはさすがにやり過ぎたか、男は呻き声を上げて顔を歪ませた。……普通におっさんだな。もう少し若者だと思っていたよ。

「っ……其方は敗者を何だと思っている……い！」

「うっせえ。負け犬が勝者に逆らってんじゃねえ」

男がしつかりと反応してくれたことに少し安堵するが、時間も一応限られているので急がねば。

「単刀直入に聞けど。——お前らのボスは誰だ？」

## 第14話 「幕開けと工場」

「よう寝たなあ〜……」

強めの日差しを顔に浴び、フーカは目を覚ました。目を擦りながら寝袋に入ったまま上半身を起こし、周囲を警戒するように見回す。

サツキが毎晩寝る時間を割いてまで厄介者の対処に当たっていたのだが、呑気にいびきを掻いていたフーカがそれを知るよしもない。

両手で頬を叩いて完全に目を覚まし、寝袋から出てもう一度周囲を見回すフーカ。そして思ったことを一言にまとめて呟く。

「緒方さんがおらん……?」

サツキがいない。いつもなら自分よりも早く起きて外の様子を窺っているサツキが、どこにもいないのだ。荷物があるので置き去りにされたわけではなさそうだが……。

急いで着替えたフーカは外に出るも、廃墟の周りには人の姿どころか足跡一つすらなかった。

「また上を跳んでいったんか?」

この前みたいに、器用にビルからビルへ飛び移っていったのだろうか。それなら足跡の一つもないのは納得できる。地面には足を付けていないのだから。

それに加え、フーカのいる廃墟から街まではそれなりに距離がある。なのでサツキの場合、走るよりも跳んでいった方が速いのだ。

実を言うとフーカもサツキのように跳んでみたいと思っただが、さすがに彼女ほどの身体能力は持っていないため、例え魔力で肉体を強化しても同じことはできないだろう。

「……まあええか」

サツキのことだからいざ戻ってくるだろう。そう判断し、寝室に戻るフーカ。

食料は足りているので、今日はやることがないと暇そうに座り込んだところで、先週サツキが買ってきたラジオのスイッチを入れる。すると、普通の日常ではあり得ない言葉が耳に入ってきた。



『――街が謎の集団に襲われています!』

「……………え?」

□

「ふう〜…………」

厄介者を始末してから一週間経ったある日。アタシはこの街に潜む連中の情報を集めるべく、タバコを吸いながら街を徘徊していた。

レヴェントンには何も言わずに出てきたが、何もアタシの方から巻き込む必要はないので何も問題はないと思っている。…………呑気に寝てる姿にムカついたというのもあるが。

ちなみに昨日も厄介者を始末したが、ソイツが口を割ることはなかった。あれでも主には忠誠を誓っているってわけか。少し感心したよ。…………まア、そのせいで連中に関する手掛かりは今もなお掴めていないわけだが。もっと痛めつけた方が良かっただろうか?」

「それにしても…………」

街は相変わらず平和だが、今日は何かがおかしい。平和ボケでも空いているのか住民は一人も気づいていないようだが、わずかながら空気がピリピリしている。

いつでも対応できるよう周囲を警戒しつつ、コンビニで買った朝飯を食べるために座れる場所を探す。理想は地球のそれみたくベンチのある公園だが、最悪ビルの屋上でも良いだろう。

右手に持つタバコを一口吸っていると、かなり遠くの方から爆発音が聞こえてきた。

「ん…………?」

すぐさまタバコを投げ捨て、朝飯を一瞬で平らげる。相当離れたところで爆発したせいか、アタシ以外はまだ誰も異変に気づいていない。

しかし、それはアタシの杞憂だった。

「——っ!？」

今度はすぐ近くにある住宅が、いきなり爆発を起こしたのだ。さすがの住民達もマズイと思ったようで、まるで怪獣が現れたかのようにパニックに陥り始める。

そんな中、アタシは冷静に事の原因について考えていた。まだ起こったばかりなので明確なことは何もわからないが、間違っても自然現象ではないだろう。

だとするとこれは人為的なもの。まだ調査していない世界ということもあつて、管理局が出しゃばってくる可能性は高い——

『ターゲット捕捉。排除します』

「ああ?」

アタシが廃墟へ戻ろうと両足に力を入れたところで、爆炎の中から黒の短髪に赤のバイザーという、何とも言えない奴が現れた。声質からして人間じゃねえな。おそらくロボットか。

ソイツはどこからともなく取り出した剣を右手に持つと、何の躊躇いもなくアタシに斬り掛かってきた。

「おつとおー!」

とはいえそんなに速くはなかったので、右腕で迫り来る剣の軌道を逸らし、握り込んだ左の拳でソイツの顔面をぶん殴り、そのままソイツを爆炎の方へ押し戻すように吹っ飛ばす。

……硬いな。やはりロボットで間違いなさそうだ。殴った時の感触が明らかにおかしかった。

『ガガ……』

「おつ?」

今の一撃でどこか破損でもしたのか、ロボットは全身をスパークさせた状態で再び姿を現す。あのまま突進すればかなり有効な攻撃になると思う。

それでも言語機能を失っただけらしく、構えた剣に魔力的なエネルギー

ギーを集中させると、アタシの首元目掛けて剣を振るい、光の刃を放ってきた。

手刀で一刀両断してやろうと思ったが、ロボットがアタシの背後を取るような動きで移動し出したので、咄嗟に屈んで回避し、人並みの速さで走るロボットを目で追う。

ていうか遅いな。アタシの知っているロボットとえば、共通して人間じゃ届かないほどの身体能力を持っている。もしかするとあのロボット、偵察機か失敗作の類いか？

「来るならさっさと来いッ！」

『ガ——!?!』

じれったくなつたのでアタシの方から動き、ロボットの正面に回り込んで左のハイキックをお見舞いする。拳同様、顔面にそれを受けたロボットは動かなくなつた。

……いやもう終わりかよ？ 意外と簡単に機能を停止しやがつたぞこのガラクタ。せめて最後に『機能を停止します』とでも言ってくれよ。その方がわかりやすいから。

「ん——!?!」

念のために動かなくなつたロボットを粉々になるまで踏み潰そうと思つた瞬間、背後から殺気を感じたのですぐさましやがみ込む。するとアタシの頭があつた場所を、今度は魔力的な光弾が通過していった。

『ターゲット捕捉。排除します』

「……おいおい、冗談だろ？」

聞こえた声は一人分。だが、後ろを振り向いたアタシの視界には、二十人はいるであろうロボット軍団が映っている。今度は数の暴力かよ………!

□

「はっ、はっ……！」

ラジオで不穏な言葉を聞いたフリーカは、逃げ惑う十人の流れに逆らうように走っていた。理由は言うまでもなく、街にいるかもしれないサツキのことが気掛かりになったからだ。

フリーカは人混みとタイムロスを避けるべく、運よく近くにあった路地裏に入り込み、乱れていた息を整える。

「近くにいってくれとええんじやが……」

祈るようにそう思いつつ、フリーカはそのまま路地裏を通って別の道に出る。

その道は避難には使われていないようで、人の姿どころか人気すら感じられなかった。

人気の代わりに異様な気味悪さを感じながらも、都心に向かって足を進めるフリーカ。そしてサツキが利用していきそうな公園に着いたところで、ある物を見つけた。

「？ 何じゃこれは？」

それは赤いゴーグルのような物だった。しかも一つだけではなく、よく見るとあちこちに落ちている。

足下にあつたものを拾い上げ、試しに装着してみるも、視界が緑色になっただけで何も起きなかった。

それでも何かの役に立つかもしれないと思つたフリーカは、拾い上げたゴーグルを額に上げる形で装着し、そのまま走り出す。

「それにしても緒方さん、一体どこにおるんじや……！」

全く見つからないサツキに対していよいよ苛立ち始めたフリーカだったが、高層ビルの真下に来たところで、ようやくお目当ての人物が目に入った。

だがその人物——緒方サツキは何かと戦っており、敵の攻撃であろう砲撃を軽々と弾き返し、相手が怯んだところを狙って脳天に踵落としをお見舞いしていた。

脳天に強烈であろう一撃を食らった相手は、奇妙な電子音と共にその場で崩れ落ちる。サツキはそれを一瞥することもなく、こちらへ振り向く。

「緒方さんっ!」

「……何してんだ、お前」

フーカが装着しているゴーグルに視線を向けつつ、本来ならここにいるはずのない、いるべきではない彼女に呆れるサツキ。

すぐに崩れ落ちた相手——ロボットを容赦なく踏み潰しながら、サツキはロボットの——人間で言うところの心臓部から一枚の布を強引に引き剥がした。

「それって……耐魔力繊維ですか?」

「多分な。どのガラクタからも出てきやがった」

そう言うサツキはズボンのポケットに手を入れ、十枚以上もの布を取り出し、めんどくさそうに足下にばら撒く。フーカは花びらのように舞い落ちる布を、ただ呆然と見つめていた。

「これ……みなあのロボットから?」

「今アタシがそう言ったろうが」

布の数から考えて十体以上ものロボットを相手にしていたであろうサツキは、隠せぬ苛立ちを抑えるべく、周りの状況など知ったことかと言わんばかりに一服し始める。

この人は死んでもタバコを吸っていいそうじゃ。そう思っただけで呆れ返るフーカだったが、上空から爆発音がしたことですぐに真剣な表情になった。

「な、なんじゃ今の——!?!」

「……あーあ」

動揺しながらもフーカはバツと上を見上げ、絶句した。

——おそらくさっきのラジオ放送をしていたであろう、ヘリコプターらしき物体が燃えながら墜落していたからだ。

「え、あ……」

目の前で起こる出来事に頭が追い付かず、無数の布を見た時以上に呆然とするフーカ。

あの乗り物には人が載っていたはずだ。じゃあ、その人たちは……

?

いつまでも墜落したヘリを見つめるフーカに痺れを切らし、彼女の後頭部に思いつきり拳骨をかますサツキ。フーカは後頭部から感じた痛みでようやく我に返り、ヘリから視線を外した。

「行くぞ、レヴェントン」

「えっ……ひ、避難はせんのですか!？」

「当たり前だろうが。今から避難して何になる？　そもそもアタシは元凶をブチのめすためにここまで来たんだよ。そんなに避難してえならテメエ一人でしやがれ」

サツキはタバコを一口吸って紫煙を吐き、それを足下に投げ捨てて火が消えるまで踏みつけると、本当に足を進め始めた。

フーカはどんどん離れていく彼女の背中を見つめていたが、もう諦めたと言いたそうにため息をつき、その後を追い始めた。

目指すは——ビル群に挟まれた位置にある工場だ。

□

「……隠す気ねえだろコイツら」

「どうやらそんなようですね……」

連中が潜伏しているような工場に着いたのは良いが、入り口には『自分達のアジトはここです』と言わんばかりに、二人の見張りが立っていた。アタシとレヴェントンで始末したけど。

気絶した見張りを蹴り飛ばし、コソコソとすることなく大きな鉄の扉を開ける。扉は見かけほど重くなかったな……まあ良いけど。

「車がいっぱいじゃ……」

「元々は車庫として使われていたんだろ」

だけどレヴェントンの言う通り、工場の中はトラックでびっしり

だった。いくら何でも多くねえか？

アタシがトラックの多さに疑問を抱いていると、レヴェントンが勝手にトラックの後ろ扉を開けていた。いや何してんのコイツ。

「緒方さん！ 何かいなげなもんがありました！」

レヴェントンを荷台から落としてボコボコにしたいという衝動を抑え、念のために視野を広げつつ彼女が指差す方を見てみる。

「……いなげなもんどころじゃねえぞ、これ」

そこにあつたのは、漫画やアニメで見た療育ポッドのようなカプセルだった。しかも中には緑の液体と人間らしき者も入っている。

さっきのロボットとは違い、この人間らしき者からは機械的なものを感じられない。まさかクローンか？ だとしたら誰の？

レヴェントンもとんでもないものを見てしまった、という顔でアタシの方を向く。どうやら相当ヤバイことに首を突っ込んでしまったらしいな。だからといって今更引き下がるつもりはないが。

ひとまず人間らしき者は置いておき、あまりにも静かな工場内を彷徨っていると、奥の方から二人分の足音が聞こえてきた。

すぐさまレヴェントンの手を掴み、天井に向かってジャンプする。そして空いている左手で鉄筋のようなものを掴んでぶら下がる形になった。

……マズイ、思わず天井に隠れてしまった。いや、これは隠れていると言えるのか？

「やっぱりバネットさんの考えてることはわかんねえわ」

「わからなくても良いさ。俺たちはボスに従っていればいい」

「まあ、それもそうか。こないだなんて俺のために治療もしてくれたし、尽くさないわけにはいかないよな」

真下からそんな会話が聞こえてくる。アタシほど耳が良くないレヴェントンには、間違いなくコソコソ話にしか聞こえないだろう。ていうか怯えてやがる。高所恐怖症か？

音を立てないよう、慎重に視線だけを真下に向けてみると、構成員らしき二人の男が会話をしながら見回りをしていた。なるほど、良いことを聞いたな。親玉の名前はバネットって言うのか。

このままやり過ぎそうかと思ったが、外の方から十人以上もの気配が近づいてきた。これ以上ジツとしてるのは危険だな……いや、もう待ってられるか。強行突破だ。

「やるぞ、レヴェントン」

「えっ、はい——!?!」

やむを得ずレヴェントンを抱きかかえ、手を放して落下するように着地する。

着地の瞬間、思いつきり音を立ててしまったので、当然構成員の二人組はこちらへ振り向いた。

「なんだお前ら?!」

「いつの間に入ったんだ!?!」

どこから入ってきた、ではなくいつの間に入ってきたんだと聞く辺り、バカだが間抜けではないらしいな。いや、敵を入れた時点で間抜けか。

一人はマシンガンのような銃型デバイスを構え、もう一人はまともな武器を支給してもらえなかったのか、短剣を構える。良い機会だ。後者はレヴェントンに任せてみるか。

「レヴェントン、短剣の方をやれ。アタシはマシンガンの方をやる」  
「押忍ッ!」

アタシは真正面から突撃し、マシンガンの男と短剣の男を分断する。時間がない、ウォーミングアップも兼ねてさっさと片付けてやる。

男の方も余裕がないのか、アタシが向き合った直後に魔力弾を連射してきた。短剣の方も、レヴェントンに不意打ち気味で襲い掛かっている。

すかさず弾幕の全てを弾いていき、一部をトラック数台にぶつけ、一部を短剣男の方へ逸らしていく。

それを食らいそうになった短剣男はミッドチルダ式の魔法陣を展開し、自分に迫る魔力弾をレヴェントンの方に弾いていく。

レヴェントンも負けじと全ての弾幕をかわし、魔力を纏った拳を繰り出す。それ自体は当たらなかったが、短剣男は目を見開いて驚いて



いた。おそらくレヴェントンの魔力量にビビったのだろう。

「ドラアッー！」

「ぐはあっ!?!」

こちらがよそ見でもしていると思ったのか、男が銃の引き金を引こうとした際に一瞬の隙を見せてくれた。アタシはその瞬間について懐に潜り込み、右の拳を腹部に叩き込む。

拳圧によるものか、男の肋骨にヒビが入るような音と、男の背後から何かが碎ける音が聞こえてくる。

そして防御も身構えもせずモロに食らった男は息を詰まらせ、身体をくの字に曲げてその場に倒れ込んだ。

「ふう、アイツは……」

別に疲れていたわけではないが一息つき、一人で短剣持ちの男と戦うレヴェントンを見つめる。

頬を、腕を、脚を軽く斬られながらも、彼女は渾身の左アッパーで男の動きを止め、右の拳でダウンを奪っていた。……あのガキ、あんなに戦い慣れてたっけ？ それとも単に男の方が弱かったとか？

「お前、そんなに場慣れしてたか？」

「いえ、その……一週間ほど前からなんべんもいなげな輩に絡まれてしまいました……」

「ああ、なるほど」

コイツも完全に巻き込まれていたのか。夜中に訪れる厄介者の始末で全く気づかなかったよ。それっぽい素振りすら見せてなかったしな。

一応男達が持っていたキーカードを奪い取り、工場の奥へと進んでいく。

灯りがないのか奥へ進めば進むほど暗くなっていき、やがて大きな両開きの鉄扉に辿り着いた。さっきのカードはここで使うのか？

「……ねえな」

「何がじゃ？」

「カードが使えるような場所がねえ」

しかし、扉にはキーカードが使えるようなところがない。セキユリ

テイが万全なのかザルなのかもうわかんねえなこれ。

仕方ないので右腕を扉にぶっ刺し、手首で引っ掛けるように固定したのを確認してそのまま力づくで引き剥がした。

「もちいと穏便にやった方がえかつたんじゃ……」

どうせ隠れたってバレるんだ。ならもういつそのこと派手に行こうじゃねえか。

人の気配がないか警戒しつつ中に入ると、さっきトラックの中で見たカプセルが何個も、何十個も、綺麗に配置されていた。

「さつき見たやつもそうじゃったが、なんで人が中に入っとるんじや……？」

さすがのレヴェントンも恐怖で声を震わせ、カプセル一つ一つに入っている人間らしき者を凝視する。アタシも少しビビったわ。悪趣味にしては度が過ぎるぞこれ。

さらに奥へ行く途中、試しにカプセルの一つをコンコンとヒビが入らない程度力で叩いてみたが、中にいる者は一切の反応を見せなかった。呼吸の音がするから生きてはいるんだろうが……。

「緒方さん、ここに何かあります」

「ん？」

部屋の奥にあったデスク……上にあつたパソコンを弄っていると、レヴェントンが五枚ほどの資料を手を取っていた。アタシはすぐにそれを受け取り、一枚目に目を通す。

「……プロジェクトF？」

一枚目の資料。そこにはプロジェクトF・A・T・E、略してプロジェクトFの詳細が書かれていた。

確かこれ、数年前にJS事件を引き起こした張本人——ジェイル・スカリエツィが基礎を設計していたやつだよな？　なんでその資料がこんなところにあるんだ？

続いて二枚目に目を通してみると、今度は「マリアージュ」という屍兵器に関する情報が目に入った。戦闘機人なら知っているが、この

屍兵器とやらは聞いたことがねえな……。

「何なんでしようか、これ……」

「……知りたいのか？」

「そりゃあ、まあ……」

好奇心には勝てないのか、怯えるような顔でアタシに聞いてくるレヴェントン。……これは話さねえ方が良いだろ。コイツの立場的に考えて。

アタシとしては全部話してやりたいが、この先話した情報が変な奴に知られる可能性を考えると……やっぱり話さない方が良いわ。この情報からアタシのことがバレる可能性だってあるしな。

「ダメだ。これを知ったらお前、管理局に捕まるぞ」

「そがぁにやばい情報なんですか……!?!」

知ってるだけでもヤバイからこうして警告してんだよ。察しろクソガキ。

「それにしたって……」

これだけヤバイ情報をたくさん持っていながら、パソコンにはどこかハッキングした形跡がなかった。一体どこで手に入れたんだ？

読み終えた二枚の資料をコンパクトに折り畳み、ズボンのポケット

へ――

「……………お前が持ってる」

「えっ?」

――入れようとしたところで一旦手を止め、常に前線で暴れるアタシではなく、力不足で足手まといなレヴェントンのズボンのポケットに入れることにした。

これならアタシが暴れても大事には至らないし、アタシは心置きなく暴れることができる。

「何があっても中は見るなよ? いいな?」

「お、押忍……」

レヴェントンが頷いたのを確認し、三、四枚目の資料に目を通したところで、アタシは思わず首を傾げてしまった。

「——フォーミュラ？ ヴァリアントアームズ？」

またしても聞いたことのない単語だった。だがいざ詳細を読んでみると、それが相当ヤバイものであることはわかった。

アームズの方はヴァリアントシステムとやらにも使われるコアを中枢機として生成される武器で、状況に応じて様々な形状に変化させることができるらしい。そして……。

「惑星エルトリアで開発された、エネルギー干渉術式……」

アタシとしてはこっちの方が厄介だと感じている。またまた聞いたことのない単語が出てきたが、問題はそこじゃねえ。

この資料にはこう書いてやがる。体内に専用のナノマシンを循環させ、それによりエネルギーの運用や機械類の動力供給を行う、と。

「ふざけやがって……!」

ただでさえ戦闘機人なんてもんが存在してるのに、今度は体内に微量の機械を仕込むだア？ この世界の連中はどこまで機械に頼れば気が済むんだ……! しかも他の世界の技術を使つてまで……そこまですて力が欲しいのかア……!?

「いくぞ」

黒幕の打倒を改めて誓い、読み終えた反吐が出そうなそれをレヴェエントンに預け——

「ああ？」

「こ、この音って……!?!」

レヴェエントンに資料を預けた瞬間、室内に警報が響き渡った。

全く——こっちから動く手間を省きやがって。せっかくだしお礼にブチのめしてやるか。

## 第15話 「屍兵器」

《緊急事態発生。二名の侵入者を確認。直ちに出勤し、排除せよ》

「ああ?」

「こ、これって……!?」

レヴェントンに反吐が出そうな資料を預けた瞬間、室内に警報が響き渡った。

《緊急事態発生。二名の侵入者を確認。直ちに出勤し、排除せよ》

四方八方から構成員で足音でも聞こえてくるのかと思いきや、突如部屋にある全てのカプセルが開かれ、中に入っていた者が解き放たれていく。ソイツらはさつきまで微動だにしなかったのが嘘のようにテキパキと動き始め、生まれたままの姿であることを意に介さず、戦闘態勢を取る。

……目視した限りじゃ五十はいるか? 何にせよ、さつきのロボット軍団が可愛く見えるほどの数だな。これで一人一人のスペックが高かったらめんどくせえぞ。

その者——もう屍兵器でいいや。屍兵器の一体が集団の先頭に立つと、お試しと言わんばかりに両腕を剣に変換させ、アタシとレヴェントンに斬り掛かってきた。

「えっ——!?」

「あらよっとー!」

レヴェントンをデスクの奥へ蹴り飛ばし、迫り来る刃を上から振り下ろした左肘で押し折り、奴の動きが止まった一瞬の隙について右のボディブローを叩き込んだ。

「っ!?!」

「へえ、血は赤いのか」

ソイツの吐いた血が赤であること、声が人のそれに近いものであることを確認し、痛覚もあるのか怯んだところを右で蹴飛ばす。

仲間意識というものはないのか、他の奴らは蹴飛ばされた奴には目も暮れず、アタシに襲い掛かってきた。その腕を、銃やら槍やら砲口やらに変形させて。

さすがに全員をまとめて相手するのは部屋の広さ的に難しいので、二、三体同時を目安に蹴散らしていく。レヴェントンの方も追い詰められたのか、一対一とはいえ屍兵器と戦っていた。まあ頑張れ。

殴る蹴るをしている最中、アタシは援軍のことも考えて長期戦は良くないと判断し、向かってくる奴は全て一撃の下に秒殺することにした。もちろん、二、三体同時相手も忘れずに。

「チツ——！」

だが三十体目を倒したところで、連中の動きが少しずつ良くなっていることに気づいた。ある奴はアタシの背後を取ったうえで砲撃を撃ち、ある奴は低空姿勢から槍を突き出し、ある奴は武器を使わずに肉弾戦を挑んでくる。どうやら戦いながら学習することができるらしいな。

突き出された槍をピースで受け止め、懐への前蹴りで槍の屍兵器を吹っ飛ばす。次に離れたところにいる砲台係のような奴をブチのめそうと、肉弾戦の奴が放った拳を踏み台にしてジャンプする。

砲台の奴はこれを好機と見たのか、両腕の砲口から魔力的なものであろう砲撃を撃ち出す。

「な、めんなー！」

アタシはそれを踏みつけて奴の背後に回り、足払いで転倒させ、顔を思いっきり踏み抜いた。

頭部から出る赤い血が溢れるように広がるのを見て、思った。コイツら、学習能力はあれど元のスペックは大したことないらしい。ロボットに比べると幾分かはマシだが。

砲台係がやられて焦ったのか、射撃の奴がさっきの男みたくマシンガンのように変形させた銃を撃ちまくってきた。アタシを蜂の巣にでもしたいのか？

「レヴェントンは……」

避けるのも面倒なので、お望み通り蜂の巣にされながら、さつき一人に襲われていたレヴェントンの様子を確認する。

「くっ、この……」

まだ襲われていた。抵抗はしているみたいだが、さすがにさつきの構成員とは勝手が違うようで、レヴェントンの拳が届かない距離を維持されている。

しかもレヴェントンが相手にしている屍兵器、腕の一部であろう槍を棒術のように振るってやがる。動きも生き残っている奴の中じや一番良いし、槍を突撃のために使っていた奴とは大違いだな。

レヴェントンも負けじと拳による連打に蹴りを織り交ぜてはいるが、やはり間合いを上手く取られているせいで一発も当たる気配がない。元タリーチも短いしな。……さてと。

「そろそろ終わらせるか」

さつきから蜂に巣にされていたが、いい加減それだけで進展がないのが鬱陶しくなってきた。ほんの少しは痛い、それでも本当に大したことがない。レヴェントン辺りは危ないだろうが。

魔力でできた黒い弾丸を顔に受けつつ、射撃の奴との距離を一気になくし、チェーンガンのような形状になっている右腕を手刀で押し折り、身体が斜めに傾いたところで、ミドルキックを左頬にブチ込んだ。

「……!？」

言語機能があるのかなのか。射撃の奴は言葉を発することなく、あつさりと吹っ飛んで壁に激突し、そのまま動かなくなった。

アタシが逃がしたレヴェントンを狙って襲っている辺り、こちらの言うことを理解してはいるんだろうが……まだその辺はプログラムされていないのか？

残りの屍兵器も動きこそ良くなっていたが、やはり元が低スペックだったこともあり、少し手こずっただけで何の問題もなく、最後の一体になるまで殲滅し続けた。そして――

「お前で最後だ」

「……………」

——その最後の一体と対峙する。いや、レヴェントンと戦っている奴も含めると二体か。

最後の一体はこれまでの個体と違い、まるで格闘技選手のような構えを取った。しかも丸腰で、かつ両腕に魔力であろうエネルギーを纏って。

アタシもそれに合わせて構える——なんてことはせず、ただただソイツを睨みつける。

「な、め、んな……い！」

いきなり喋ったかと思えば右腕を砲口に変形させ、拳も届くほどの至近距離から砲撃が放つ。すぐにこれを回避し、右側から左拳を打ち出すも、奴は砲撃を中断すると空いている左手でこれを受け止めた。「おっ!？」

マジかよコイツ。ここに来て喋りやがったぞ。しかもさつきアタシが言った言葉を。どうやら言語機能はちゃんとあつたみたいだな。

拳を受け止められたまま右のハイキックを繰り出すも、今度は元に戻した右腕で受け止められ、そのまま身体を持ち上げられ、きりもみ回転させられながら地面に叩きつけられた。

「いつて——!？」

おかしい。コイツらの身体スペックは低いはずだ。まさか倒された奴が獲得した情報を元に、成長しているのか？ だとしたらそれぞれ情報は共有できるってわけか——!

「んなクソッ！」

これまでアタシがやってきたように、左足で顔面を踏みつけようとする最後の屍兵器。

そう簡単に食らってたまるか。避けはせずに額で足を受け止め、身体がぐらついたところを狙って左脚を掴み、そのまま横に投げ飛ばす。

が、最後の屍兵器は危なげながらもダメージを受けることなく着地し、左腕をショットガンの形に変形させ、黒い魔力の散弾を何発も



撃ってきた。

「……………」

今度は受けるとヤバイ気がしたので防御もせずに回避し、間合いを詰めて飛び蹴りを繰り返す。

蹴りは胸元に直撃し、最後の屍兵器も血を吐いたが、そのままアシの脚を掴むと強引に振り回し、空になったカプセルへと投げ飛ばしやがった。

受け身も取らず、宙で体勢を変えることもなくカプセルに激突し、背中にガラスの破片が刺さったかのような痛みを覚える。多分刺さったか？ 多分刺さったかこれ？

「お、ラアッ！」

背中 of 痛み に 耐え つ つ 立ち 上がり、距離を詰めてきた最後の屍兵器が首元目掛けて振るってきた、剣に変形させた右腕を咄嗟にかわす。すると左腕を火炎放射器に変形させ、そのまま火炎を放射してきた。マズイ、これは魔力によるものじゃねえぞ……………」

「あちい!?!」

「ぎ、まあ、み、ろ……………」

急いで距離を取るも、右頬に少し浴びてしまい、思わず膝をつきそうになる。コイツら、どんだけの武装データをインプットされてやがるんだ……………!?!

また喋ったことにも驚きながら、火傷したであろう頬の痛みを意に介することなく、その場で拳を突き出し、矢のような拳圧を飛ばす。

こんなところでこれを使うつもりはなかったが、この相手には使った方が良くないかもしれないと思ったのだ。特に理由はないが。

「な、に、これっ!?!」

奴さんにとっちゃ未知の攻撃だったのか、またまた新しい言葉を喋りながらも、拳圧を鳩尾に食らって吹っ飛ばす最後の屍兵器。それにしても体重が軽いのか、よく吹っ飛ばすコイツら。

しかし威力が足りなかったのか、最後の屍兵器はガクガクと震える身体を必死に起こすと、両腕をジェット機のノズルみたいな形に変形させ、それを使つて一気に加速してきた。ついに加速能力まで会得し

たか……!

「ちよ——!?!」

予想以上の速さに一瞬怯んでしまっても、首元を狙って放たれた右蹴りをバックステップで回避する。あの形態じや腕は使えないだろうが、機動力という問題はなくなったに違いない。

加速と共に次々と繰り出される蹴りを回避していき、上半身が隙だらけと判断したアタシは、蹴りとして放たれた左脚を踏み台にして跳び上がり、振り上げた右拳を脳天目掛けて振り下ろした。

「いたっ!?!」

屍兵器とは思えないほど可愛らしい声を上げ、その場で膝をつく最後の屍兵器。

もちろん、ここで見逃すなんて選択肢はない。管理局辺りだと見逃しそうだが、あいにくアタシにそこまで相手を思いやる心はない。

人間のように涙目で訴えかけるような視線を向けてくる最後の屍兵器。この短時間でここまで人間らしくなるのは凄いもんだが——

「死んでろ」

——それもおしまいだ。苦しみながら眠りにつけ。

右足で顔面を容赦なく踏みつけ、そのまま全身をくまなく踏み潰していく。クソツ、他の奴らよりもめっちゃくちゃ硬いぞコイツ。一体どんだけの情報を元に成長したんだ?

そして完全に動かなくなつたのを確認し、踏むのをやめて未だに苦戦を強いられているレヴェントンの方へ振り向く。

「……………あいつた〜」

デスクのそばにあった椅子にどっかりと座り込み、顔をしかめて背中を擦る。今になって背中が響いてきやがった。血は出てないが……骨とか折れてないだろうな?

さすがにそれは大丈夫だと思っても少し不安を覚えつつ、レヴェントンと本当に最後の屍兵器との戦いを見守ることにする。

こっちは倒した。次はお前が倒す番だ、レヴェントン。

□

「はああ——っ!？」

サツキが他の個体が得た情報を元に急成長していった屍兵器を仕留めた頃。フーカもまた、一体の屍兵器と戦い続けていた。

先ほど彼女の指示でデスクの後ろへ隠れていたフーカだが、程なくして一体の屍兵器に見つかってしまい、やむを得ず戦うことにしたのだ。

青く光る魔力を拳に纏い、それを放つもまるで読まれているかのようにかわされ、横から振るわれた槍を食らってしまうフーカ。小柄ゆえに体重も軽いため、あっけなく吹っ飛ばされた。

「こんのお！」

すぐに体勢を整えるも、向こうが突っ込んでこないのではなかなか自分のペースを保てずにいる。かといってこちらから突っ込めば槍を使った棒術で迎撃されてしまう。

どうすれば良いものか。フーカは槍の屍兵器から目を離さずに考え込むも、その瞬間を待っていたと言わんばかりに間合いを詰められ、槍の穂先——ではなく刃のない先端部で鳩尾を突かれる。

「かは……!？」

息が詰まり、その場で膝をつくフーカ。人間である以上、鳩尾への攻撃が効くのは当然である。

これを隙だと判断した槍の屍兵器は、もう遊びはおしまいだと言いたげに槍の穂先をフーカの額に向け、そのまま突き出してきた。

しかし命の危険が迫っているというこの状況で、フーカは酷く冷静だった。怯えることなく迫り来る槍の穂先を凝視し、ギリギリのところでかわしてのけた。

「何っ!？」

ここで初めて言葉を、凜とした声で発した槍の屍兵器だが、そこに喜びはなかった。

突き出した槍はフーカの額を貫くつもりだったらしく、止めることも叶わず地面に突き刺さってしまった。

反撃を避けるべく急いで腕の一部だった槍を、巨大な盾に変形させてその裏側に隠れる槍の屍兵器。

「何じゃこれは——!」

いきなり出現した盾に驚くも、拳の連打を放つフーカ。そこに迷いはなく、真っ直ぐなその瞳も盾の裏に隠れた敵を捉えていた。

少しして拳の連打では破壊できないと判断し、フーカは敵が隠れているであろう盾の裏に回り込む。

「んっ? あいつはどこに行ったんじゃ?」

しかし、そこには誰もいなかった。痕跡すら残されていない。

ここから逃げたのかと思うフーカだったが、ここにはサツキがいる。自分が見逃しても、彼女は決して見逃さないだろう。

なので逃げたわけではないと確信し、周囲を警戒しながら彷徨っていると、

「うわわ!」

上からいきなり魔力弾の雨が、フーカに向かって降り注いできた。さすがに全部食らうと洒落にならないため、かわしてもなお追ってくる恐怖の雨から逃げ惑うフーカ。

逃げながらも雨の元を辿ると、屋上に左腕をチェーンガンのような形状にした、槍の屍兵器が張り付いているのが確認できた。いつの間にあんなところへ移動したのだろうか。

「どうやってあいつを下ろせばええんじゃ……!」

攻撃しようにも、今まで殴る蹴るだけで戦ってきたフーカには遠距離の敵に攻撃する方法がない。自分の能力だけではどうしようもないだろう。

弾幕の雨が止むまで逃げ続けようかと思うフーカだったが、以前サツキに言われたことが脳裏をよぎった。

『——常に考えろ』

「！ そうじゃ、あれがあったの！」

たった一言。そのたった一言が、フーカに活路を見出させた。

フーカはその場で足を止めると、さっきまで槍の屍兵器が身を隠していた巨大な盾の裏側に入り込み、弾幕の雨を凌ぎ始める。

盾の強度は作った自分自身が一番よく知っている。そう言わんばかりに弾幕の発射を中断すると、槍の屍兵器は左腕を元に戻して右腕を回転刃に変形させ、フーカがいるであろう盾の裏に回る。

「……いない？」

ここに来て覚えたらしい、新しい言葉をボソリと呟く槍の屍兵器。

さっきの自分と同じ状況だったので、もしかしたらと思いい屋上へ視線を向けるも、そこにフーカの姿はない。

なら一体どこへ。右腕の回転刃を構えながら考えていると、背後から一人分の足音が聞こえてきた。

「っ！ そこか——！」

さらつと新しい言葉を喋りつつ、後ろへ振り向きながら回転刃を振るう。

「甘いのおっ！」

足音の主は予想通り、今まさに自分が殺すつもりでいた少女——フーカだった。

だが、そのフーカには自分の予想とは違うところがあった。それは

「いつ……！」

——回転刃が届かない位置から、他の屍兵器からくすねたであろう、折れた剣の破片を顔面に投げつけてきたことだ。

完全に不意をつかれたこともあり、投げられた破片を食らって怯んでしまう槍の屍兵器。

フーカはその一瞬を見逃さず、身長差を補うべく跳び上がって、今度こそ魔力を纏った右の拳を、

「歯あ、食いしばれっ！」

「ぐが——!?!」

屍兵器の顔面に叩き込んだ。

完全に拳が入ったこともあり、視界がぐらついて二、三步下がったところで、尻餅をつく槍の屍兵器。

まさか自分が子供相手に後れを取るとは。そう思っているかのように、呆然とした顔でフーカを見上げる。そこから戦意というものは感じられず、フーカの勝利を意味していた。

しかしそれに気づいていないのか、反撃に備えて構えるフーカだったが、

「——お前にしちややるじゃねえか、クソガキ」

「お、緒方さん？」

戦いを見守っていたであろうサツキに頭を叩かれたことで、フーカなりに安堵したのか自然に構えを解いた。

□

「お前にしちややるじゃねえか、クソガキ」

大金星を上げたレヴェントンの頭を叩き、自分が勝ったことに気づいていないクソガキの構えを解かせる。

いやー、生きてればそれで良かったから槍で額を貫かれそうになつたところで介入しようかと思つてたけど、まさか勝つてしまうとは思わなかった。

弾幕の雨をやり過ごすために屍兵器が作った盾の裏に隠れ、相手が射撃を中断して近づいてきたところで盾の表に回り、その間にアタシ

が最初に肘で押し折った剣の破片を回収し、それを上手く使うとはな。

……さて、後はコイツの後始末だけか。しぶとく生き残りやがって。楽に逝かねえと全身粉々にしてやんぞコノヤロー。

「先に行つてろ、レヴェントン」

「えっ？　じゃけん——」

「いいから行け」

「は、はいっ」

レヴェントンを強引に奥へ進ませ、だらしなく座り込んでいる屍兵器と正面から向き合う。

屍兵器の方は完全に戦意を喪失しているようで、アタシを見てもやる気を湧かせることはなかった。

「……私をどうする気だ？」

「おおう、すげえ人間っぽく喋るんだなお前」

コイツ、アタシが倒した最後の屍兵器よりも上手く喋ったぞ。しかも武士のような凜とした声で。

さっきのアタシから言葉を覚え出した奴といい、コイツといい、屍兵器にも個体差はあるんだな。

まあ、それは置いといてだ。お前をどうするかなんて、最初から決まっている。

「死んでもらうに決まってるんだろ？」

それ以外に何かあるというのか。これがマジもんの人間ならさすがに殺しはしないが、コイツらは戦いのために生み出された屍兵器。敵である以上、生かす理由はない。

「そうか。ならさっさと殺せ」

「潔いな、お前」

確かに殺すつもりではいたが、もう少し抵抗されるものだと思っていた。まさかこうもあっさり死を受け入れようとするとはな。

何故簡単に受け入れようとするのか、と聞こうとしたところで、コイツ自身がそれを教えてくれた。

「私は兵器として生み出された。兵器である以上、どの道どこかで壊

れる運命だ。戦う以外に生きる道もない、ならここで死んだ方がよほど良い」

コイツらと似たような存在の戦闘機人が戦う以外の道で今を生きているのだが、コイツにそれを言うのはやめた方が良さそうだ。

「……最後に言うことは？」

アニメや漫画でよくある、主人公が敵キャラにとどめを刺すときに言うお決まりの台詞。一度行ってみたいと思っただけだが、それがこんな形で訪れるとはな。

「言ったはずだ。殺せと」

遺言すらそれか。兵器としての性質上か、あるいは諦めか。コイツは一刻も早く死にたいらしい。

お望みどおりにしてやるべく右足を振り上げ、コイツの脳天目掛けて振り下ろそうとしたときだった。

「——は？」

槍の屍兵器が、胸元を爆発させたのは。

爆発は恐ろしいほど小規模だったのでアタシにダメージはなかったが、爆発の中心部が人間で言う心臓に位置していたせいか、槍の屍兵器は何が起こったのかわからないと言った表情のまま、息を引き取った。

アタシはまだ足を振り下ろしていない。しかも爆発したのは胸部だ。自爆装置でも仕込まれていたのか？

振り上げていた足を下ろし、死体となった屍兵器の胸元に手を突っ込み、お目当ての物を見つけてそのまま引き摺り出す。

「……………嘘だろ？」

アタシが手に握っていたのは——耐魔力繊維だった。しかも真っ黒だ。

ロボットから出てきたものが、今度は屍兵器から出てきた。……なるほど、確かにこれは違法物だな。管理局の見解は正しかったわけだ。



「ふう〜……」

とりあえず落ち着くためにタバコを取り出し、周囲を警戒しながら一服する。

他にも何かないかデスクを弄るも、何もなかったので増援が来る前にレヴェントンの後を追うように奥へと進んでいく。

「……緒方さん」

「あん？」

少し進んだところで、先に進ませていたレヴェントンと合流した。なんでこんなところにいるんだこのガキ。もつと奥に進んでも良かったのに。

吸っていたタバコを足下に投げ捨て、それを踏みつけていると、何かを言いたそうにするレヴェントンが意を決して口を開いた。

「……殺したんですか？」

やっぱりか。だからこんなところで待っていたんだな。別にお前が気にすることじゃねえだろうに。

さすがにここまで来て敵の生死を気にするレヴェントンに呆れ返るも、コイツがまだクソガキだからと勝手に納得することにした。

あえてレヴェントンの質問には答えず、最後ズボンのポケットに入っていた最後の資料を取り出し、目を通していく。そして、その文字を見て驚愕してしまう。

「――『耐魔力繊維の特性』……？」

そこにはアタシが衣服の材料として使い、さっきの屍兵器を死に追いやった、耐魔力繊維に関する情報が書かれていた。

## 第16話 「オリジナルと——」

「——『耐魔力繊維の特性』……?」

さつきまでプロジェクトF、マリアージュ、ヴァリアントシステム&アームズ、フォーミュラと、危険性溢れる様々な単語と情報に目を通してきた。だからもう何が来ても驚かない自信があった。

だが、この資料だけは訳が違う。隣でレヴェントンが不安そうな顔でアタシを見上げているが、それがどうでもよくなるほどヤバいことが書かれている。

「一枚の布に自分の魔力を染み込ませ、コアに当たる部分に貼り付けることで、対象に悟られることなく、対象を遠隔操作することができ。なお、魔力繊維だけでは生物を操作することはできない……」

この内容が正しければ、街でアタシを襲ってきたロボットも、さつきやり合った屍兵器も、全て耐魔力繊維によって操作されていたことになる。黒幕一人の手によって。

まあ幸いと言うべきか、魔力繊維だけじゃ生物——人間を操作することはできないらしい。つまりアタシは大丈夫ということだ。……他の技術と組み合わせたら可能ということになるが。

これだけであってほしいと思ってしまうも、そうは問屋が卸してくれない。魔力繊維のヤバイ特性はまだまだ書かれていた。

「対象に貼り付けられた繊維には爆破機能が備わり、使用者の任意で起動させることができる……」

これか。さつきの屍兵器を死に追いやったのは。まさかとは思ってたが、まんま自爆装置だったわけだ。

長年自分で使っていたにも関わらず、今初めて知った耐魔力繊維の危険性。おそらく管理局の連中でさえ知らねえ情報だ。でなきや今もなお裏で売られているわけがない。

「緒方さんっ!」

「ああ?」

資料を読みながら次の部屋に入った瞬間、訓練室のような部屋の中央にさつき全滅させたはずの屍兵器が一体だけ、それもジャケットのような服を着て立っていた。

さつきの奴らを量産型と仮定するなら……コイツは固有型か。それも指揮官ポジ、もしくは奴らのオリジナル的な存在だろう。

読み終わった資料をポケットに入れ、女性の姿をした固有型と睨み合う。戦闘機人といい、コイツらといい、どうしてこの手の存在は女性型しかないんだ？ 男じゃ効率が悪いのか？

「私を倒してきたようですね。それもたくさん」

予想してはいたが、やはり喋るか。しかも今度は物腰柔らかかときた。表情も人間のそれと大差ないし、変なバイザーがなければマジで人間にしか見えねえぞ。

「まあな。んで、お前で本当に最後か？」

「個体数という意味ではそうなりますね」

今の言い方からして、コイツが連中のオリジナルで間違いないな。黒幕は造り上げたコイツをベースに、さつきの量産型——クローンを量産したってことか。プロジェクトFの技術を利用して。

だけど短時間である数を量産した辺り、ただ利用したってわけじゃなさそうだな。明らかにプロジェクトFにはない技術を使っている。それが何なのかはわからんが……。

「先に言っておきますが、私は貴女達の邪魔しか致しませんので、お気を付けてください」

「はア……」

こっから先に行きたけりや自分と戦え。そう言いたいらしい。

「下がってろ」

「お、押忍」

とりあえず足手まといのレヴェントンを後ろに下がらせ、オリジナルと対峙する。

……雰囲気が違うな。何というか、さつきの奴らとは明らかに違う。こういう時こそ一筋縄でいってくれれば良いんだが……。

アタシの格好でも真似ているのか、構えもせずにこちらを睨みつけ

るオリジナル。やり易くなるよう、先手はアタシがもらってやろうか  
と思つた瞬間、

「ほおおっー!」

「おっー!」

いきなり全身がブレるほどのスピードで、アタシの背後に回ると奇  
声を上げつつ、大鎌に変形させた右腕で首元を狙ってきた。

上半身を捻るように横へ反らすことでこれを回避し、そのままの勢  
いと体勢で顔面を左で蹴ろうとするも、さつき戦つた個体と同じよう  
に、こちらの左脚を空いている左手で受け止めた。

このままじやまたきりもみ回転させられちまう。そうなる前に右  
足でがら空きの右頬を蹴りつけ、オリジナルがそれを屈んで回避する  
ところを狙つて一旦距離を取る。

距離を取つたところで一気にその距離をゼロにし、振り被つた左の  
拳を放つも、オリジナルは首を少しズラしてあっさりとかわし、右腕  
を鎌から……電気を纏う銃のようなものに変形させる。

一体何なのか思わず首を傾げていたが、銃口であろう場所にエネル  
ギーが集中し始め、

「発射」

「チイツ!?!」

魔力の混じつたプラズマキャノンが撃ち出された。

ここに来て未知の攻撃だったので、驚いて冷や汗を掻くも顔面擦れ  
擦れでかわすことに成功。エネルギー弾は下がっていたレヴェント  
ンの隣に被弾した。……今の危ねえな。

「えっ? ……うええ!?!」

自分に流れ弾がきた。それを少し遅れて認識し、ビビりまくるレ  
ヴェントン。安心しろ、それが普通の反応だ。人間的な意味で。

「ふむ、やはりエネルギーが溜まるまでに時間を要しますね。ならこ  
れは無しでいきましょう」

そう言うのと右腕を元に戻し、今度は左腕を……ドラゴンの頭?

みたいな機械に変形させた。トラップに使われる設置型バサミの  
類だろうか?

続いて戻した右腕をボウガンに変形させ、アタシの眉間目掛けて撃ってきた。多分コイツらのモチーフになったであろう「マリアー ジュ」ですら、これほど多くの武器は搭載していないだろう。

幸いにも言うほどの速度ではなかったので、撃たれた矢を難なく右手でキャッチし、身体を横に——竜巻の如く回転させ、その勢いを利用して掴んだ矢を投げ返——

「ご飯ですよ」

『パウパウッ!!』

——した直後、本来ならオリジナルの胸部に刺さっていたはずであろう矢が、ドラゴンの頭となった右腕に、それはもう美味しそうにむしやむしやバリボリと食われていた。

……えっ？ アレ生きてるの？ ただの鉄じゃなかったの？

アタシが呆然としている間にも、右腕のドラゴンは矢を食べ終えると、その口を大きく開いて火球を連続で撃ってきた。

熱さには耐えられる自信があったので、放たれる火球を素手で弾いていき、噛まれないよう棒立ちとなっているオリジナルの、バイザーで隠れている両目に前蹴りを叩き込んだ。

「痛——っ!?!」

『ガウアアアッ!!』

ドラゴンの制御で他の動作に移れなかったのか、オリジナルは前蹴りをモロに食らい、バイザーが粉々になつて綺麗な顔が露わになつても痛がり、左腕を元に戻しただけで動じる気配がない。

それどころか右腕のドラゴンが、主であるオリジナルがやられたせいか怒り狂い、今度は間髪入れずに魔力砲を放ってきた。いやいや待って待って、この距離で砲撃は——!

「こなクソッ!」

咄嗟に砲撃を左手で食い止め、右の掌底で弾き返す。螺旋の回転というオマケ付きで。

貫通力が強化された砲撃はドラゴンの口の中に直撃し、そのままオ

リジナルの右腕を雷光の如く貫いた。

「……右腕がなくなりましたか。ですが——」

砲撃によって右腕が丸ごと消滅するも、オリジナルは何のこれしきと言わんばかりに、

「——ほら、この通り。腕だけなら再生できます」

魔力で右腕を再生させた。奴の言っていることが正しいとすれば、腕以外なら破壊できるということになる。これは良いことを聞いたぞ。

オリジナルが再生させた腕の調子を確かめている今を狙い、豪快な右のラリアットを首元にブチかまし、コイツの身体を壁まで吹っ飛ばす。

その見た目よりも強靱にできているっぽい身体は止まることなく、勢いが衰えることなく壁に激突し、全身が壁にめり込んだ。これなら多少は……。

「……おや、これは一本取られましたね」

自分が吹っ飛ばされたことに今気づいたらしく、壁にめり込んだ左腕を力づくで引っこ抜くオリジナル。さっきは痛がっていたのに、今のは痛くないのか？ コイツの痛覚どうなってるんだよ。

オリジナルは体勢を整えると、アタシを観察しているのか全身を舐め回すようにジツと見つめる。嫌な視線だな。まるで内に秘めたもんを見透かされるような気分だ。

「データ取得。反映した後、実行に移します」

アタシから何らかのデータが取れたらしく、オリジナルは再生させた右腕を何かの砲口に、左腕を鞭に変形させた。そして——

「ほおあちゃー！」

「ぐっ!?!」

——アタシの身体が左の鞭で拘束され、右の砲口から撃たれた見えない何かを連続で撃ち込まれた。

「いって……」

撃たれた鼻っ面に痛みだけが残る。魔力でもなければ、プラズマエネルギーでもない。しかも目には見えないと来た。

「ちよ、おま……！」

撃たれるわ撃たれるわ。そのせいで思ったよりも硬い鞭から逃げられず、逆に見えない弾丸を避けることもできず。ひたすら撃たれ続けた。

鼻っ面のとときと同じように、撃たれ続けた全身には痛みだけが残る。外傷は全然ないし、エネルギーも全く……待てよ。

「……見えるかも」

そうか、普通の人間には見えないんだ。アタシは見てなかっただけかもしれない。そう思い、今度は最初から砲口を凝視する。

これで撃つのをやめたら徒労になっていたが、オリジナルのお気に入りなのか普通に撃ってきた。さっきとは違ってギリギリ見える砲弾を。

なるほど——空気弾か。

「ふはっ」

正体がわかれば何てことはない。すぐさま顔を右に反らして回避し、アタシの身体を拘束している鞭を力づくで引きちぎる。

目の良いアタシだからこそ見ることができるとは、それ以外の人間の目に空気は見えない。アタシも咄嗟に目に頼ったせいで避けられなかった。咄嗟ではなく、最初から見っておけば良かったのだ。

ここまでしてくれたんだ。お返しはしてやんねえよな。目には目を、空気には空気を……と言いたいところだが、アタシに空気を利用した攻撃ができるかは怪しい。なので——

「□□□□□□□□——ッ!!」

——雄叫びで返すことにした。以前テストタロツサにも使った、大音量の雄叫びを。

「——っ!?!」

「うう……!?!」

何の耐性も持たないレヴェントンはもちろん、オリジナルも耳を塞いで苦しそうな顔になっている。

雄叫びは振動波となってオリジナルを襲い、そのまま耳を塞いだ状態の奴を、さっきのラリアット以上の威力で壁まで吹っ飛ばした。

「かは——！」

息を詰まらせ、その場で膝をつくオリジナル。気のせいかな？ 強いはずなのに、さっきの量産型ほどの脅威が感じられねえ。

悔しそうに地面を殴るオリジナルだったが、まだ諦めてはいなかったように、静かに立ち上がると左腕を鞭からマジックハンドに、右腕をドリルに変形させた。

……マジックハンド？

「やってくれましたね。緒方サツキ！」

「おわっ!？」

いきなり教えてもない人の名前を呼んだかと思えば、左腕のマジックハンドを射出するように伸ばし、バックステップで距離を取ろうとしたアタシの左脚を掴んできた。

そのままおもちゃのように振り回され、地面、壁、天井など、様々な場所に顔面からぶつけられ、伸びていた腕が縮み、右のドリルが届く範囲に到達。首を上手く掴まれ、動きを封じられてしまう。

「こん、ちくしょ……！」

力づくで引き剥がそうとするも、よほど上手く掴んだようで全然剥がれない。ならばと握力で握り潰そうとするも、相当硬くヒビすら入らない。

ドリルという死への片道切符が、唸りを上げて迫ってくる。その先端は鼻っ面に向けられており、顔面に大きな穴を開けるつもりであることがわかる。

何とかしねえと顔面に風穴を開けられてあの世一直線だ。こうなったら……！

「ぐっ……オラア……！」



マジックハンドではなく、迫り来るドリルを両手で受け止める。こつちの方がまだ防げる。

ドリルの回転による摩擦がアタシの両手を襲い、手のひらを焦がす。が、そんなことにはお構いなく、アタシは両手に力を入れてドリルを破壊する。

次にマジックハンドの力が緩んだ一瞬をつき、オリジナルの左腕を握力でぐしゃぐしゃにした。どうせ再生するんだから大丈夫だろう。

「ケホツ……」

ようやく首絞めから解放されたこともあり、空気がいつも以上に美味しく感じる。そもそも空気に味があるかはわからんが。

「ふう〜、やってくれたなア」

「っ!? バカな——」

ここに来て、ようやく動揺を隠せないオリジナル。かく言うアタシも怒りを隠しきれていない。

すかさずオリジナルの顔面にエルボーを叩き込み、一旦腕を引いて今度は顔面を拳で殴りつける。これにより顔をしかめ、よろめくオリジナル。アタシはその一瞬を見逃さない。

「待てこの……!」

胸倉を掴んで引き寄せ、頭突きを何発もお見舞いする。それこそ、オリジナルの額からドバドバと血が出るくらいには。

オリジナルは受けたダメージが大きかったこともあってか、全体的な動きが鈍くなった。

これならイケる。そう思つて左の拳を握り締め、それを本気でオリジナルの顔面にブチ込み、身体を吹っ飛ばすのではなく、確実にダメージを与えるべく思いつき真下に叩きつけた。

「ぐ、は……っ」

「ハア、ハア……」

黒幕の姿も拝めていないのに、珍しく息が上がる。それだけコイツに手こずったというわけか。

アタシは上がった息を整え、オリジナルは血を吐くだけで動く気配がない。とりあえず、二度と動かないようにとどめは刺すか——

「——いやはや、良い喜劇を見させてもらつたよ」

どこからともなく、いや背後から聞こえてくる声と拍手。完全にアタシとオリジナルとの戦闘を見たうえで、それをバカにしているかのような拍手だな。

驚くことなく後ろを向いてみると、オリジナルのジャケットと同じデザインの防護服を着た中年の渋い男が、右手に拳銃のような武器を持ちながら立っていた。

証拠はないが、男が纏う不気味な雰囲気のおかげですぐにわかった。コイツが黒幕で、ロボットや屍兵器の製作者だと。

「……テメエがバネットか」

「ああ。俺がバネット・フライヤーだ」

わざわざ名乗らなくても良いのに、堂々とフルネームを名乗るフライヤー。ついに登場した黒幕だ。ここで一気に仕留める——

「まあそうカツカするな。逸る気持ちはわかるけどよ」

「嘘つけコノヤロー」

——つもりで右腕を振り上げたところで、またしても口を挟んできた。

こんな状況なのに、フライヤーはアタシを落ち着かせようとしている。ただでさえムカつくのに、両手でそれっぽいジェスチャーまでしているのがさらにムカつくんだが……。

というかコイツの持っている武器って……例の資料にあつたヴァリアントアームズか？ そこいらのデバイスとは明らかに違うぞ。

アタシがその武器に視線を向けていると、こちらが何も言っていないのにフライヤーがご丁寧に教えてくれた。

「こいつが気になるか？」

「まあな」

「ふむ……まあ良いだろう。こいつはヴァリアントアームズだ。とはいっても試作品だがな」

試作品。つまりまだ完成はしていないということになる。……ア

タシを実験台にする気がコイツ。ナメられたもんだな。

となると……フライヤーが着ている防護服もそれ関係か？ バリアジャケットや騎士服とは違う感じがするし。

「じゃあフォーミュラってのもあるのか？」

「アレなあ……魔法を使わねえお前さんが相手じゃなけりや活用できるんだがなあ……。まあ、アレもまだ試作段階だから上手く使えるかはわからんが」

アタシを恨めしそうに睨み付け、困ったような顔をするフライヤー。

どうもコイツの発言を聞く限り、フォーミュラには魔法を無効化する要素が入っていきそうだな。そもそも詳しい性能は資料を読んだきりで、それ以上はわからねえが。

やっぱりここで仕留めた方が良い。そう告げているアタシの勘を頼りに、拳圧を飛ばそうと左拳を引く。

「——っ！」

「甘いぜ嬢ちゃん」

が、それを突き出すよりも先に、フライヤーの持つ例のヴァリアントアームズから射出されたであろう黒い魔力弾が、アタシの脇腹を掠めた。

……大丈夫、なんてことない。痛みはないし服に傷も入っていない。気を取り直して、下ろしてしまった左腕をもう一度——

「は……!？」

——振り上げた瞬間、アタシの着ているパーカーが黒く染まり始めた。

□

「な、んだこれ……!」

「え……?」

本人がお手製だと言っていたパーカーが漆黒に染まっていき、まるで全身を侵食されているかのように苦しみ出すサツキ。

フーカは一体何が起こっているのかわからず、実力的に彼女の足手まどいになり兼ねないので、ただその場で彼女を見つめていた。

「ハハハッ! 俺が残してやった資料を読まなかったのか!? そいつは使い方次第で生物にも機能するって書いてあっただろうが!」

まんまとハマってくれた。そう思っているのか、銃を構えながらも腹を抱えて笑う黒幕——バネット・フライヤー。

資料——耐魔力繊維の詳細が書かれた、サツキが最後に目を通した資料のことだろう。

「お前、緒方さんに何をしよったんじゃ……!」

それでもフーカは、わかっていてもこう言わずにはいられなかった。

その様子を見て満足したのか、バネットは愉快そうに口を歪める。

「何って言われてもなあ——嬢ちゃんを遠隔操作できるようにした、としか言えねえな」

そう言つてバネットが突如展開した大きな画面に、魔力で黒く輝く丸い物体が映し出された。おそらくサツキを苦しめ、屍兵器達を遠隔操作していたコアだろう。

「尤も、ガラクタや屍の方には必要ないがな。こいつが必要なのは、兵器ではなく生物をコントロールする時だけだ」

あの資料に書いてあることは本当だったのか。信じたくはなかったが、現にあのサツキが苦しんでいる。少なくとも嘘ではない。

それでも原因が判明した以上、話は早い。画面に映し出されたコアの在り処を聞き出し、どうにかしてコアを破壊すればいいだけだ。

ただどうやって? 自分にできるのは魔力を拳に纏って、相手をぶん殴ることだけだ。それにバネットがそう簡単に口を割ってくれるか——

「考えている暇はなさそうだぜ？」

フーカの思考を遮るように、胸元を隠すように苦しむサツキを指差すバネット。

だが自分の気のせいか、サツキは先ほどから何か呟いているように見えるが……。

「デメエに………される……ぐらいなら……！」

「ん？」

両手をそのまま顔を上げ、バネットを嘲笑うかのようにニヤリとするサツキ。この反応は予想外だったのか、思わず眉を顰めるバネット。

するとサツキの足下に赤紫色の正三角形を基調とし、内側に紋様が刻まれた巨大な陣——古代ベルカ式の魔法陣が展開され——

「■■■■■■——ツ!!」

——正方形だった瞳孔が、猫のような垂直のスリット型へと変化し、綺麗な赤紫色になった。

## 第17話 「バーガンデイの獣」

——全身に掛けられた、無数の枷。

これがアタシの、自分の強さに対するイメージだ。ふとした瞬間に、たまに頭の中に浮かんでくる。

全身をびっしりと埋め尽くすほどの枷が、まるで噴き出そうとする何かを抑え付けているかのようにも見える。見かけは動きづらそうに思えるが、感覚的にはそうでもない。そんな状態だ。

そして何らかのラインを越えた瞬間、枷は一つ外れる。そう、たった一つだ。数え切れないほどあるのに、たった一つしか外れない。

初めてこのイメージが頭に浮かんだとき、アタシは確信したよ。これが今の自分の状態なんだって。まだまだ成長できることを示唆しているってな。

もしもこれが強くなりたいたい奴、目的のために力を欲する奴、高みを目指す奴。そういう連中なら喜ぶかもしれない。

だが、アタシは決して喜ばなかった。何故なら欲しいものではないからだ。むしろこの状態を恐れたよ。誰よりも、何よりも。

別に力が欲しくないとか、そういうわけじゃねえ。必要以上の力はいらなくていいだけだ。存在するだけで不愉快な、あの魔法も含めて。だって考えてみるよ——

——全ての枷が外れたら、どうなるかを。

「ガアアアアアッ!!」

全身に赤紫色のオーラ状の魔力を纏い、それを激しく迸らせるサツキ。その目からは理性というものが失われており、野生に生きる獣の目と同じものになっているようにも見える。

何らかのリミッターでも外れているのか、そのエネルギーは彼女の本来の魔力量を遥かに超えており、周囲を唸るように揺らしていく。「おいおい、ここを魔力の放出だけで壊す気かよ？　——起きろアルファ」

「はい、マスター」

口だけ聞くと余裕に思えるが、実は予想外の出来事なうえに、予想を超えるサツキの力量に驚愕し、内心冷や汗を掻いているバネット。そんな彼の呼び掛けに応え、よろめきながらも立ち上がるオリジナルの屍兵器——アルファ。彼女の目は、興味深そうに魔力を高めるサツキの姿を捉えている。

「ど、どうなつとるんじゃ……」

そしてそれは、フーカも同じだった。目を守るように両腕で顔を隠しながらも、その瞳はサツキを見つめていた。天にも届きそうなほどの、巨大なオーラ状の魔力を纏うサツキの姿を。

サツキは三人から向けられる視線などお構いなく、力を溜めるような体勢で宙に浮き、足下に再度ベルカ式の魔法陣を展開すると、

「グオオオオオオツ!!」

全身から魔力の衝撃波を放った。自分達がいる部屋を、この部屋がある工場を破壊するほどの、凄まじい威力を持つ衝撃波を。

「やっぱり壊しに掛かるのかよー!」

「早くここを出しましょう、マスター」

やりやがったなコイツ。そんな思いが込められていそうな目で、サツキを睨みつけるバネット。アルファは彼を大きな袋に変形させた右腕で覆うと、両脚に力を入れて跳び上がり、屋上を突き破っていった。

「……………へっ?」

バネットとアルファが脱出した今、崩壊しつつあるこの部屋に残されたのはフーカとサツキだけ。しかもサツキは我を失っている。

フーカもフーカで脱出しようと、サツキと共に来た道に戻ろうとするも――

「ウオオオオオツ!!」

――暴走する獣となったサツキが『まずはお前だ』と言わんばかりに、襲い掛かってきた。

咄嗟に身を屈め、彼女が繰り出した死の一撃を奇跡的に回避するフーカ。今のは偶然だ。おそらく次は避けられないだろう。

フーカがかわしたことでサツキの拳は標的を失い、そのまま壁に突き刺さり、この部屋の向こうにある、別の部屋の壁まで粉碎する。

その隙にフーカは部屋から出ることができたものの、五感が通常よりも研ぎ澄まされたサツキは彼女を見逃さなかった。

サツキは自分の顔の前に魔法陣を展開。その中心に全身の魔力が集中されていき――

――赤紫に輝く、一筋の光が放たれた。

□

「訓練室にて、巨大なエネルギー源を感知。熱線でしょうか？」

「いや、おそらく魔力砲だろう。魔力の直接射出・放出が難しいとされるベルカ式で、よく撃てるな」

工場の外にて。街全体に巨大な結界を張ったバネットは、アルファと共に工場を貫き、結界をも傷付ける赤紫の光を興味深そうに見つめ、自分なりに解析していた。



閃光の如き魔力砲によって工場が爆発炎上し、物を運んでいたトラックやその場にいた部下が巻き添えになろうと、気に留めようとはしないバネット。

燃え盛る火炎の中から、どうにか閃光の直撃を免れた少女——フーカと、閃光を放った張本人である、サツキが姿を現す。サツキの方はもうフーカなど眼中にないらしいが、フーカは自分の身を護るのが精一杯なようで、近くにあった瓦礫に身を隠した。

「マスター」

「ん？ どうしたアルファ」

そういえば、と言いたそうにバネットの方を向き、アルファは無の表情を変えることなく疑問を口にする。

「緒方サツキは遠隔操作できるのですか？」

「無理だな」

「何故です？」

「アルファ。屍兵器の遠隔操作に、耐魔力繊維を使っていたのは知ってるな？」

「もちろんです。マスターが嫌というほど言っていたではありませんか」

なら話は早い。そう言うとバネットは、残っていた部下に結界の修復をするよう指示を出し、ポケットから一枚の布を取り出す。

「この耐魔力繊維——正確にはこの布一枚で操れるのは、機械や兵器に限られる。だから生物を操るには、これ一枚じゃ足りねえことがわかった」

「……なるほど。課題は繊維の量ですか」

「半分正解だ。もう半分は魔力の増幅と維持だ」

耐魔力繊維による遠隔操作。それは機械や兵器であれば布一枚分で事足りる。だが、操作の対象が生物だとその限りではない。バネットは独自で研究を進めていくうちに、生物の遠隔操作は布一枚分では全く足りず、衣類一着分もの繊維と、同量の魔力が必要だということ突き止めたのだ。

これだけなら簡単に思えるが、実行するとなれば話は別である。衣

類一着分の魔力を得るには何らかの手段で増幅させる他なく、しかもその量を維持しなければならなかった。

「幸いにも、いや偶然にも、あの嬢ちゃんはその条件を満たしてやがった。だからさつき撃った弾丸で俺の魔力を染み込ませ、俺が開発したコアで魔力を増幅・維持することでコントロールに成功した……はずだった」

「ガアアアアア!!」

バネットの視線の先には、ただひたすら天に向かって雄叫びを上げ、魔力を赤紫色に輝く炎のようなオーラ状に纏い、周囲にある瓦礫やトラックを吹き飛ばしていくサツキの姿があった。

そんな彼女の足下には古代ベルカ式の魔法陣が展開され、専用デバイスであろう首のチョーカーが点滅を繰り返している。全身から血のように噴き出す魔力を、必死に抑えているかのように。

「あの嬢ちゃん……自分が操り人形になる寸前で、強引に理性を、それも本能で吹っ飛ばしやがった。多分本人も自分が何をしたかわかってねえよ」

「では彼女を放っておくのですか？」

「はっ、冗談も大概にしろ。……調子はどうだ？」

サツキとの戦いで一度喪失し、アルファ自身が再生させた右腕に視線を向けるバネット。

アルファは彼の意図に気付き、見せつけるように右腕を動かしながら答えた。

「問題ありませんよ。今のところは」

「なら良い。何せお前の腕に、魔法生物の遺伝子を武装としてインプットしたんだ。上手く制御できるかが問題だったが……」

それは杞憂だったか。バネットは淡々と、それでいてどこか嬉しそうな声を出す。まるで我が子が重要な物事を成功させたかのような、そんな声を。

一方で雄叫びをやめたサツキは、探し回るような動作は見せずに、

迷うことなくバネットとアルファの姿を捉える。人のレベルを超えた五感を持つ、彼女だからできる反応だ。

「——先にいけ、アルファ。俺も後で加勢する」  
「待ってました」

その言葉が聞きたかった。アルファはそう言いたそうに両の拳を握り込むと、サツキに向かって突進していく。武器を持っていないせいか、その姿は無防備にも見える。

が、それは彼女が何者かを知らない者から見た視線だ。彼女を誰よりも知るバネットから見れば、非常に頼もしい姿に見えるのだ。

地面に降り立ったサツキの前に立ち、拳を構えるアルファ。サツキの猫のような瞳は赤紫色に光り輝いており、髪もそれと同色に点滅している——ように見える。

サツキはアルファに目を据えると低く唸り声を上げ、何の合間もなく地面を蹴ってアルファに肉薄し、右の拳を繰り出した。

「っ!? いきなり過ぎませんかねえ……!」

「ウオオオオオ!!」

咄嗟に両腕を交差させ、ガードで拳を防ごうとしたアルファだったが、予想を遥かに超えるパワーに押され、身体が宙を舞ってしまふ。すぐさま体勢を整え、危なげなく着地するアルファ。だが、サツキはその一瞬すら見逃さない。

再び地面を蹴ると、今度はアルファの背後に回り、魔力を含んだ拳圧を飛ばしてきた。

「これは——!」

自分の量産型が食らった、矢のような拳圧。しかし量産型に放ったものとは比較にならないほど威力が凄まじく、範囲が狭いにも関わらず周囲の物を破壊しながら、まるで生き物のようにアルファを襲う。今度はガードすら叶わず、アルファの身体が音速に匹敵する速度で工場の壁に叩きつけられ、息が詰まったうえに口から血を吐いてしまふ。

アルファは口元を拭きながら立ち上がると、右腕を砲口に変え、そ

こから黒い魔力砲を撃ち出す。

「グオオオオオ!!」

砲撃は何かの妨害を受けることもなく、サツキの鳩尾に直撃した——にも拘わらず、サツキは平然とした顔で突っ込んでくる。デタラメとはまさに今のサツキのことを言うのだろう。

アルファも負けじとサツキが放った左の拳を顔面に食らいながらも、そのまま前進して左の拳を、サツキの鼻っ面に叩き込む。

「ヌウウウウ……!」

が、サツキはやはり平然と耐えてみせ、前蹴りをアルファの腹部に入れると、身体をくの字に曲げる彼女の頭を右手で掴む。

そして近くにあった、まだ被害の出ていない別の工場に突進し、アルファの顔を壁に押し付け、獣のような声を上げながら駆け出し始める。

「ぐう、ああああ……!」

アルファの痩せ我慢しているであろう声と共に、壁がサツキの走る方向に削り取られていく。そうして壁が途切れたことで、サツキはアルファを放り投げ、先回りしてアルファが落ちるよりも先に彼女を蹴り上げ、両拳を合わせて振り下ろし、アルファを地面に叩きつけた。

その衝撃で地面が大きく割れ、工場地帯の地形が変化していく。その中心にいるサツキの姿が燃え盛る火炎と上手く合わさっていることもあり、大災害を引き起こす悪魔のように見える。

あまりの威力にまたも血を吐いてしまい、立ち上がろうとするも顔を歪めるアルファ。だがサツキが顔面を踏みつけてきたので、急いでその場から離れる。

「グウウ……」

サツキは全身のオーラを激しく迸らせると、フーカを狙った時のように、自分の顔の前に魔法陣を展開。纏っていたオーラ状の魔力を、その中心に集中させていき――

「ガアアアアア!!」

――赤紫に輝く、一筋の光を放った。フーカに対して撃ったように、今度はアルファを狙って。

「なっ――!?!」

データではわかっていたが、実際に発射しているところを見るとなれば話は変わってくる。

咄嗟に身を翻して回避を試みるも、直撃こそ免れたが左肩を腕ごと持っていかれてしまった。

「くっ……」

すぐさま左半身に魔力を集中させ、持っていかれた左肩と腕を再生させるアルファ。その瞳からは先ほどまでであった余裕が完全に失われており、まるで人間のように焦っている。

アルファは砲口に変形させていた右腕を元に戻し、再生させたばかりの左腕を八本の触手へと変形させた。傍から見れば悪趣味とでも言われそうな、ウネウネする触手を。

「貫け――!」

左腕の触手をサツキに向けると、軟体動物であるタコやイカの足のようにウネウネとしていた触手が、いきなり硬化して鋭い槍と化し、サツキの肉体を貫かんと直線的に襲い掛かった。

「ラアアアアア!!」

サツキは両の拳を握り込むと、襲い来る触手を凄まじい速度の連打で迎撃していく。

アルファによる槍と化した触手の連続突きと、サツキの拳による連

打。両者の目にも止まらぬ攻防が繰り広げられた。

触手と拳による激しい打ち合いの末、それを制したのはサツキだった。アルファの動きが鈍った一瞬をつき、左拳から魔力の混じった拳圧を飛ばし、彼女を吹き飛ばした。

それでも一筋縄ではいかなかったようで、小さな火傷の痕がある右頬に切り傷ができていた。

「絞めてやる……！」

アルファはすかさず八本の触手全てを伸ばし、サツキを拘束してそのまま絞め付ける。

だが、サツキは低い唸り声を上げるだけで全く意に介しておらず、逆に腕力だけで触手による拘束を解いてしまった。

彼女が動揺した隙に、一気に距離を詰めたサツキが拳の連打を懐に打ち込んでいき、最後は豪快に振り抜いた左拳でアルファを殴り飛ばした。

「悔しいですが、一人ではこれが限界のようですね……！」

「ゼアアアアア!!」

立ち上がりながらも膝を震わせ、本当に悔しそうな顔で舌打ちをするアルファを、サツキは容赦なく殺そうと、掌から魔力の衝撃波を放つ。高密度の衝撃波はまるで砲撃のようにアルファに迫る。

アルファも最後の足掻きと言わんばかりに、左腕の触手を硬化させて盾のように構えるも、両手足首に異常なほど強固なバインドを掛けられ、動きを封じられてしまう。

いよいよ万事休すとなったアルファ。だが、希望というものは悪にも訪れる。

「——お待たせしたな。嬢ちゃん」

アルファに掛けられたバインドが、まるで分析されたかのようにあっさりと破壊され、アルファ自身の姿も一瞬のうちに消えていた。

サツキが忌々しそうに上空へ視線を向けると、呆然とした顔のアルファを脇に抱える、バネットの姿があった。飛行魔法を使用している

影響か、全身が黒く輝いている。

「ま、マスター？」

「どうだ、「瞬のヒーロー」ごっこは？」

正義のヒーローみたく微笑み、地面に降り立つとアルファをやや乱暴に落とすバネット。右手に持つ銃型のヴァリアントアームズを剣の形に変形させる。

どうしてこのタイミングで、バネットが加勢してきたのか。それは簡単な理由だった。試作品であるアームズとフォーミュラの調整の間に合わせたからだ。その結果が、アルファに掛けられたバインドの解除と、彼女の救出である。

サツキと対峙したバネットは自信満々な笑みを浮かべると、

「アクセラレイターッ！」

アクセラレイター。彼は確かにそう叫んだ。

すると次の瞬間、バネットの全身が再び黒のエネルギー光に覆われ、姿が消える。

アルファも、瓦礫に隠れて動こうにも動けないフーカも、完全に彼を見失っていた。

「ヌウウウウ……！」

だが、五感の優れたサツキにはしっかりと見えていた。

バネットが消えると同時に後ろを向き、ヴァリアントウエポンである両刃剣を振り下ろす、バネットの姿を捉える。そして、振り下ろされた剣を片手で受け止めた。

「この速度でも出し抜けないか……！」

「ハアアアア!!」

空いている右手で拳を作り、それをバネットの顔面に放つサツキ。

さすがにこの距離は拙いと思ったバネットは、音速をも超えるであろう驚異的なスピードで拳をかわし、両刃剣でサツキの首元を斬りつ

け、逃げるように距離を取る。

刃で斬られたサツキだが、暴走しているせいで耐久力まで向上しているのか、彼女の身体には傷一つ付かなかった。それどころか、斬る側だった剣の刃が削がれてしまっていた。

今度は剣を大型片手銃に変形させ、低い音を立てながらエネルギーを充填させていく。

もちろん、それを待つてくれるほどサツキは甘くない。今まで以上のスピードでバネットの視界から姿を消し、彼の背後を取ってきたのだ。

充填は完了していない。バネットは時間を稼ぐべく全身を黒いオーラで覆い、再びサツキの前から姿を消す。

「ウオオオオオ!!」

やはりサツキには見えているようで、背後、右、左の順に首を動かす。そして左に動かしただころでバネットの姿を視認し、

「■■■■■■——ッ!!」

魔力を含んだ、大音量の雄叫びによる振動波を放った。

その場にいる者全てが耳を塞ぎ、苦しみで顔を歪ませていく。不協和音を聞かされたような反応ではなく、純粹な大音量を間近で聞かされたような反応を見せている。

これもアクセラレーターによる加速でどうにか回避するバネットだったが、今繰り出されたのは音による攻撃であったため、一切の防御を行わなかった耳へのダメージは避けられなかった。

「この……!」

耳から出る血を押さえるように拭き、充填が完了した大型の片手銃からビームを撃ち出す。

ビームは防御の姿勢すら取らないサツキに直撃するも、やはりダメージはほぼなく、サツキは怒り狂ったように絶叫しながら間合いを



詰めてきた。

「さあ、踊ろうか！」

バネットが素早く宙に舞うと、サツキもそれを真似るように飛び上がる。そして巨大な結界を張られた街の上空にて、赤紫と黒という、二色の光が激突し始めた。

サツキは拳を、バネットは剣を振るい、お互いのそれにぶつけ合う。その度に甲高い金属音と、強烈な打撃音が響き渡っていく。

第三者から見れば互角に見えるが、実際に押されているのはバネットだった。理由としては、元々の強さが違い過ぎるから。というのが妥当だろう。

「チイツ……いー！ 早いところ終わらせたいってのに、あの嬢ちゃんときたら……」

「ヌウウウウ……いー！」

背後から自在に空を飛ぶサツキに追いかけられながら、バネットはアクセラレイターについておさらいでもするかのように思い出していく。

アクセラレイターは、体内に循環させたナノマシンを最大稼働させることによって処理能力を飛躍的に向上させ、音速以上の速度での行動を可能にする緊急用の加速システムだ。

リスクとしては無限でないナノマシンを大幅に消耗する、身体への負担が大きい点が挙げられる。しかもバネットが使用しているのは試作品という未完成のものであるため、掛かる負担は通常の二倍となっている。

何故、彼がミッドチルダにもないこの技術を使えるのか。それはある方法で入手したヴァリアントシステムやフォーミュラのデータを元に彼なりに研究を進め、製作に成功したからである。

だが、成功したといっても彼一人の力では完成に至らず、さらなる調整が必要となってしまった。それでもここまで仕上げたのは見事としか言いようがないだろう。

何とかサツキを振り切り、一旦地面に足を付けるバネット。そして刃がボロボロになった剣を銃に変形させ、もう一度剣に変形させる。

これにより、剣は新品同様の質に戻るのだ。

「ガアアアアアアーツ!!」

一方、宙に浮いたままのサツキは苦しんでいるかのように絶叫を上げ、全身に纏っていた赤紫色に輝くオーラ状の魔力と同じ色の、巨大な炎のような魔力の中で力を溜めていた。

まさに天井知らず。普段のサツキからは想像もつかないほどの膨大な魔力が、彼女を中心にどんだん大きくなっていく。

「……しようがねえ。持つてくれよ、俺の身体」

無尽蔵と言われそうなほど力を高め、荒ぶるサツキを見たバネットは迷ってはいられないと言わんばかりに、腹を括る。そして――

「アクセラレイター・オルタ……!」

――さらなる加速行動能力を得るべく、その言葉を口にした。

□

「……………」

本能のままに暴走するサツキと、未知の加速能力を発動したバネットによる空中戦が行われる中、フーカは瓦礫の影に隠れたまま動けずにいた。

理由はむやみに出たら二人の巻き添えになるから、自分にできることを模索し続けた結果、出るタイミングを失ってしまったからだ。

なので逃げようとは微塵も考えておらず、それどころかサツキを苦しめる原因となったコアを見つけ出し、破壊することを考えていた。

「――うわあっ!?!」

とりあえず移動しよう。そう思った瞬間、サツキであろう赤紫の光

が目の前を通過した。

さすがのフーカもこれには驚き、逃げてしまった。が、その行動に間違いはなかったことに気付く。

「?、こりゃあ……緒方さんが持つとったカード?」

サツキが通過した場所の下に、先ほどサツキが構成員からくすねたカードが落ちていた。

何かの役に立つと思い、カードを手取るフーカ。そのままコアを探すべく、瓦礫の影から飛び出した。

「絶対どこかにはあるはずじゃ……」

サツキのためにコアを破壊するべく、工場地帯からは出ない程度に辺りを搜索していくフーカ。今の戦場となったこの場所で、コアを探す方法はこれくらいしかないのだ。

だがそれでも、探せど探せど見つからない。これ以上はもう無理だから、諦めた方が良いのか。そう思いかけたところで、彼女に幸運が舞い降りる。

「えっ、あれ……」

最初に彼女が身を潜めている瓦礫のすぐそばに、バネットが画面に映っていた、例の黒く輝くコアがケースに入れられたまま落ちていたのだ。横転しているトラックが近くにあることを考えると、おそらくどこかへ運ぼうとしたところを、何の意図も持たないサツキによって攻撃されたに違いない。

「何にしても、これさえめげば……」

これさえ壊せば、サツキの意識が戻り、暴走が止まるかもしれない。フーカはどこかに開ける場所がないか、ケースを隅から隅まで調べていく。そして、カードをスキャンするであろう溝のようなものを見つけた。

時間がないこともあり、フーカは躊躇いの欠片もなくカードをスキャンし、ロックが解除されたケースを力づくで開ける。カードのスキャンが成功するかは考えていなかったが、成功したので問題ないだろう。

さっそくコアを壊そうとするフーカだったが、コアを前に動きがな

くなつてしまった。

「……………どうやってめげばええんじや……………」

壊そうと意気込んだところまでは良かったが、コアの壊し方が全くわからない。

いつものようにぶん殴ればいいのか？ それとも燃やせばいいのか？ もしくは押し潰せばいいのか？

この場で破壊する方法となるとそれくらいしか浮かばず、フーカはやむを得ず選択した。

「——めげろお！」

ぶん殴るという選択を。

「あいたあ……………!?!」

が、サツキを操れるほどのコアがそう簡単に壊れてくれるわけがない。やや半端な力で殴ったせいとか、逆に手を痛めてしまった。

だがその程度でめげることなく、何度もコアを殴り続けるフーカ。右は使わず、左の拳だけで。回数が増えていくうちに、拳に魔力を纏うようになっていた。が、コアが壊れる気配はない。

試しに瓦礫にぶついたり、選択肢にもあつた燃やすという行為を、燃え盛る火炎で試みたりもしたが、どれも有効ではなかった。

そして殴り続けることにした結果、左の拳は血が出るほど痛んでしまい、額には嫌な汗が流れるようになり、顔も拳から脳に伝わる痛みで歪んでしまっていた。

「……………」

これだけの無理をしてもなお、フーカは諦めない。血だらけになつた左の拳に魔力を纏い、今度こそ破壊すると言わんばかりに綺麗な構えを取り——

「めげろおーっ！」

——渾身の一撃を放った。

## 第18話 「暴虐の果てに」

「オオオオオオ!!」

巨大な炎のような魔力を激しく迸らせ、足下にベルカ式の魔法陣を展開し、肉体のキャパシティなどお構いなしと言わんばかりに、体内の魔力をひたすら高めていくサツキ。

「アクセラレイター・オルタ……!」

果てしなく強くなっていくサツキに対抗すべく、アクセラレイターの応用版である、システム『オルタ』を発動するバネット。

次元世界サハラツタの街を巻き込んで両者が対峙する中、ようやく動けるようになったアルファがバネットの隣に立つ。

「遅いぞアルファ」

「お二人が速すぎるんです」

アルファは恨めしそうに言うと、全身をバネットと同じ黒い魔力で覆い、拳を構える。

善と悪の位置が逆でなければ、この状況はまさに王道と呼ばれるものだろう。……とはいえ、サツキも善人と言えるような人物ではないが。

「グウウウウ……!」

力を溜め終えたらしいサツキが全身を包み込んでいた魔力を掻き消し、地面に降りてくる。

瞳は依然として猫のような垂直のスリット型で赤紫色に輝いているものの、魔力の向上が関係しているのか、顔にいくつか青筋を浮かべており、髪が赤紫色に点滅していた。

サツキは待つことを知らないのか、降り立つと同時に自分の顔の前

に魔法陣を展開し、

「ハアアアアア!!」

その中心に先ほどよりも早く魔力を溜め、一筋の光を放った。

放たれた光はさつきまでの一直線だったものとは違い、横から全てを薙ぎ払うようにバネットとアルファに襲い掛かる。

バネットとアルファはこれを戦闘再開の合図と受け取り、二人揃って飛び上がることで光を回避すると、バネットはさつきよりも一段と速いスピードでサツキに斬りかかり、アルファは右腕を砲口に、左腕を連射可能なライフルに変形させた。

「ヌウウウウ……!」

「やつとダメージが入ったみてえだな」

脇腹を剣で斬られ、ここに来て初めて顔をしかめるサツキ。傷こそ付いていないが、どうやら内側に打撃としてのダメージが入ったらしい。

それが非常に嬉しいのか、思わず笑みを浮かべるバネット。その様子はさながら、子供が好きなものを見つけて喜ぶ顔のようだった。

サツキはお返しと言うように剣を脇腹に抱え、右のハイキックでバネットを仕留めようとする。

が、全身を黒く輝かせたバネットはサツキが抱えていた剣ごと姿を消し、背後から後頭部を斬りつけ、続いて正面に回ると今度は渾身の後ろ蹴りをサツキの鳩尾に叩き込んだ。

「アアアアアア!!」

忌々しそうに唸り声を上げ、怒り狂うように首を横に振るサツキ。初めて自分よりも速い相手が現れたことで、戸惑っているのかもしれない。そう思えそうな仕草だった。

それでも気を取り直したのか、サツキは超高速で動き回るバネットの姿をはつきりと捉え、迎撃しようと顔の前に魔法陣を展開――

「隙あります」

「グウウ……!?!」

——しようと動きを止めたとこで、アルファが左腕から撃ち出した、徹甲弾のような魔力弾を顔面に食らってしまった。

しかも今の弾丸は貫通重視で構成されていたのか、バネットの剣と同じくサツキに確かなダメージを与えているようだ。

二度も不覚を取られたせい、サツキは悔しそうに絶叫すると全身に炎のようなオーラ状の魔力を纏い、そのまま飛び上がると、アルファに向かって突進を繰り返した。

「させるか——!?!」

加速したバネットがさかさず間に入ってサツキの突進を食い止めるも、彼女は待つてましたと言いたそうに低く唸ると、バネットの両肩を骨が砕けそうなほどの握力で掴み、頭突きと腹部への膝蹴りを何度も食らわす。

ただでさえアクセラレーターによる負荷が大きいのに、未完成のシステム『オルタ』を使用していることもあり、その負荷も合わさって頭部から、口から血を出すバネット。

「ぐう、ぶっあつ……!?!」

そのシステム『オルタ』を最大限に発動しているにも関わらず、サツキの人間離れた握力から逃れることができない。サツキの方もそれを見越しているのか、両手の指全てをバネットの肩に文字通り食い込ませている。そのせいで両肩から酷く出血しており、血が止まる気配もない。

そんな中、絶体絶命の状況にある自分の主を助けようと、右腕の砲口にエネルギーを充填させたアルファは、攻撃の手を緩めないサツキの背中に、さつきの弾丸同様、貫通性を重視した砲撃を撃ち込んだ。

「ゴアアアア!!」

先ほどよりも大きなダメージが入ったらしく、バネットの肩を握り締めながら悲鳴に等しい雄叫びを上げるサツキ。なのにバネットを

放そうとはせず、彼を掴んだまま一度結界の傍まで急上昇すると、そこから一気に降下し始めた。降下の勢いを利用して、バネットを地面に叩きつけるつもりだ。

彼女の意図に気付いたアルファは右腕を砲口からアンカーのようなものに変形させると、それを背後からサツキの右肩に撃ち込む。そして、

「いい加減、離れなさい……!」

「ガアアアアア!」

魔力で構成された電流を流し込んだ。

□

「グアアアアア!」

さすがのサツキもこれは相当効いたのか、今までと違って明らか苦悶の表情を浮かべ、意地でも放さなかつたバネットを地面に投げつける形で解放する。

バネットも自分が解放されたことに気づき、全身を黒く輝かせて加速すると、サツキに絶え間なく電流を流すアルファの元に降り立つ。

「大丈夫ですか、マスター」

「これのどこを見れば大丈夫に見えるんだお前は……」

両肩から酷く出血し、サツキに受けたダメージとシステム『オルタ』の使用による負荷が合わさり、頭部と口元からも血を流すバネット。その姿は第三者から見ると非常に痛々しいものだった。

右肩に撃ち込まれたアンカーを引き抜こうとするも、そうはさせまいと左腕のライフルから貫通弾を連射し、サツキを妨害するアルファ。



「ウオオアアア!!」

アルファの妨害でアンカーが抜けず、全身に内側から流し込まれる電流に苦しむサツキ。

徐々にダメージが蓄積されているのか、彼女が全身に纏っていたオーラ状の魔力が消滅し、髪の毛の点滅もピタリと止まっていた。

この光景を見てバネットは一瞬安堵の表情を浮かべるも、サツキが少しずつ拳を握り始めたのを見てすぐに気を引き締める。

「これで一段落といけば良かったんだがな……」

「どういう意味です?」

そのままの意味だ、と力を溜める姿勢になりつつあるサツキを指差すバネット。アルファもそれに倣ってサツキを舐め回すように観察し、ハツとした顔になる。

すぐさま流す電流の量を大幅に増やし、ライフルでサツキの額を狙い撃ち、意識を飛ばそうとするアルファ。だが、時すでに遅し。

「ウオオオオオオ——!!」

突如気合いで電流を振り払うと、全身に途方もなく巨大な炎のような、紅蓮に輝くオーラ状の魔力を纏い、天に向かって絶叫のような雄叫びを上げるサツキ。

その衝撃で右肩に撃ち込まれていたアンカーが破壊され、垂直のスリット型である瞳の色が、輝く赤紫色から鮮やかな紫色に変わる。赤みがかかった黒に戻った髪も、再び赤紫色に点滅し始めた。

サツキはオーラ状の魔力を纏ったまま、全身から高密度の魔力の衝撃波を放ち、辺り一面を破壊していく。周りのことなど知ったことかと言わんばかりに。

「追い詰められると力を発揮するタイプか……」

「何を呑気に分析しているんですか。早く構えて下さい」

バネットがアルファに急かされて剣を構え、アルファも破壊されたアンカーを修復し、もう一度サツキに撃ち込もうと狙いを定める。

——だが、サツキは二人の前から姿を消した。

「っ！ どこに消え——!?!」

「くそつたれが——!?!」

見えない何かに殴り飛ばされ、物凄い速さで壁に激突するバネットとアルファ。自分達が立っていた場所を見ると、姿を消したはずのサツキが立っていた。

サツキは右の拳を握り込むと、それを突き出して拳圧を飛ばす。その拳圧はこれまでのものと比べても最大級の威力を秘めているようで、周りの物どころか地面をも削り取っていき、そのまま二人を襲う。

「ぐおおおおっ！」

「かはあ……っ！」

拳圧をモロに食らってしまい、バネットは血を吐き、アルファは息を詰まらせる。

急いでその場から離れようとするも、アルファは真上からサツキに踏みつけられ、バネットもついぞと言わんばかりに左腕の一振り吹き飛ばされた。

「ぐうう……!!」

「ゴアアアア!!」

アルファの顔面を地面にめり込ませるほどの勢いで踏みつけると、顔の前に魔法陣を展開し——

「ゼアアアアア!!」

「チイツ……!!」

——吹き飛ばしたバネットに狙いを定め、一筋の光を放って彼を撃墜した。

「マスター！ ぐああ……!!」

地面に落ちたバネットを助きたいアルファだが、サツキに踏みつけられたままで動くことができない。

一旦両腕を元に戻し、右腕を剣に、左腕を鎌に変え、自分の上にのせられているサツキの足を斬ろうとするも、尋常でない強度を誇る肉

体に傷一つ付けるがでしなかつた。それどころか剣の刃が削ぎ落ち、鎌の先端部が折れてしまった。

「……ロックバインド！」

どこからともなくバネツトの声が聞こえ、サツキの左足が地面から盛り上がった岩に拘束される。

これによりアルファの顔を踏みつけていた右足の力が緩み、サツキが拘束された左足に気を取られているうちに、アルファは脱出することに成功した。

「オラアアアア!!」

サツキは左足を岩から強引に引き抜くと、自分の後ろにいるバネツトの方へ振り向き、右腕に力を込めて振るい、発生した風圧で彼を牽制する。

バネツトの動きが止まった隙をつき、お返しと言いたげに彼の背後に回り込むと、少し跳んでミドルキックを左頬へ繰り出す。

「アクセラレイター・オルタアア！」

蹴りが当たる寸前で加速能力を行使したバネツトはまたしてもサツキの背後を取り、彼女の首筋を斬ろうと右手に持つ剣を振るう。

が、ちゃんとバネツトの動きを見ていたサツキはこれを屈んで回避し、彼の体勢を足払いで崩すと、右の肘打ちで彼を数百メートル先にあるビルの壁に叩きつけた。

「がああああ!!」

右肘が鳩尾に食い込み、想像を絶する痛みで絶叫するバネツト。加えて背中を強く打ったこともあり、背骨が大きな悲鳴を上げる。

骨が軋む音を聞いたサツキは獰猛な顔で口元を歪めると、バネツトの右足を掴み、そのままもちやのように彼を振り回し始めた。

「うおおおおおー!!」

危機感よりも驚きが勝るような声を上げるバネツトを、顔面から容赦なく地面に、それも何度も何度も叩きつけていくサツキ。

途中でアルファによる狙撃の妨害が入っても、彼女に背中を砲撃で

撃たれても、サツキは認識したうえで全く意に介さない。

そして彼の顔が酷く歪んだところで、その一般男性よりも大柄な身体をアルファに向かって投げ飛ばし、彼女の真上に到達したところで、

「カアアアア!!」

顔の前に魔法陣を展開し、中心から放った一筋の光で、またも彼を撃ち抜いた。

身体から煙を出して堕ちていくバネットを受け止め、そつと地面に寝かせると、アルファは無表情だった顔に初めて怒りを見せた。

「よくもここまでやってくれましたね……!」

黒い魔力で全身を覆うとたった一步でサツキに肉薄して、右の鋭い蹴りを彼女の懐に突き刺し、左のハイキックを顔面にブチ当てるアルファ。

それでもサツキは全く意に介さないが、アルファは攻撃の手を休めることはなく、密着してもおかしくないこの距離でチェーングンに変形させた左腕から魔力弾を連射する。

至近距離からの連射が効いたのか、サツキはほんの少しだけ後退した。その一瞬の間について、アルファは彼女の顔面を何度も殴りつける。

「ウオラアアア!!」

するとサツキも負けじと目では追えないほどの、拳による超高速のラッシュを繰り出す。

アルファはラッシュを食らいながらも表向きは意に介さず、内心痛みを堪えながらサツキを殴る、蹴るを何度も繰り返す。そんな感じの、目にも止まらぬ攻防が再び繰り広げられた。

サツキが強くなれば、アルファもまた彼女や彼女に倒された量産型からデータを採集し、それを分析・実用することで、驚くべき速さで

成長していく。その様は、先ほど『一人では無理だ』と弱音を吐いて諦めたのが嘘のようだった。

「はああああああー！」

「オラアアアア!!」

その攻防は倒れていたバネットが、剣を杖代わりにして起き上がるほどの時間を与えてしまうほど続いたが、決して無限の域ではないため、唐突に終わりが訪れる。

「ああ……!?!」

拳を突き出した瞬間をつかれ、顔面に左のハイキックを叩き込まれ、そのまま地面に叩きつけられるアルファ。この打ち合いはサツキの勝ちだろう。

それがどうした。ただ打ち合いに負けただけだ。アルファはすぐに立ち上がると飛び上がり、同じく飛んでいるサツキの足下まで迫ると、砲口に変形させた両腕をくつつけて一つの大きな砲口にして、そこから極太の魔力砲を発射する。

「グウウウウウ……!!」

魔力砲はサツキを飲み込むと大爆発を起こし、あまりの威力に街全体を揺らしてみせた。

なのにサツキはダメージを受けていないかのように、爆煙から飛び出してくると、

「■■■■■■■■——ッ!!」

雄叫びによる大音量の、魔力込みの振動波を口から放った。

またもやその場にいるバネットの部下や、逃げ遅れた街の住民に耳を塞がせ、苦悶の表情を浮かばせる。もちろんアルファとバネット、そしてフーカも例外ではない。

アルファは苦しそうに耳を塞ぎながらもサツキの口元を蹴りつけ、大音量の振動波を無理やり中断させると、彼女の顔を怒りの込められ

た拳で殴りつけた。

サツキはそのまま地面に叩きつけられるも、休むことすらなく一瞬で立ち上がる。

「ケイジングスピアーズ！」

その瞬間を待っていた。バネットは小声でそう言うと、今度はサツキの周囲の地面を檻状に盛り上がらせ、彼女をその中に閉じ込めた。いつの間にか前衛と後衛が逆転しているのだが、小刀のようなものを取り出したバネットと、宙に浮いたまま構えるアルファはそんなことに意識を回している暇がない。

「ヌウウウウ……!!」

檻状になった地面が思ったよりも硬いのか、それとも中が狭いのか、あるいは両方か。サツキは暴れながらも苦戦していた。

「ゴラアアアア!!」

とはいえ、それもほんの少しだけ。サツキは両腕で檻状になった地面を破壊し、全身にオーラ状の紅蓮に輝く魔力を纏っていく。

バネットとアルファが予想通りと言わんばかりに距離を取るも、

「ハアアアアア!!」

そう来るのはわかってたと言うように右手から魔力の衝撃波を放つサツキ。

「もう少し大人しくしろってんだ！」

「いよいよこちらも危ないですね」

もうとつづくに危ないわ。そうツツコミそうになるも、バネットはアルファと共に衝撃波を回避し、剣を大型片手銃に変形させると、チャージせずにビームを撃ち出す。

そのビームは顔面に直撃するも、先ほどと違って全くダメージを

負った様子がない。が、サツキは忌々しそうに動きを止める。

——ここではその一瞬が隙となる。

「今度こそ……！」

「ヌウウウウ……!!」

アルファは右腕を再びアンカーに変形させると、背後には回り込めないで真正面からサツキの左肩にそれを撃ち込み、電流を最大出力で流していく。

先ほど自分を苦しめた、鬱陶しい攻撃。それを自分は、再び同じところから食らっている。

最大出力の電流を流されてもなお、サツキは自分の状態を冷静に把握するほどの余裕があった。そして——

「ウオオオオオオ!!」

——全身に纏っていた紅蓮に輝くオーラ状の魔力を激しく迸らせ、全身に行き渡っていた電流をまたしても気合いで振り払った。

自分を拘束する邪魔なものを払い除けたサツキは、光を放とうと顔の前に魔法陣を展開。その中心に、全身を纏うオーラ状の魔力を集中させていく。溜めがあるということは、威力も射程距離も向上させるつもりだろう。

「やつとデカいのを撃つ気になったか！」

「別に待っていたわけではありませんよね？ どうするんですか、アレ」

「フォーミュラで分析すればイケそうだが……」

フォーミュラなら例え今のサツキが使う魔法でも解析・分解できそうだが、そうすると今度は魔法なしの打撃でサンドバッグにされる。どちらにせよ、結果は見えていた。

なので自分に掛かる負担も考え、フォーミュラの使用は断念することにした。……自分のそれは試作品で機能が安定しないというものも

あるが。

「ここまでスリルな体験は管理局時代でもなかったぜ……」

「過去を思い出す暇があるなら今に集中してください」

こうして二人が目の前のサツキから逃避するように会話している間にも、そのサツキは魔力のチャージを完了していた。

この無駄に長引いた戦いに決着をつけようと、魔法陣の中心が鮮やかに輝き始め、いよいよ一筋の光として発射されようとした、その時だった。

「めげろお——っ!!」

フリーカの渾身の叫びが聞こえ、サツキの様子に変化が起きたのは。

□

「や……やった……!」

全身の力を使い過ぎたのか、肩で息をしながらその場に座り込み、フリーカは喜びの声を上げる。

よほど痛めつけたのか、その左手は血で染まっており、顔も汗だらけだ。膝もガクガクと震えている。

そんな彼女の視線の先には、何十発も休むことなく殴り続け、ついに破壊することができたコアが破片となって落ちていた。

「グウウウウウ……!!」

自分の中にあつた異物——衣類に染み込まれたバネットの魔力——がなくなつたからか、唸り声を上げながらもサツキは地面に足を付ける。

彼女が纏っていたオーラ状の魔力が消滅し、髪那点滅も止まり、黒



く染まっていたパーカーも元の色である灰色に戻っていく。

それでもまだ暴れ足りないと言わんばかりに、しつこく拳を握り込んで力を溜めようとするサツキ。

「ウアアアアア!!」

だが、さつきまでと違って理性が戻ってきているのか、ただただ空しい雄叫びが響き渡るだけで、彼女がオーラ状の魔力を纏うことはなかった。

……尤もサツキの場合、使い方次第で雄叫びも振動波という攻撃として使用できるので、魔力が出なかったとはいえ油断はできないが。

「ほう、やるじえねえかおチビちゃん」

「私物を破壊されて感心するとはどういう神経をしているんですか？」

「別に。特別な拘りがあったわけじゃねえしな」

壊れたコアには一切興味を示さず、それを破壊してのけたフーカを称賛するバネット。剣の形をしているヴァリアントウエポンも使い過ぎたせいか軽くスパークしており、今の彼が使える武器は先ほど取り出した小刀のようなデバイスだけ。

渋い顔のくせに子供っぽい主を見て呆れるも、ボロボロな彼に代わって構えを取るアルファ。戦闘兵器として生まれた彼女だが、主を護ろうとする意志は確かなようだ。

フーカはそんな二人を警戒していたが、それ以上にサツキの身を案じていた。あれだけ派手に暴れ、嫌っていた魔法を行使したんだ。理性が戻れば身体に掛かった負荷も、精神的ダメージも一気に受けてしまっただろう。

「大丈夫……のはずじゃ……」

息を整えたフーカが不安たつぷりの顔で呟くも、それに反応した者は誰もいなかった。そして――

「があああああつ!!」

——サツキは人間寄りの雄叫びを上げると、ついに理性を取り戻した。

「ハア、ハア……………何だこりや……………」

まず息が荒くなり、身体が重いのか両膝に手を乗せるサツキ。どうやらこれまでの間に受けたダメージが、今になって響いてきたようだ。

暴走時の記憶はないらしく、サツキはすっかりと変わり果ててしまった工場地帯と、いつの間にか張られていた巨大な結界、自分のいる場所をゆっくりと把握していく。

「おいおい……………冗談だろ……………!!」

そして、一つの結論に辿り着いた。自分が魔法を使った、という最悪の結論に。

後悔と屈辱で顔を歪ませ、今にも涙を流しそうな顔になるサツキ。無意識とはいえ、自分で自分に課せたタブーを破ったことが相当応えたらしい。

それでも心は折れておらず、すぐさま怒りの表情を浮かべると、視線の先にいたバネットとアルファに、震え声で告げる。

「テメエら……………アタシに魔法を使わせやがったな……………!!」

悔しさのあまり口元から血を流すほど、唇を噛み締めながら。

## 第19話「奥の手」

「アタシに——魔法を使わせやがったなア……!?!」

今にも涙を流しそうなほど悔しそうな表情で、アルファとバネットを睨みつけるサツキ。さり気なく彼女の隣に立ったフーカも、サツキほどではないが敵意を込めた目付きで彼らを睨む。

悔しさが、後悔が、屈辱が、サツキの中で酷く渦巻いていく。それこそ、また暴走を起こしかねないほどの、負の感情となつて。

だが、そこは誰よりも強固な精神力を持つサツキ。今にも溢れ出さうな負の感情を力づくで抑え、怒りのままに口を開こうとしたところで、隣のフーカが割つて入る形でバネットに問い掛ける。

「お前たちの目的はなんじゃ？ さつきの話を聞いたる限り、世界の征服とかじゃあなさそうじゃけん……。なにに街を襲うわ、緒方さんを操ろうとするわ、意味がわからんぞ」

勝手に口を挟むな。そう言おうとするサツキだが、我を忘れている間に受けたダメージによる痛みに耐えきれず、反射的に顔をしかめたことで口も閉じてしまう。

バネットもバネットでボロボロになった身体に鞭打つかの如く、強引に立ち上がって貧弱そうな小刀のようなデバイスを、誰にも見えないうようこつそりと構える。

この場でまともに戦えるほどの気力が残っているアルファも、サツキの底力を警戒してか、若干膝を震わせながらも右腕をライフルに変形させ、それをバネットとは対照的に派手に構えた。

「そんな俗物に興味はねえよ。俺はただ、実験の過程や物を作るまでの工程で得られる知識が欲しいだけだ」

そう言つてスパークしている剣を捨てると、バネットは両手を広げて空を見上げる。フーカは彼の言っていることがわからず首を傾げているが、サツキは納得するように頷いた。

本来、魔法使いとは“知識”を求める生き物だと聞いたことがあ

る。そのため彼らに言わせれば、実験の結果や作られた物の性能の良さ。その程度で満足しているようじゃ、技術的な進展はあり得ない。だがバネットは、科学者でありながらその魔法使い達と同じ思考を有している。そういう意味では彼こそが真の魔法使いと言えるだろう。

「……なるほど。つまりお前らは知識を得るためなら、この世界や巻き込まれる生物の命はどうなっても良い。そう言いたいんだな？」  
「当然だ。それもまた俺にとっては、その場で得られる知識でしかない」

バネットがサツキの言うことに肯定の意を示したところで、フーカもようやく彼の言っていることを理解する。そして底知れぬ恐怖と、命を弄ぶ愚か者に対する怒りが湧いてきた。

「人の命を何だと思うとるんじゃ！」  
「言つたろうが。その場で得られる知識だと」

この一言が引き金となったのか、それともこれ以上の会話は不毛だと判断したのか、あるいは両方か。バネットがそう言い切ると共に、アルファが動いた。鬱陶しそうな目でフーカを見ながら、右腕のライフルで、彼女を狙いながら。

「そこを退きなさい——！」  
「誰が退いてやるかバアーカ」

しかし、そうはさせまいとサツキが割り込んできたことにより、標的をフーカからサツキへ変更するアルファ。すかさずライフルを連射し始める。

さっきの暴走状態とは違って痛みはちゃんとあるらしく、ゼロ距離で撃ち出される魔力弾が当たる度に顔をしかめるサツキ。

それでもアルファのライフルとなった右腕を左手で掴み、右の手刀を振り下ろす——ように見せかけ、そのまま力づくで引きちぎった。  
「ぐうっ……!!」

力づくはさすがに効いたのか、顔を歪めて血がドバドバと溢れ出てくる右肩を押さえるアルファ。これまで暴走時のサツキが放つ閃光や自分の攻撃で腕を喪失してきたが、雑草を引き抜く感じで持ってい

かれるとは思っていなかったようだ。

「おいどうした。また千切れたぞ、お前の腕」

引きちぎった右腕を投げ捨てると、サツキはアルファが右腕を再生させようと魔力を溜めている今を狙い、右肩に回し蹴りをぶつける。傷口にドンピシャで食らわされたこともあり、さらに顔を歪めるアルファ。だが、サツキから見ればその一瞬さえも隙でしかない。

もう一度傷口に回し蹴りを入れると、アルファの頭を右手で鷲掴みにし、後頭部から地面に叩きつけ、めり込ませるよう強引に押し込む。

「こ、の……!!」

「あア？」

アルファは顔の歪みを怒りのそれに変えると、残った左腕を光る球体のようなものに変形させると、それを閃光弾のように激しく光らせた。

「チツ……!?!」

「そのまま暗黒を味わいなさいー!」

閃光をしっかりと見たサツキの目が眩んだ隙に、彼女の右手から脱出し、右のミドルキックを左頬に繰り出すアルファ。

体勢を崩されたうえに不意をつかれたこともあり、サツキはアルファの蹴りに対応できずモロに食らうも、そのまま転がるように距離を取った。

「はっ、何が暗黒だ。もう散々見てきたっつうの」

在学時に喧嘩を売ってきた後輩の目を狙った攻撃、今のフーカみたく自分の隣に立ち続けた魔女の末裔の目くらし、そして——死ぬ瞬間。

これまで暗黒どころか、何も見えない深い闇を幾度となく経験してきたサツキにとって、この程度の目くらしは可愛いものだろう。

視界を遮断された以上、目は閉じるしかない。サツキは使えなくなった両目を閉じ、犬のように臭いを嗅ぐ動作をすると、一瞬でアルファの背後を取り、握り込んだ右の拳でこちらへ振り向いた彼女の顔を殴りつける。

「あぐ……!?!」

もう少し奇抜的な攻撃が来ると思っていたアルファは驚きで目を見開き、避けることも忘れてサツキの右拳を顔に受け、脳天目掛けて振り下ろされた左拳も、まるで自分から受け入れるように食らってしまふ。

元々震わせていた膝がさらに震え、体勢を崩して地に膝をつくアルファ。それでもなお、サツキが攻撃の手を緩めることはない。

彼女の顔を両手で掴んで固定し、膝蹴りを何度もブチ込むサツキ。二人から離れたところで考え込むバネットと、サツキを見守るフーカが思わず引きそうになるほど、膝蹴りの連発は続いた。

「立てクソヤロー」  
「うっ……」

そしてアルファが倒れそうになったところで蹴りを中断し、下顎に狙いを定めて彼女の身体を思いっきり上空へ蹴り上げ、すぐさま跳び上がって下顎を押さえるアルファの上に先回りすると、両の拳を合わせて振り下ろし、彼女を地面に叩きつけた。

暴走時にも使ったそれに比べると威力は落ちるものの、大きなクレーターを生み出し、アルファに血を吐かせるくらいの効果はあったようだ。

「げほっ、げほっ……こうなったら……!」

サツキが地面に足をつけると同時に、全身のエネルギーを胸元に集中させていくアルファ。

視界が戻っていない状態でほんの一瞬眉を顰めるサツキだったが、バネットが残した資料に書いてあったことを思い出し、驚くことなく彼女に問い掛ける。

「……自爆か?」

「ええ。正攻法では勝てず、私の身分を考えるなら……この与えられた命を失うくらい、何てことはありません」

自爆行為。アルファは自分の体内に組み込まれている、布一枚分の耐魔力繊維と己の全エネルギーを用いてその場にいる者全てを吹き飛ばすほどの大爆発を起こすつもりだろう。

「逃げては無駄ですよ。文字通り全エネルギーを解き放てば、結界内

にあるもの全てを塵にできますので」

「ああそうかい。そんじや、別の方法を取るわ」

別の方法。エネルギーを集める速度を一瞬だけ緩め、その言葉に反応するアルファ。今の自分は街くらいなら跡形もなく吹き飛ばせる爆弾となっている。一体どうやって止めるというのか。

サツキは慌てた様子もなく、普通に歩いてアルファに近づくと、

「——こうすりゃ良いんだよ！」

と叫び、アルファのこめかみに渾身の一撃を食らわせた。

「えっ………？」

あまりの威力と脳内に響き渡った衝撃で思考が止まってしまい、胸元に集中していたエネルギーが散り散りになっていく。

アルファのこめかみに、思考に影響を及ぼすほどの一撃を入れる。

それは『少しでも触れると爆発する』という点がないアルファの自爆だからこそできた、強引ながらも効率の良い方法だった。

なのでサツキにとっても一種の賭けだったが、アルファの反応から上手くいったことがわかって一瞬だけ安堵の表情を浮かべる。

「………参りました」

「やつと白旗上げたか」

「ええ、降参です——」

負けは認めたアルファだが、サツキの目が眩んでいるのを良いことに、不敵な笑みを浮かべると、

「——私はね」

と、たった一言。たった一言を強調しながら呟いた。

——その瞬間だった。

「？　なんだ………？」

「うわわ……！」

地震でもないのに、地面が大きく揺れ始めたのは。

地面からの振動を察知し、目を閉じたまま周りを見回すサツキ。目が見えなくとも、優れた鼻と耳があるので問題ないだろう。

フーカもフーカで慌てながらサツキにしがみつき、彼女の真似をするように周りを見回す。そして、サツキと違って目の見えるフーカは、あるものを見つけた。

「緒方さん！ あ、あそこ……！」

「あア？ どこだよ？」

目が見えないのであそこと言われても見ようがないのだが、フーカの慌て様から察するにそれどころではない何かを見つけたのだろう。

後でフーカを一発殴ろう。そう決心しながら、サツキはフーカが指差す方に顔を向ける。

「いでよ巨神——！」

そこにいたのは、足下に独自の魔法陣を展開したバネットによって、今まさに召喚されようとしている岩の巨人——ゴーレムだった。

□

「創主バネットの名の元に。全てを砕け——『ギガンテス』！」

途方もなく巨大なゴーレムが召喚される影響か。大気が震え、大地が揺れていく。

目が見えないサツキはともかく、フーカは轟音と共に召喚されていく巨人の上半身を見て、思わず一歩下がってしまう。



見えない状態でも直感でフーカ的心情を察したのか、彼女の前に出て目を擦るサツキ。一刻も早く揺れの正体を掴みたい。そう思いながら。

「……………デケエな、おい」

そしてようやく目が見えるようになり、サツキも召喚されていく巨大なゴーレムを目の当たりにし、圧倒された。

以前、インターミドルの試合映像で見たゴーレムよりも、さらに巨大なゴーレムに。

「はははははは!!…これが俺の奥の手だ!」

超巨大ゴーレム——ギガンテスの右肩に乗り、高らかに笑うバネツト。これまで様々な能力や武装を使ってきた彼だが、今まで見せなかった傲慢な笑みを浮かべる辺り、このゴーレムには相当自信があるらしい。

ついにギガンテスの全身が召喚され、地響きと共にゆっくりと動き始めた。その様はまさに特撮映画に出てくるような怪獣である。

「どうするんですか、あの大きいの……」

「いやどうするも何も——ブチのめすしかねえだろ」

殴る相手が途方もなく巨大になっただけだ。敵がどんな変化を起こそうと、どれだけ進化しようと、サツキのやることは変わらない。

100mは優に超えていそうなギガンテスを前にしても、サツキは一步も退かない。それどころか、最初のときより闘志を湧かせているように見える。

しかし、戦闘狂ではないフーカは普通に逃げたいと思っていた。まあ無理もないだろう。たださえ今回の敵が怖くて強いのに、それが今度はスケールの違い過ぎる巨人として現れたのだから。

「ぶっ潰せ、ギガンテス!」

フーカがビビって冷や汗を掻き、サツキが右拳を左手に押し付けた瞬間、バネツトの指示を受けたギガンテスが巨大な右の拳を振り上げ、それをサツキ目掛けて突き出してきた。

「チイツ——!?!」

想像以上の速さで迫る拳に、己の拳をぶつけるサツキ。見かけ通り

のパワーを持つギガンテスの拳と、見かけを遥かに超えるパワーを持つサツキの拳。両者の拳が激突した瞬間、拳圧が四方八方に飛んだ。「ぐうぐうぐうぐう!!」

『■■□□■■□□■■——!!』

サツキの咆哮による振動波に匹敵するほどの雄叫びを上げ、踏ん張るサツキをその巨体を前進させることで押し始めるギガンテス。

さすがのサツキも巨大な拳に加え、さらに巨大な本体ごと来られてはどうしようもなく、後ろの地面が陥没するほどの脚力で踏ん張ってもなお、少しずつ押されていく。

後ろのフーカが左側へ逃げたのを確認すると、サツキは自分の拳をぶつけて止めていたギガンテスの拳を、自分の拳を引いて身体を左にズラすことで回避に成功する。

標的を失ったギガンテスの拳が地面に突き刺さると、途方もなく巨大な蜘蛛状のヒビが出来上がり、サツキとフーカの身体が宙に浮くほどの揺れを引き起こした。

「クソが……い！」

悔しそうに舌打ちし、拳を構えるサツキ。相手が巨人とはいえ、まさか自分が力負けするとは。サツキにとっては何気に、魔法の使用以外で味わう屈辱だった。

そのお返しと言わんばかりに、本気で握り込んだ左の拳を突き出し、ギガンテスの胸元目掛けて広範囲型の拳圧を飛ばすサツキ。

『■■□□■■□□■■——!!』

が、直撃するも全く効いておらず、その程度かと言うように雄叫びを上げるギガンテス。

創手であるバネットは特に指示を出すこともなく、先ほどサツキに受けた傷が痛むのか、ギガンテスの右肩に座り込んで彼女達を見物していた。どうやら一つの指示で事足りるらしい。

ギガンテスは右足を地響きと共に振り上げると、そのまま何もなしのところへ蹴りを放ち、その風圧でサツキを吹き飛ばそうとする。

「□□□□□□□□——ッ!!」

だがサツキはこれを、咆哮による大音量の振動波で真っ向から相殺してみせた。

「すげえな嬢ちゃん。そこまでデタラメだとは思わなかったぜ」

「ふざけろ……!」

高みの見物をしているバネットに称賛されるも、サツキは嬉しがることなく彼を睨みつける。後で絶対に殺すと言いたげな、殺意の籠った目付きで。

次はどうしようか。そう考え始めたところで、隙ありと言いそうなタイミングでギガンテスが左拳を構え、

「ブチかませー! ギガンテス!」

『■□■□■□■□——!!』

その拳だけを飛ばしてきた。いわゆるロケットパンチである。

「来たかロマン……!」

サツキは慌てて右拳を溜めるように構えると、身体を捻ってそれを突き出し、ロケットの如く飛んできたギガンテスの拳を粉碎する。

これにより発生した風圧がギガンテスの巨体を一歩だけ後退させ、飛び散った破片がフーカを襲う。

「なしてわしの方に来よるんじゃあー!」

頭を両手で守りながら、降り注ぐ破片から逃げ惑うフーカ。そして手頃な瓦礫を見つけると、そこに身を隠した。相手がゴーレムじゃほとんど持たないと思うが……。

ロケットパンチとして分離した左手を一瞬で再構築し、どうだと言いたそうに拳を作るギガンテス。物質であるゴーレムにも感情があるのだろうか。

「こういうのは大体創主を叩けば終わるが……」

肝心の創主であるバネットがギガンテスの右肩に乗っているため、そこへ到達するにはギガンテスの腕を伝っていくか、今いる場所から飛び道具系の技を放つしかない。

しかもインターミドルの試合映像で見たゴーレムマイスターは、召喚したゴーレムを潰されても再び召喚していた。おそらくバネットもそのマイスターと同じことができるだろう。

ギガンテスの腕を伝っていくことに関しては、やろうと思えばできないこともない。だが、到達するよりも先に振り落とされる可能性がある。なので、難しいところである。

飛び道具系のもすでに実行済みで、サツキのそれではダメージにすらならないことが判明している。残念ながら先の方法よりも可能性が低いのだ。

「無理だよなア……」

自分では戦えないほど傷付いているバネットだが、さっきの戦いで様々な能力を披露している。それを無理に行使すれば、サツキの疲労次第で普通に倒せてしまうだろう。

とはいえ、それはバネットにとつても最終手段である。何故なら能力のほとんどが安定しておらず、身体への負担が大きいからだ。

『■■■■■■■■——!!』

雄叫びを上げたかと思えば、今度は拳のラツシユを繰り返してきてた。単発ではなく、ラツシユ。つまり拳の連打である。

「マジかよ……!?!」

これにはサツキも目を見開き、驚きながら回避する。一発ならまだしも、巨大ゴーレムの連打を相殺するなんて無理があるからだ。

その巨体からは想像もできないほどの、信じられないスピードで放たれる拳を直撃ストレスでかわしていき、最後の一発に対してようやく相殺の右拳を放つサツキ。

「オラアアアア!!」

最初の構図と全く同じ状況になり、今度はサツキの方が前進することでギガンテスの拳を押し始めた。

しかし、そこは巨大ゴーレムのギガンテス。こちらも一歩も退かずに、再び本体ごと拳を押し抜こうと前進し始める。

これによりサツキが体勢を崩すも、迫り来るパンチを咄嗟に回避し、跳び箱の要領でジャンプすることで、ついにギガンテスの腕の乗ることに成功した。

「ふう……いくぞ」

ギガンテスの左腕の上を走っていき、彼女を落とそうと右の拳を音速並みの速度で放つギガンテス。

だが、サツキはこれをバネットのいる右肩へジャンプすることで回避し、彼との距離があと数十メートル——

「ぐあああああ!」

——というところで、上半身だけを機敏に動かしたギガンテスが薙ぎ払うように振るった、左拳で地面に叩き落とされてしまった。

「ぐはっ……!」

ついに直撃してしまった、ゴーレムの拳。これまで受けたことのない威力にサツキは血を吐くも、まるで何事もなかったかのように立ち上がる。これにはバネットも驚きざるを得なかった。

「嘘だろ……いや、さっきの暴走で身体能力が向上しているとすれば……」

サツキの驚異的な耐久力に驚きはしたが、自分なりにその理由に辿り着き、一人で勝手に満足して頷くバネット。それは命辛々立ち上がったサツキから見れば相当腹が立つものだった。

「ぜってえ引き摺り下ろしてやる……」

そう決意するサツキをよそに、ギガンテスは左足を大きく振り上げ

ると、その巨体からは想像もつかないほど綺麗な踵落としを繰り返した。

これをその場で踏ん張り、両手でどうにか受け止めるサツキ。その衝撃で両足が地面にめり込み、周囲の地面が割れていく。

「ぜあああああ……!!」

『■■□□■■□□■■——!!』

拳よりも威力のある足による攻撃。こればかりはギガンテスが勝つと思われていたが、意外にもサツキが押し返し始めた。

両腕をピンと伸ばしたところで、サツキはその場で宙返りしながら渾身の蹴りを放ち、ギガンテスの巨体を引っくり返す勢いで左足を弾き返す。

そしてすかさず左の拳から拳圧を飛ばそうとするも、体勢を整えたギガンテスがそうはさせまいと言わんばかりに、同じ左拳をぶつけてきた。

「だらああああ!!」

『■■□□■■□□■■——!!』

両者の拳による押し合い。今回はお互いに一步も譲らず拮抗していたが、ギガンテスが上手く腰を捻ったことでサツキの拳を押し切った。

「ハア、ハア、ハア……クソツタレが……!」

ここに来て整っていた息が上がり始め、両膝に手を乗せるサツキ。そもそも生身の人間が、ゴーレムに対抗できていること自体が凄いのだが、サツキはそれを知らない。

追撃が来る前に息を整え、またしてもギガンテスが打ってきた拳の連打をかわしながら、思ったよりも早く目的の人物を見つけた。

「レヴェントーン!」

サツキに大きな声で呼ばれ、瓦礫の裏で身体をビクツとさせるフー

カ。ここから出たくはないが、サツキがどうして自分を呼んだのか凄く気になる。

フリーカは周囲を警戒しつつ、ギガンテスの高速ラッシュが終わると同時に出ていく。

「な、なんじやろか……」

ギガンテスがいつ動くかわからないので身体を小さくし、弱々しく話すフリーカ。これがいつもの日常なら天誅ものだろう。

サツキは「お前に聞きたいことがある」と、血の混じった痰を吐きながら問い掛けた。

「お前、あと何発打てる？」

この言葉を聞いて、最初は衝撃波や弾丸の類いだと思っていたフリーカだが、言い方が微妙に違っていたので拳のことだとすぐに気づけた。

「右の一発だけです。左はもう使えんです」

「そうか。時間がねえからよく聞けよ——」

サツキは一旦言葉を区切ると、拳を格闘家のように構えるギガンテスを見て、フリーカに告げる。

「——手え、貸せ」

## 第20話 「ブチ抜く一撃」

「——手え、貸せ」

あり得ない言葉だった。なまじ強すぎるがゆえに一人で何でも解決しようとするサツキが、目の前の敵を倒すべく、自分に手を貸せと言った。フーカはそれが信じられなかった。

「……わしなんかじゃ、緒方さんについていけないですよ。それでもええんですか？」

そう、フーカはこの場にいる誰よりも弱く、戦いの経験が浅い。というかほぼ皆無に等しい。そんな自分が、サツキについていけないのか。ついていっても大丈夫なのか。

不安に駆られるフーカを見たサツキは額に青筋が浮かぶほどムカつき、彼女をぶん殴りたそうに拳を握ると、フーカの前に立って口を開く。

「良いか良くないかじゃねえ。アタシが手え貸せつつたら貸すんだよ。お前の都合なんざどうでもいいわ」

そう言って左手を、拳に変えてフーカに突き出すサツキ。お前に拒否権はないと言わんばかりの眼光で、フーカを睨みながら。

ぶつきらぼうで言い方こそ悪いものの、実力的には足手まといの自分を、彼女は必要としてくれている。その事実が、フーカには嬉しくてたまらないものだった。

「……わしに選択権はなさそうじゃの」

なので傍若無人という四字熟語がこれでもかというほど似合うサツキの態度に、フーカは呆れ、苦笑いしながらも、サツキの拳に自分の右拳を合わせた。

「それで……わしは何をすりゃあええんですか？」

「そうだな——！」

作戦会議なんてさせるか。そんなメッセージを込めたかのように



放たれたギガンテスの右拳に、咄嗟に振り返り握り込んだ右拳をぶつけるサツキ。

フーカはいきなりのごとで焦るも、サツキは比較的冷静に指示を出してきた。

「身体強化は、できるな……!!」

「は、はいっ」

「それを、全身にやれ……!」

そう言われて何の迷いもなく、己の肉体を魔力で強化するフーカ。これまで喧嘩の際、拳だけにやってきたそれを、今度は魔力を全身に流し込むイメージでやっていく。

そして、魔力による強化を完了したフーカが自信あり気に微笑むと、サツキは自分の拳を引き、食い止めていたギガンテスの拳を直撃寸前のところで回避し――

「いくぞ――!」

「押忍っ!!」

――サツキにしては珍しく気合いの入った声を出し、フーカも気合いを入れてサツキとほぼ同時に駆け出した。

「二人より二人か……。ギガンテス! オールウエポンだ!」

「■■■■■■■■――!!」

バネットの指示を受け、両手の指を二人に向かってツルのように伸ばすギガンテス。

しなやかに伸び、それでいて巨大な岩の指が、まるで鋭利な矢のようにサツキとフーカに迫る。

「構うな! アタシが次の指示を出すまで走り続けろ!」

「押忍!」

雨のように上から襲い来る指をジグザグに避けていき、避け切れないものは拳で破壊していくサツキ。

フーカも彼女に負けじと、自分に当たりそうな指とそうでない指を最大限見極め、冷静かつ迅速にかわしていく。

続いてギガンテスは先ほどのように地響きと共に右足を振り上げ、何もないところへ蹴りを放った際の風圧で、二人を吹き飛ばしに掛かる。

「□□□□□□□□——ッ!!」

さすがにこの風圧はフーカじゃ対処できないため、彼女がついてこられるよう、前に出ているサツキが咆哮による大音量の振動波で相殺する。

サツキの後ろで咄嗟に耳を塞いだフーカだったが、至近距離で聞いてしまったせいで動きが鈍ってしまう。

「■□■□■□■□——!!」

そのフーカを狙って、音速に匹敵するほどの速度で拳を放つギガンテス。それでもフーカは止まらず、ただひたすら走り続ける。

「オラアアアア!!」

サツキはフーカへ迫る死の鉄拳に自分の拳を突き出して食い止め、彼女を先に行かせると同時に拳を引っ込め、身体を左に逸らして拳を回避。そのまま自分も止めていた足を動かす。

全く止まらない二人を見てもバネットが焦っていないからか、ギガンテスも次だと言うように淡々と右の拳だけを、ドリルのように回転させながら飛ばしてくる。

「邪魔すんなー!」

今度は右に回避すると同時に、左の蹴りでロケットパンチを食い止め、そのまま力づくで蹴り返す。蹴りをぶつけた際に脚が痛みで悲鳴を上げるも、サツキは止まることなく駆けていく。

ギガンテスはそれを再構築した左の拳で相殺すると、間髪入れずに再度右の指を伸ばし、相殺した拳の破片が左拳を放った際の風圧でサ

ツキ達に降り注ぐ。

指と破片を全て視認すると、フーカが止まらずに駆けていることを確認し、迫り来る矢のような岩の指を、拳で一本ずつ破壊していき、フーカに当たりそうな破片だけを弾くサツキ。

「レヴェントーン！ 投げてやるから軽く跳べ！」

「とっ……!?!」

サツキの提案に思わずギョツとするフーカだが、敵が目の前にいて、攻撃を仕掛けてきている以上、一瞬の迷いも許されない。

フーカはサツキが自分と並走しているのを確認すると、指示通り軽く、彼女の肩ぐらいまでジャンプする。それを見たサツキはすかさず両の拳を合わせると、

「吹っ飛ばえっ！」

「ええええーっ!?!」

その腕にジャンプしたフーカを着地させ、そのままバレーボールのトスの要領で腕を振り上げ、彼女をギガンテスの胸部目掛けて投げ飛ばした。

「ど、どうすりゃあ……!?!」

いきなり空中に投げ出され、困惑するフーカ。だが、ここまで来たらできることは限られてくるため、すぐに答えが見つかった。

もう後には引き下がれない。フーカは飛ばされながらも可能な限りで姿勢を整えると、まだ使える右拳に全身の魔力を集中させていく。

ギガンテスもさっきのサツキみたく叩き落とそうと右の拳を放つも、フーカの後を追うように跳んできたサツキの蹴りによって拳の軌道をズラされ、逆に突き出した右腕への着地を許してしまう。

「チッ！ 落とせギガンテス！」

「■■■■■■■■——!!」

ついに焦りの表情を見せたバネットが指示を出し、ギガンテスがそれに従って、右腕に乗ったサツキを左手で叩き落とそうとする。が、サツキは「待ってました」と小声で言うと、両足に力を入れてもう一度跳び上がる。

その衝撃でギガンテスの右腕が破損する中、フーカはギガンテスの胸部に到達し、そこへ溜めに溜めた右の拳を突き刺した。

「■■■■■■■■——!!」

しかし当然と言うべきか、全く効かないぞと言わんばかりに雄叫びを上げるギガンテス。

「二人で拳を打ち、ギガンテスを砕く……悪くない作戦だが、一人のうちに落とせば問題ない！」

そう言って称賛するバネットだが、まだ焦りが消えておらず、ギガンテスに指示を出す。

ギガンテスは100m越えの巨大ゴーレムだ。サツキよりも大きく力の劣るフーカの拳ではそう簡単に倒れるどころか、よろめくこともない。

ここで終わらせてやる。今度こそフーカを叩き落とそうと、彼女の真上に置いた左拳を振り上げるギガンテスだったが——

「先に墜ちてろオッ！」

——途中で宙に散らばる破片を踏み台にし、追いついたサツキの左拳が胸部に突き刺さる。

その直後、拳の威力が予想以上に大きかったせいか、とうとうギガンテスの巨体が後ろへよろめいた。

「お、緒方さ——」

「全部だ！ 残ってるもん全部出せ！」

「——お、押忍っ！」

突き出した拳にありつたけの魔力を纏っていくサツキ。フーカも

それに倅い、持てる魔力の全てを拳に乗つけていく。

それでもサツキは魔法の使用という屈辱からか、血が出るほど唇を噛み締める。さっきの狼狽といい、今といい、よほど使いたくないのだろう。

二人を迎撃しようにも、体勢が崩れているせいで動けないギガンテス。内に響く魔力込みの攻撃を食らっているせいか、腕を振るうこともできない。

「うおおおおお！」

「うおおおおお！」

お互いに突き刺した拳でギガンテスの胸部を、ありったけの力で殴りつけるサツキとフーカ。

殴られたことで胸部が破壊され、破片が周囲に散らばっていく。それに加えて体勢を崩し、転倒しそうになるギガンテスだが、ギリギリ持ち堪えてみせた。

サツキとフーカはこの瞬間を好機と判断し、大きな破片を踏み台にして跳び上がると、もう一度ギガンテスの胸部へ向かっていく。

「何が何でも叩き潰せ！ ギガンテス!!」

「■■■■■■——!!」

バネットがなりふり構っていられないと言わんばかりに指示を出すと、ギガンテスは両の拳を握り込み、拳の連打を今日一番の速さで放ってきた。

「おーらよっ！」

「ま、またですかあああ——っ!」

またしても両の拳を合わせると、バレーボールのトスの要領で腕を振り上げ、腕に乗っていたフーカをギガンテスの破損した胸部まで送り届けるサツキ。

フーカが無事に胸部まで到達したのを確認し、サツキは繰り出される拳の連打をかわし、逸らしていく。最後の一発は自らの拳をぶつけ、相殺することに成功する。

サツキが拳の連打を凌いだ頃、飛ばされたフリーカは胸部に到達すると同時に右の拳を、再度ギガンテスの胸部にぶつけた。

「歯あー！」

「食いしばれー！」

フリーカの声にサツキが続き、二人して己の信念が込められた拳を、フリーカは一旦後ろへ引き、サツキは溜めるように構え、それをギガンテスの破損した胸部へ放つ。

「■■□□■■□□■■……!?!」

「ハアアアアア!!」

「ぐううううう!!」

ギガンテスは後ろへ一歩下がると、焦ったのか交差した両腕で胸部をガードする。二人の拳がその巨大な両腕に激突し、魔力を含んだ衝撃波が広がる。拳から血が噴き出そうと、腕にヒビが入るような痛みを覚えようと、二人とも構うことなく力を振り絞る。そして――

「ゴブチ抜けええええ――っ!!」

――サツキの禍々しい赤紫色に輝く拳と、フリーカの綺麗な青色に輝く拳が、ギガンテスをガードの上から暴き打ち砕き、二人の拳から一筋の青い光が放たれた。

「こ、こんなバカな――」

赤紫色の螺旋を纏った青い光は、ギガンテスの強固な巨体をいとも容易く貫き、バネットの絶叫じみた声を掻き消し、ギガンテスの巨体に続いて街を覆うように展開されていた結界も――

――その先にあつた雲さえも、貫いていった。

□

「や、やった……………ここからどうすりやあえんじやあー!？」

ギガンテスの巨体が崩れていき、結果が消滅していく様を見て喜びの声を上げようとしたフーカだったが、自分が飛行魔法を使えないこと、その自分が絶賛落下中であることに気づき、真下を見て絶叫する。

せめてもの抵抗にと、両手足をじたばたさせるも、そんなことで落下速度に変化が生じることもなく、その目に涙を浮かべながら、順調に地面に向かって落ちるフーカ。

もちろんサツキもフーカと同じように落下してはいるものの、慣れているのか全く動じず、血だらけになった左手を押さえていた。

「チツ…………世話が焼けるな」

サツキはそう言うため息をつき、自分達のように落下していたギガンテスの破片を真下から、踏み台にする感じで蹴りつけ、地面に付いた両足で勢いを殺し、一足先に着地する。

「いっつ……………」

その際に全身から感じる痛みで顔をしかめ、立ち眩みでもしたようによろめくサツキ。

が、すぐにいつもの目付きの悪い顔に戻すと、フーカが落ちてくるであろう地点に立ち、さあ来いと言うように両手を広げ――

「うええっ!？」

――落ちてきたフーカを受け止めた。お姫様抱っこになる形で。

「あ、あの……………」

同性が相手とはいえさすがに恥ずかしいのか、今にも湯気が出そうなほど顔を真っ赤にするフーカ。

しかし、サツキはそれを知ってか、あるいは天然か。フーカを抱く逞しい両腕に力を入れ、下ろしてほしそうにじたばたしていた彼女を

押さえ込んだ。

「さて……」

サツキはフーカを下ろすことなく歩き始め、身体の所々が瓦礫に埋まったバネットと、彼の身を案じるアルファを見つけたところで、一息ついて二人の元へ向かっていく。

彼らの周囲にはバネットの部下であろう男達が、救助活動のようなものを行っていた。どうやら瓦礫に埋まった仲間を助けているみたいだ。

自分達の方に来るサツキと、彼女に抱かれたフーカを見たアルファは険しい表情になり、バネットも悔しそうに顔を歪めた。

「……………今更何ですか」

「ギアな」

肩を竦めるサツキを見て、死体蹴りに来たわけではないと判断し、警戒心を薄めるアルファ。

バネットもそれがわかって安心したのか、一息ついてうつすらと笑みを浮かべ、線のように閉ざっていた口を開き、一言だけ呟いた。

「いやー参った参った。……完敗だわ」

バネットがこれ以降、口を開くことは一切なかった。アルファもアルファで、

「人間の底力は怖いですね」

と一言述べ、もう話すことはない完全に口を閉ざした。

「……………そうかよ」

フーカをお姫様抱っこしたまま器用にタバコを取り出し、彼女にお構いなく一服するサツキ。フーカは今の状態が恥ずかしくてたまらないのか、自分を抱いたままタバコを吸うなどは言えなかった。

バネットに完敗と言われたが、勝った覚えはない。むしろアタシは負けたんだ。そう言い返したかったサツキだが、二人の頑固そうな態度を見て出掛かった言葉を喉元で抑える。

自分一人じゃ勝てなかったし、何より自分にとってのタブーを破ったという意味では、完全かつ屈辱的な敗北と言えるだろう。

結果がなくなり、雲も掻き消された青空の下で、サツキは自分の腕



に抱かれ、顔を真っ赤に染めて眠るように黙り込む最大の功労者、フリーカに比較的優しめの視線を向けると、

「お疲れ」

労いの言葉を一言だけ述べ、戦いの終わりを実感するように青天を見上げた。

□

『今回の事件の首謀者である、元管理局員のバネット・フライヤーは黙認を——』

翌日。次元船内にて、隣で睡眠を取るサツキを尻目に、フリーカはラジオで臨時ニュースを聞いていた。

あれから厄介な連中——管理局勢の気配を感じたサツキは、フリーカをお姫様抱っこしたまま、目にも止まらぬ速さで工場地帯——だった場所から離脱した結果、管理局には見つからずに済んだ。

だが、市民に目撃された魔力光と使用者の人物像から、『この街に緒方サツキがいる』という噂が広がり始めたのだ。それを聞いたフリーカは焦ったが、そうなることを予想していたサツキの行動の早さには驚かされた。

その噂を直接耳にしたわけでもないのに、すぐさま噂が広がる前に次元船に乗り、ミッドチルダへ帰還することを決めたのだ。

それからは市民に素顔を見られないよう、サツキはサンングラスで、フリーカはキャップ帽で顔を隠し、ビルからビルへと飛び移るという方法を、跳べないフリーカを米俵のように担ぎながら実行。無事に次元港へ辿り着き、今に至る。

ちなみにさつきラジオで流れていたように、黒幕であるバネットと

その配下の立場にあったアルファは、あの後程なくして管理局に確保された。体力を消耗し切っていたこともあつてか、二人とも抵抗する素振りすら見せなかつたらしい。

屍兵器の一人であり、その中で唯一の生き残りであるアルファは、本人の対応次第でかつての戦闘機人と同様の処置を取ることもできたらしいが、捜査に非協力的だったため、そうはならなかつた。

なお、今のところ黙認しているバネットだが、いつ自分達のことをバラシてしまうかわからない。それが現時点における、フーカにとつての不安要素だつた。

「……………」

ラジオの音量を落とすし、大きな音を立てないよう、チラリと眠っているサツキへ視線を向ける。

あの後、全身に相当なガタが来たらしく、両腕には包帯が巻かれ、切り傷や火傷の痕があつた右頬にはガーゼが貼られており、精神的な疲労も凄まじかつたのか、次元船に乗って席に座つた途端、スイッチが切れたかのように眠りについたので。

それでも周囲を警戒しているのか、起きてすぐに戦えるような姿勢で眠っている。どんな時でも警戒を怠らなくなつたのはさすがである。

一方でサツキほど大きなダメージは受けなかつたフーカだが、両手には包帯が巻かれており、切り傷の残つた左頬と右腕と右脚にはガーゼが貼られていた。

サツキよりかはマシというだけで、フーカもフーカなりにダメージは受けていたのだ。とはいっても全身に受けたわけではないので、本人にそこまでの実感はないが。

「そーゆやあ……………」

ハツと何かを思い出し、リュックの中を漁るフーカ。そしてお目当ての物を見つけ、コソコソとした動きで取り出す。

「これ、向こうに着いたらどうしようかのお……………」

その手に持っていたのは、事件当日に拾つた、赤いゴーグルだつた。あれからもずっと付けていたことを、離脱した際にサツキに指摘され

るまですっかり忘れていたのだ。

このゴーグルは最初にサツキが遭遇したロボットが装着していたもので、本来なら現場に置いてくるべき代物だったのだが、そのタイミングを完全になくしてしまったフリーカは、後ろめたさを感じながらもリュックの中へ隠すことにした。

それに加え、今のようになんかどうしようかと考えているうちにここまで持ってきてしまったので、とりあえず向こうへ持って帰ることになっている。処分するかどうかはその後に自分で決める。

「へへ……」

よほど気に入っているようで、フリーカはゴーグルを装着すると、自分の姿が映っている窓を見て、にへらと口元を緩ませる。

その直後、すぐに凜とした表情になると、掛けていたゴーグルをリュックに仕舞い、静かに寝息を立てて眠るサツキを見て、自分も眠ろうと椅子にもたれ掛かる。そして目を閉じる前に、一言だけ告げる。

「——お疲れ様でした」

あの時サツキが掛けてくれた、労いの言葉と同じもの。フリーカはその時のことを思い出して嬉しそうに微笑むと、そのまま目を閉じて眠りの扉を開くのだった。

### 第三章 「百発百中の散弾」 第21話 「スパルタ」

「ふう……そろそろ止まってもらわないと困るな」

ミッドチルダ南東部に位置する、小さな都市の路地裏にて。一人の少女がライフルのような銃を構え、ビルの高層階にある窓から一人の男性を狙っていた。

男性は自分が狙われていることには全く気づいておらず、少女から見れば動物的でしかない。

黒の短髪に白のメッシュが入った少女は迷うことなく引き金に指を掛け、男性の頭部に照準を定める。そして――

――引き金を引いた。

独特の発砲音と共に銃口から、人間の頭部くらいの大きさの魔力弾が撃ち出され、軌道を変えぬまま途中で拡散して小さな魔力弾となり、射出された直後の速度を保ったまま男性に迫る。

今の銃声で自分の状況に気づいたらしく、男性はその場から逃げようとするも、一歩動いたところで拡散した弾の一つに頭部を貫通され、他の弾も男性の肩、首、膝、腹部、胸部を貫いた。

弾丸で空けられた穴から血が流れ出し、力なく倒れる男性。少女はそれを銃のスコープ越しに確認し、通信端末を取り出す。

「……私だ。依頼は成功したぞ」

たった一言。その一言だけ告げると通信を切り、その場から音を立てずに離れる少女。

彼女は人を殺すことを仕事としている、いわゆる殺し屋というものだ。今回も『組織の反乱分子を殺してほしい』という依頼を、少女とのコンタクト方法でもあるメールから受けたに過ぎない。

「むっ、もう次の依頼か」

振動する通信端末を再び取り出し、届いたメールの内容を確認する

少女。どうやら休む暇はなさそうだ。

少女は端末をポケットに仕舞うと、依頼を執行するべく次の目的地へ向かった。

少女の名はランナー。

通り名——『魔の散弾』。

□

「緒方さん」

「ああ？」

雲一つない良い天気となったある日。サツキとフーカはミッドチルダ北東部にある小さなアパートという拠点で、フーカにとっては数少ない休日をのんびりと過ごしていた。

胡坐を掻きながらタバコを吸い、暇潰しに空き缶を粉々になるまで握り込んでいたサツキは、リモコンでテレビのチャンネルを変えるフーカに呼ばれて、めんどくさそうに視線だけをフーカに向ける。

「たまにゃあ外食とかしてみませんか？」

「お前アタシの現状わかって言ってるのかゴラ」

そう言いながら、サツキは軽く舌打ちをした。その顔には火傷と切り傷の痕が残っており、フーカが初めて出会った時よりも痛々しく、勇ましくなっているようにも見える。

フーカは下手に外出できず、喧嘩もできないので体が動かせないという一種の軟禁状態にあるサツキを見て、そうなった理由について振り返っていく。

サハラツタで起きた大事件から一ヶ月。サツキとフーカを巻き込み、相応の死者も出したあの事件を機に、時空管理局がようやく本格

的なサハラツタの現地調査を開始。

その調査により、サツキが利用していた裏の商店街も、黒幕が秘密裏にしていた実験場も、治安が非常に悪い一部の地方も、全て制圧されたのは想像に難くないだろう。

フーカはその時の戦いで左手の骨にヒビが入り、右手も酷く痛んでしまったが、幸いにもそれ以上には至らなかった。精々切り傷をいくつか負わされたくらいである。

だが、サツキはその限りではなかった。腹部の傷が癒えぬまま戦いに身を投じた結果、治りつつあった怪我が悪化してしまい、左腕と左脚の骨にもヒビが入ってしまった。

しかもそれを差し引いても、睡眠不足による疲労が重なり、火傷や切り傷などの小さな怪我也未だに治っていないという状態にある。

そして何より、サツキは現在進行形で失踪中の身だ。元々下手に表へ出るのは難しかったというのに、その時負った怪我のせいで表へ出ることがさらに困難になったのだ。

……尤も、サツキ自身は自分の置かれた状況をあまり気にしていないのか、タバコや酒目的でたまに外出していたりする。ある時は顔の傷が増えていたこともあるので、おそらくその辺のチンピラ達と喧嘩もしているだろう。

「そうは言っても緒方さん、あんた普通に外出しとるでしょうが」

「うっせ。ケンカもできねえってのに、タバコも酒もなしに生きていくのか」

言っていることがダメ人間のそれである。フーカは呆れて大きくため息をつくとき、サツキがさらっと言った嘘を指摘する。

「ケンカできんって……いつつもんようにケンカしとるじやろ……」

「アホか。小競り合いなんざケンカの内に入らねえんだよ」

小競り合いと喧嘩の何が違うのだろうか。サツキの影響で少しは賢くなったフーカだが、それでもサツキの言うことが時々わからない。

この手のやつはイチイチ言及しても無駄なので、冷蔵庫から水を取

り出し、コップに注いでいくフリーカ。

サツキは吸っていたタバコを灰皿に押し付けると、のっそりと立ち上がってハンガーに掛けてあったパーカーを着始めた。

「お、緒方さん？」

「あん？」

「まさかたあ思いますが……」

「そのまさかよ」

どう見ても外出する気満々である。しかも天気の良い昼間なのに。夜ならまだしも、明るいうちに外出するのは見つけてくださいと言っているようなものだ。

「だ、ダメですよ。夜になるまで大人しててつかあさい」

「シバくぞコノヤロー」

フリーカの口調がふざけたものに聞こえたのか、イラつとしたサツキは右の拳を握り込むも、まだ傷が癒えていないことを思い出してすぐさま拳を解く。

さすがに怪我が悪化している今、どんなに軽めだろうと無駄な力は使わない方が良く判断したのだ。この場合、こういう力はここぞという時まで保存しておくものである。

「チツ、これでいいだろ」

「……………またそれですか？」

サツキが身に付けたものを見て、またしても呆れ返るフリーカ。

それもそのはず。今サツキが身に付けたのはサングラスとキャツプ帽。初詣に行った時と全く同じ変装である。マスクがないだけマシとはいえ、背の高い不審者にしか見えないのだ。

内心でそう思うフリーカを意に介さず、玄関で靴を履くサツキ。普段なら体を張ってでも止めるところだが、サツキは一応、一応怪我人だ。なので止めようとはせず、

「あつ、わしも行きますっ」

自分もサツキについていく。そうしないとサツキが何をしでかすかわからないからだ。……自分がいたところで、それを止めるのは無理だろうが。

□

「うぼお!」

鳩尾に鋭い拳を打ち込まれ、血を吐きながら悶絶する男。拳を入れた張本人であるサツキは倒れた男には目も暮れず、男の上着ポケットに手を突っ込んでタバコとライターを奪い取る。

続いて男の財布を手に取り、現金だけを奪って空になった財布をやや乱暴に投げ捨てる。以前、金に纏わるトラブルに巻き込まれたというのに、全く懲りていないようだ。

男は呻き声を上げながらも犯人の顔を見ようとしたものの、顔を上げたところで鼻っ面を踏みつけられ、犯人の顔を見ることは叶わなかった。

「うっし、こんなもんか」

路地裏を後にしつつ、タバコを吸いながら袋の中身を確認するサツキ。そこに入っているのは、さっきの男も含むチンピラ共から奪取したタバコの箱と缶ビールだ。

外見こそ子供には見えないサツキだが、実際の年齢は16歳。れっきとした未成年のため、コンビニなどでタバコやビールを直接購入することは法的にできない。なので今回のように、普段はそれらを持つているチンピラ達から奪取している。

酒に関しては自販機で買うこともあるが、比較的安いとはいえお金が掛かるので、意外と計画性のあるサツキにとっては何気に苦しい選択でもあるのだ。

「そろそろやめませんか? そげなやつちもないこと」

本当にここまでついてきたフーカがいつものように注意してくるも、サツキはフーカに視線すら向けずに足を進めていく。

一応は『先生と弟子』という関係となっているこの二人だが、サハラツタでサツキが『先生らしい教育はしない』と決意しているせいで、



第三者から見れば全く別の関係に見えてしまっている。

だが、それはあくまで第三者から見た二人の関係。サツキにとっては今の状況が普通であり、フーカもそれを何となくではあるが理解している。

「どうだレヴェントン。全然バレてねえだろ」

「そりゃ人がおらんけえのう……」

フーカの言う通り、今二人がいる場所は街の中でも人気が最も少ない地域であり、かつ路地裏である。そのため人らしい人もサツキがボコボコにしたチンピラくらいしかいない。

サツキはもう慣れていたので何とも思わないが、フーカはサツキのせいでロクな人間を見ていないため、そろそろ一般人の姿を見たいと思っていた。

家賃のためにバイトをし、その過程で一般人を見てはいるフーカだが、休日になるとこの有様である。最初は困惑していたものの、今ではすっかり慣れてしまい、無駄に度胸もついでしまった。

かつて自分の隣を歩いたパートナーを思い出し、その少女よりも高いフーカの順応性に内心目を見張りながらも、サツキはその事を決して口には出さないようにしていた。

自分よりも格下の少女を認めるのが癪だというのもあるが、自分が認めたことでフーカが調子に乗らないようにするためというのが一番の理由であり、サツキなりの教育方針でもある。

そういったサツキだけの事情もあり、フーカはちやんと褒められたことがない。それでもめげることなく、サツキについていく姿は非常に健全なものであった。

「そんじゃ、帰るか——」

「あ、あのっー」

いつものようにビルの屋上という独自のルートで帰ろうとしたサツキを、慌てて引き止めるフーカ。

今まさにジャンプしようとしていたところを止められ、不機嫌そうにため息をつくも、サツキはフーカの言い分を聞くことにした。

「……なんだ」

「たまにやあ普通に帰りませんか？」

普通に帰る。それはビルからビルへ飛び移って帰るのではなく、歩いて帰ることを意味していた。

サツキは大勢の人に自分の姿を見られるというリスクを考え、基本的に地上ではなく上からのルートを使用している。なのでお願いしたフーカも断られると思っていたのだが……。

「……今回だけな」

さつきまでのお返しと言わんばかりに呆れた声でそう言うと、左手に持つタバコを一口吸い、拠点のアパートがある方向へ歩き始めるサツキ。その姿は、我が儘を言う子供に付き合う大人のようなのだ。

まさか了承されるとは思っておらず、少し驚いた表情になっていたフーカだが、置いていかれまいとすぐにサツキの後をついていく。

「別に驚くことアねえだろ。アタシだって人間なんだ。こういう時もあるさ」

そうは言うサツキだが、フーカのお願いを聞いたのはある事を確かめるためだった。それには一般人の会話を聞く必要があるのだ。

少し早足で歩いていると、ようやくまともな通行人が目に入り、思わず表情が緩みそうになるも、またサツキに殴られると思つてすぐに気を引き締めた顔になるフーカ。

『オイ聞いたか？ 南東部でまた一人やられたって話だぜ』

『ああ。それも同じ手口だったらしいな。全身穴だらけだったとか』

『本当にいるのかもしれないな、魔の散弾』

久しぶりに緊張気味のフーカをよそに、通行人の会話に耳を傾けるサツキ。その顔は珍しく真剣そのものだった。

今通行人が話していた、*“魔の散弾”*——ランナーに関する噂。それがサツキの確かめたかったことだ。噂を確かめるだけでも、推測ながら相手の動向を調べることができる。サツキはそう判断したのだ。

いざとなれば前に情報屋から聞き出したコンタクト方法で本人を呼び出すことができるが、サツキはまだ傷が癒えていないため、今呼

び出してあつさりど殺されてしまう可能性が高い。

なので戦える程度まで傷を癒したところでランナーを呼び出し、この手でブチのめす。それが今のサツキが考える、効率重視の作戦だ。……本当に効率が良いのかは怪しいが。

「……………なるほど」

今の話が本当なら、ランナーはミッド南東部にいる可能性がある。対してサツキとフーカが拠点を構えているのは、ミッド北東部。両者は完全に真逆の位置にいることになる。

「よし、もういいだろ」

「えっ？ な、何が——」

何がもういいんだ。そう聞こうとしたところで、サツキに担がれ、そのまま建物の陰に連れ込まれるフーカ。

担がれた時点で嫌な予感しかしない。慌てることなくサツキをジト目で睨んでいると、

「よつと」

サツキが跳び上がった。これもフーカにとっては見慣れた光景である。

ビルの屋上に立つと、肉眼で数キロ先までの様子を確認するサツキ。人があまり来ない屋上で、そこまで警戒する必要があるのだろうか。

担いでいたフーカを下ろすと、サツキは冗談にしか聞こえないことを口にした。

「向こうのビルまで跳んでみる」

「はっ？」

本当に何を言っているのかわからない。フーカの間抜けそうな顔は、そう訴えているようにも見えた。

確かに以前、自分もサツキのように跳んで移動してみたいとは思っていた。だからといって、いきなり実践はどうかと思う。こういうのは普通、口頭や文による説明から始めるのが常識だろう。

さすがに無茶だとサツキに抗議しようとするも、お前の意見を聞く気はないと言わんばかりに、一人先に隣のビルへ飛び移るサツキ。無

理なら置いていく。そんな意志がビンビンと伝わってきた。

「大きな声は出すんじゃないぞ。下の奴らに見つかるよと面倒だからな」

その前にまず跳び方を教えろ。敬語や相手がサツキであることも忘れてそう言いかけるも、言ったところで置いて行かれるだけだと悟り、グツと堪えるフーカ。

「うっ……」

高所恐怖症というわけではないが、あまり見ることもないビルの下を見てたじろぐフーカ。サツキに担がれたり、戦いの際にビルよりも高く跳んだときは目先のことに集中していたこともあって、あまり意識していなかったが、冷静になってみるとそれなりの高所にいたことを痛感させられる。

説明もなしにいきなり跳ばされるということもあり、膝もガクガクと震えている。見たところ、高さは三十メートルほど。落ちたら死にはしなくとも、上手く着地しないと大怪我は免れない高さだ。

「殴りたい……」

サツキのことは尊敬しているし、自分なりに敬意も払っているつもりだ。それでもこの扱いはあんまりなので、普段なら決して口にする事のない言葉を思わず使ってしまう。

……ちなみに今の発言、聴覚にも異常に優れたサツキにはしっかりと聞こえていたりする。

「い、いくぞ……」

自分のいるビルからサツキのいるビルまでの距離は約十メートル。魔力で肉体を強化すれば十分に跳べる距離だが、その間には三十メートルもの深い溝がある。普通に跳ぶと力加減を間違えて落ちてしまう可能性もある。

フーカは腹を括ると、下半身を魔力で強化し、

「とうっ！」

助走を付け全力で跳び上がった。

体が物凄い浮遊感に襲われるも、決して下を見ようとはしないフーカ。というのも、ここで着地点以外のものを見ると着地に失敗するか

もしれないので、一時も目を離すことは許されないのだ。

隣のビルまであと少し。フーカはそのまま着地できると思ってた。地/body勢に入る。

「わわ——っ！」

が、そのあと少しというところでビルには届かず、そのまま落下し始めるフーカ。

ここで落ちると病院のベッドへ行くはめになる。そうなればサツキは一人になるため、何をするか本当にわからない。それだけは嫌だ。

フーカは咄嗟に手を伸ばし、ギリギリながらもビルの淵に手を掛けた。

「くうう……!!」

そしてすぐさま掛けた手に魔力を集中させ、どうにかビルの屋上へ登ることに成功し、その場で仰向けになるフーカ。

サツキはそんなフーカの姿を見届けると、呑気に新しいタバコで一服し始めた。もちろん、労いの言葉すら掛けることなく。これくらい成功して当然だと、言わんばかりに。

「その調子ならあと二、三回は跳べるな？ いや、跳べ」

「いやいや、さすがにそりゃあ——」

「アタシを殴りたいんだろ？ だったら跳んでみるよ」

先ほどの愚痴を聞かれていたことに気づき、ギョツとするフーカ。久しぶりの大失態である。

口内に溜まった痰を唾に混ぜて吐き捨てると、サツキはバテバテのフーカを置いて次のビルへ飛び移り始めた。怪我をしているとは思えないほど、軽々と。

フーカは仰向けになったまま離れていくサツキの背中を見て、一言呟いた。

「……………これがスパルタっちゅうやつか」

□

「あ、脚が……!」

「あと三分で起きろよ。自分で飯を作りたいつて言ったのはテメエだろうが」

その日の夜。両脚が筋肉痛で動けず、今にも死にそうな感じで俯せになっているフーカを見て、呆れた表情になるサツキ。

こうなったのはサツキのせいだが、フーカもフーカで拒否は一切しなかったので、そういう意味ではフーカの自業自得とも言える。

「せ、せめてあと五分——ぐえ!」

「もういい。寝てろ」

時間がもつたいたいと判断したのか、フーカの後頭部を軽く踏みつけ、台所に向かうサツキ。

これまではサツキが料理を担当していたのだが、最近になってフーカが『自分も作りたい』と申し出てきたのだ。

その申し出を一応了承したサツキではあるが、料理経験がなく、その手の知識にも疎いフーカの指導はもう大変なものだった。

包丁の持ち方が微妙に違う、材料を入れる順番を間違える、調味料の区別がつかない等々。幸いにも変なものを入れたり、独断行動を起こしたりはしなかったもので、そこまで酷いものにはならなかった。

ただ、フーカは飲み込みというものが早かった。今でもまだちゃんとした料理は作れないものの、調理器具の使い方、調味料の区別はある程度できるようになっている。

当然、フーカが少しでも失敗したときには拳骨を食らわせており、褒めるようなこともしていない。

「今日は……今日もカレーでいいか」

冷蔵庫からカレーを取り出し、まな板に置いたニンジンを用に切っていく。味はともかく、これでも一般的な料理は大体作れたりする。

ニンジンを切り終わり、ジャガイモの皮を剥いたところで、ある事について振り返る。

「……南東にランナーか……」

前に自分をもう一人の殺し屋・アシングと殺そうとした、スナイパー。この一ヶ月、サツキはランナーの居場所を探っていたが、今日になってようやく手掛かりを掴むことができた。

今日の噂が正しければ、ランナーはミッドチルダの南東部にいる。すでに移動した可能性もあるが、それも想定済みだ。

口元を三日月のように歪めると、サツキは一旦手を止めて俯せになっっているフリーカを強引に起こし、そのまま台所へと連行した。

「うえ？」

「オラ、昨日の続きだ。昨日はここでギブアップしたよなア？」

やらなきやぶん殴る。そんな意志が込められたサツキの目を見て、フリーカは諦めたように乾いた笑みを浮かべるしかなかった。

## 第22話 「目指せ南東部」

「緒方さんって放浪癖持ったりしますよね？」

「いきなり何だクソガキ」

筋肉痛で動けないフリーカを米俵のように担ぎ、ビルからビルへ飛び移っていくサツキ。間違ってもおんぶや肩車はしない。

フリーカはそんな姿勢のまま、自分の分の日常用品が入ったりリュックを両手で落とさないよう懸命に持つ。本当ならサツキの分も入れていたはずなのだが、サツキ自身がそれを拒否した。

何でも野宿に慣れた自分はそのようなものを持つていく必要がないらしく、自然にあるものだけで何とか生活はできるとのこと。

「それを持つてるのは黒髪のツインテールだ。アタシは持つてねえ」

「黒髪？ ツインテール？」

黒髪のツインテール。誰かの特徴を言っているのだろうか、それだけを言われて誰が悪く言われているのかわかるフリーカではない。

この現在進行形で悪く言われている相手、サツキにとっては少し前までかなりの因縁があった相手なのだが、サツキ自身がそれを言うてくれるほど口が軽くないのだ。

「やっぱし戻りませんか？ その体で行くなあさすがに無茶じゃと思うんですが……」

「だったらわざわざ』ついてくる』なんてほざくんじゃねえよ。ブチ殺すぞ」

跳んでいる最中だからか、声に殺気を含ませるサツキ。フリーカはフリーカなりにサツキの体の心配をしているのだが、基本的に目先の目標を優先するサツキにはこれっぽっちも響かない。

というかさすがのサツキでもその点は一応自覚しているため、フリーカの忠告は何の意味もない。サツキからすれば耳障りなだけである。

サツキとフリーカは今、拠点のあるミッド北東部を離れて南東部へ向かっており、その途中にある中央区画の都市を上ルートから通過している。理由は言うまでもなく「魔の散弾」ことランナーの搜索だ。



とはいえ、出会っていきなり戦闘は体調的に無理があるので、最低でも本人と接触するのが今回の目的。だからといって戦う気がないと言われるとそうでもなく、いざという時は戦うという可能性ももちろんと視野に入れている。

なのでわざわざ遠征する必要はないのだが、フーカを冒険に出したい——フーカにできるだけ実践経験を積ませたいサツキは、あえて遠征するという選択をした。そうすればフーカもついてくる。そう思ったからだ。

「いやいや、ちいたあ自分の体の心配もした方がええかと思うんじゃないけど……」

「そういうお前はバイトどうなんだよ？　またクビになつたらしいが」

「うぐぐつ」

サツキの言う通り、フーカは二日前に接客のバイトをクビになっている。その原因は客とのトラブルだ。

質の悪い客を成敗したところ、その客が仲間を連れて仕返しにやって来たので、フーカ自ら返り討ちにするべく単身で突っ込んだのだ。しかもこのパターン、フーカ自身は何度か経験していたりする。

「まア、別に良いけどな。困るのはお前だし」  
「うぐぐつ」

全部その通りであるため何も言い返せず、何気なく言い放たれたサツキの言葉が棘となり、フーカの心に突き刺さっていく。

フーカが言葉という棘に苦しめられていると、サツキが何かを見つけて立ち止まった。

「……居酒屋か」

「緒方さん——!?!」

サツキが一言呟いた瞬間、フーカの体をガクンと大きな揺さぶりが襲った。一瞬とはいえあまりにも唐突な揺れに思わず気分が悪くなり、吐き気がして口を押さえるフーカ。それでも手に持つリュックは離さない。

そんなフーカを気遣ってか、もしくは嘔吐されると面倒だからか。サツキは空いている左の指をビルの壁に食い込ませ、落下速度を緩めた。

「食い込んだ指で壁が削れていき、削られる度にガリガリと大きな音を立てていく。」

「つと。よし、目え開けろ」

両足が破砕音と共に地面につき、無事に着地できたことを確認し、両目を閉じてそれを両腕で隠していたフーカに呼び掛ける。

「も、もう降ってかんか……う？」

先ほどからビルの小さな破片が、上を見た自分の顔にパラパラと降ってきたので目を瞑っていたフーカは、顔を擦りながら目を開く。

サツキはそんなフーカを見てため息をつき、いつの間にか取り出したタバコを一口吸い、吐いた紫煙が生物のようにうねる感じで立ち昇っていく。

「行くぞレヴェントン」

「えっ、どこに——」

「あそこだ」

路地裏から普通の歩道に出て遠くを指差すサツキだが、視力が常人並みのフーカにはサツキが指差す先が全く見えない。

というのも、サツキが見ている目的のものは二、三キロ先にあるからだ。しかも建造物が邪魔になっていて、余計に見えない。

フーカがサツキにどこを指差しているのか聞こうとしたところで、二人のものではない第三者の声が入ってきた。

「おいお嬢さんたち」

「……あ？」

「えっ？」

二人揃って後ろを振り向くと、大柄な男性を筆頭に、四人の男が立っていた。サツキは一切動じることなく、フーカも見慣れたと言いたげにため息をつく。

男達はそんな二人の態度に少し苛立つも、落ち着くように一息つくのと、カツコつけて立てた親指である方向を指した。

「よくも人様の事務所に傷をつけてくれたな」

そう言つて先頭に立つ男が指差した先には、これ以上には、これ以上には、ハッキリと残る、つい先ほどサツキが落下速度を緩めるために食い込ませた指の痕があった。

「ええ……あれくらい別に良いだろ」

「いや、普通にいけんと思います」

本当に自分以外のことはどうでも良さげなサツキに、しっかりとツツコミを入れるフーカ。

自分がすっかりしていないと、この人が今よりもダメになる。そんな、サツキのかつてのパートナーと同じような思いを抱き、その決意を強めながら。

しょうがねえ、と一口吸ったタバコを足下に投げ捨て、フーカに「待つてろ」と一声掛けると、男達を誘導しながら路地裏へ引き返すサツキ。フーカはその背中を見て、一言呟く。

「あれで暴力的じゃなけりゃあのお……」

サツキという人間の欠点。その一つに『やたらと手が出る』というものがある。ヤンキーは基本的に拳による語り合いを好んでいるが、それを差し引いてもサツキのそれはやり過ぎな面がある。性格もとことんダメなサツキだが、それ以上にこの欠点の方が印象に残るだろう。

普通の人間なら言葉で相手を宥めたり叱ったりするものだが、サツキの場合は話し合いじゃ解決できない問題にばかり巻き込まれているため、実力行使による解決を選ぶようになった。日常的な暴力が多いのもこれが原因である。

もちろん、こんな事実をフーカが知るよしもない。ましてやだからと言つて見過ごして良いわけでもない。本来なら止めるべきだろう。

路地裏に行ったサツキに代わり、まだ火のついたタバコを踏み潰すフーカ。路地裏の方からは微かにだが、鋭い打撃音が聞こえてくる。これも今では聞き慣れたものだ。

あまりにも暇なのでリュックの中身を確認していると、顔に返り血を浴びたサツキが、痰の混ざった唾を吐き捨てながら戻ってきた。

——その際、一瞬だけ顔を歪めて。

フーカはその一瞬を見逃さなかったが、口に出すようなことはしない。今ここで出してもはぐらかされるか、意に介してもらえないかの二択になってしまふからだ。

「……終わっただんですか？」

「ああ。そんじゃ行くぞ」

「じゃけん、どこに——」

フーカの言葉を遮るように、顔の血を拭きつつ足を進めるサツキ。先ほど指を差した方角にどうしても行きたいところがある。それはフーカにもわかっていた。

サツキがどこに向かっているのかはサツパリだが、足を動かさないと置いて行かれるので、急いでサツキの後に続くフーカ。リュックから取り出したボトルの水を一口飲み、口元を腕で拭く。

いい加減どこに行こうとしているのか教えてもらいたいフーカだが、サツキはついさつき『居酒屋』と言っていたので、何らかの店に向かっていることもわかっていいる。問題はその店がどんな所であるかだ。

「おい、金はどれだけあるんだ？」

「え、えつと……」

リュックから財布を取り出し、手に持っていたボトルを入れ替えるように仕舞うフーカ。そのまま財布を開き、中にあるお札と小銭の数を数えていく。今から行くお店でお金を使うのかと、少し軽い気持ちで。

「——これくらい、かのう」

そして数え終えたフーカは、財布の中身をサツキに見せながら大体の額を口にした。自分じやまず手に入れられないような数の、お札と小銭を見せながら。

「よし、なら大丈夫だな」

今にもタバコを吸いたそうに手をポケットに入れ、止めていた足を

再び動かすサツキ。さすがに我慢は出来るようだ。

フーカも小さな音で鳴ったお腹を押さえながら、ご飯があることを願いつつサツキについていく。お腹が鳴ったことで恥ずかしくなり、誰にも見られないよう顔を赤く染める。

このとき一瞬だけフーカの目に映ったサツキの顔は、まるで何かを懐かしむように穏やかだった。

□

「おし、どうにか着けたな」

「警邏隊に追いかけられたときやあどうなるかと思いましたがよ……」

街の外れにある小さな屋台の前で立ち止まり、安堵の表情を浮かべるフーカと、周囲を警戒するサツキ。

居酒屋を目指して街中を歩いていたところ、二人の前を歩いていた女性がひったくりに遭い、そのまま犯人が二人に向かってきたのだ。

それをサツキが轢き返すように返り討ちにしてしまい、ちょうど駆け付けた警邏隊に目をつけられたので、ここまで逃げてきて今に至る。その途中でビルの屋上や下水道といったルートも利用しており、後者に関してはフーカにとって未知の体験となった。

「うええ……ぶち臭うんじゃないけど……」

体中の臭いを嗅ぎ、思わず顔を歪めるフーカ。そういうところはあまり気にしていないと思っていたが、さすがのフーカも女性として最低限の部分は気にしていたようだ。

一方でフーカと同じように、体中から下水道の悪臭がするサツキだが、こちらは全く意に介しておらず、周囲に敵がないことを確認し、屋台の席についた。

「らっしやい嬢ちゃん。二人でいいかい？」

「ああ。コイツは未成年だからその辺頼むわ」

「あいよっ」

気前の良さそうな中年の男性店主に軽く微笑み、フーカの配慮をするサツキ。席についたフーカはサツキの顔を見て、何か新鮮なものを見ている気分になった。

「それにしても随分と臭うねえ。ゴミ捨て場にでも行つてたのか？」

「そ、それは……」

「訳あって下水道を通つたんだよ」

お前何を言っているんだバカタレ。そう言いたげにフーカが振り向くも、店主は笑うだけで深く言及はしてこなかった。

店主の反応にフーカがポカンとする中、サツキは店主に出された徳利という酒器を手に取り、盃に酒を注いでいき、それをグイッと飲んだ。

その飲みっぷりを店主が称賛し、どこか照れ臭そうに再度盃に酒を注いでいくサツキ。普段の生活では絶対に見られないサツキの一面が、そこにはあった。

「これ、小っちゃい嬢ちゃんの分ね」

「あつ、どうも……」

フーカには水とお茶の入った容器が一つずつと、それぞれの皿に入ったサラダと焼き鳥が出された。それもフーカの食欲が配慮されているかのように、同じものを出されたサツキよりも多めのものを。

「こんな店に子供が来ること自体珍しいからねえ。サービスつてやつさ」

「ありがとうございます……!」

フーカが大食いだとは知らない店主の気前の良さに感謝し、美味しそうな料理に目を輝かせながら、いつものペースで口にしていくフーカ。

その隣ではフーカとは対照的に、量が少なめの料理を口に運んでいき、盃に注いだ酒を飲んでほっこりとした顔になるサツキ。その好きなものに夢中になる姿は、まさに年相応の少女そのものであった。

「レヴェントン」

「は、はいっ」

焼き鳥を食べつつコツソリとサツキを覗き見していたところで、い

きなりそのサツキに呼ばれて喉を詰まらせそうになるフーカ。すぐに水を飲んで詰まったものを流し込んだ。

「これにテメエの分を注げ」

そう言つてサツキが差し出してきたのは、当人が今も使っている盃だった。

「あの、わしは——」

「水で良いから注げ。酒なんか飲ませたらアタシが怒られるわ」

本来なら注ぐべきは酒なのだが、生憎フーカは未成年だ。すでに未成年の飲酒や喫煙という違反に浸かっているサツキとは異なり、フーカはこういうことには疎いため、少しくらいなら大丈夫だろうと判断したので。

「安心しな小つちやい嬢ちゃん。おつきな嬢ちゃんがそういうことした時は俺が止めるからよ」

「まア、そういうことだ」

店主に念押し of 釘を刺され、気まずそうにそっぽを向くという、いつもなら絶対にならない反応を見せるサツキ。今日はサツキの意外な面を見てばかりである。

とはいえ、言い返さないのは酒を飲んで上機嫌なだけでなく、ここで突っ掛かればさっきのようにまた警邏隊に追いかけられるかもしれないからだ。

言われた通りに水を盃に注いでいき、零さないよう慎重に持つフーカ。サツキはそれを見て頷くと、自身もまた酒の入った盃を持った。

「あー、こっからどうしようか……」

「??」

自分から目を逸らして何かを呟くサツキを見て、首を傾げるフーカ。

今から行うのは杯事という、血縁のない人間関係を確認し、強固にするための行事なのだが、本来ならここで形成するのは『兄弟や親子などの家族を模した関係』である。

しかし、サツキの目的は『先生と弟子』という関係の強固であり、間違つても家族を模した関係ではない。さらにフーカの盃に注がれて

いるのは水。詳しい人が見れば死に別れが予測される場面で行われる、水杯という行事と勘違いしてしまう可能性がある。

ただ、この場にいるのは店主と二人の少女——サツキとフーカだけ。今回はその可能性の心配をする必要がない。フーカには本当のことを教えなければ何の問題もないのだ。

「はア……おっさん。このこと誰にも言うなよ」

「はははっ、ここだけの秘密ってやつかい」

何故か嬉しそうに笑う店主だったが、サツキのお願いそのものは快く承諾してくれた。

その対応に満足したのか、サツキは再びフーカと向き合い、盃を持った手をフーカに向かって突き出す。

「……乾杯は知ってるか？」

「い、一応……」

「それと同じだ」

サツキがそう言うと、フーカも少しおずおずとしながら、水の入った盃を持った手をサツキに向かって突き出した。

店主が暖かい目で見守る中、サツキはこれから慣れないことを始めるように口を開く。

「い……今からやるのは杯事っていう、大事なことだ」

「サカ、ズキ……？」

お前にわかりやすく言うと儀式のようなもんだ、と簡潔に説明を済ませるサツキ。説明するのが面倒でどこか逃げているようにも思える。

やはりと言うべきか、フーカは杯事を知らないようだ。なら都合が良い。不本意ながらも、それでも悪くないと言った感じの表情で続ける。

実のところ、サツキが本当に杯事をしたかった相手はかつてのパートナーだったりする。だけど、フーカとやるのも別に嫌ではないのだ。

……それでも不満点を上げるとすれば、まだ日が沈んでいないという点にある。こういうのは満月の夜にやった方が良好い雰囲気を出せ



る。サツキはそう思っていた。

「そうだ。これをやることでアタシとお前の関係を強固なものにする。まア、さつきも言ったが乾杯と同じようにやるぞ」

「お、押忍っ」

初めてのことで緊張気味のフーカが持つ盃に、サツキが手慣れたように自分の盃を合わせた。

沈みゆく夕日をバックに、何の変哲もない小さな屋台で、サツキとフーカの間——杯が、交わされた。

## 第23話「接触」

「この辺りでいいか」

「……お、緒方さん？」

「ちやうど雨宿りもできるしな」

「緒方さん？」

杯を交わしてから二時間後。サツキとフーカはミッドチルダ南東部に到着し、街の外れにあつた森の中を彷徨っていた。

一人フーカが心の底から夢であつてほしいと言わんばかりの表情で口を開くも、サツキはそれを気にすることなく樹上を見回していき

「今日はこちらで一晩過ごすぞ」

「嘘じゃろ!? 嘘じゃとゆうてつかあさい!」

——などと言つてのけた。しかも意外と本気の顔で。

こればかりは嘘だ。夢だ。そう思つて首を横に振るフーカだが、サツキは大木にぽっかりと開いていた大きな穴の中に入り、中がどうなっているかを調べ始めた。ここに住む気満々である。

フーカはそれを見てさらに困惑したのか、両手で頭を抱え空を見上げる。今にも叫びそうな勢いで。

「なしてここがいなことだ……!」

今すぐこの森から出たい。そう思つてしまふフーカだが、今は月が出ている時間。つまり夜。そんな時間に一人で森を出ようなんて無茶も良いところである。

ここは切り替えが大事だ。フーカは深呼吸をして現状を受け入れると、やや恨みの籠つた視線を、穴から出てきたサツキに向けた。

「……なんか恨みでもあんのか?」

呆れるように目を細め、フーカの持つリユックから明かりを取り出すサツキ。どう考えても恨みしかないのだが、未だに口答えをすると殴られると思つているフーカは口に出そうとしない。

サツキは穴の中で明かりを点けると、それを一番奥に置いてその場に座り込んだ。中は相当広く、二人くらいなら楽々と入れるほどの広さだった。

いつまでも外にいるわけにはいかないの、フーカも穴の中に入つて入り口の近くに座り込む。こんな体験、生涯で一度きりだろう。

「寝袋はあるか？」

「ありますけど……」

サツキに言われてリュックから折り畳んでいた寝袋を取り出し、広げるフーカ。この寝袋もこれ一つだけで、サツキの分はない。

フーカを穴の奥に入れ、自分が入り口の近くに座り込む。そしていつも通りタバコを取り出し、外に向かって紫煙を吐いた。

「あの、緒方さん」

「ん？」

「ずっと前から思うとつたんじゃが、それ美味しいんですか？」

それとはサツキが手に持つタバコのことだ。とうとう頭がイカれてしまったのか。サツキは呆れた目付きから呆れた表情になった。

「別に美味くねえよ。お前は大人になっても吸うんじゃねえぞ。ガンになる確率も上がるからな」

タバコを吸うのはストレスが溜まっている人間が多い。しかも依存性が非常に強いので、一度ハマるとやめられなくなるのだ。

真つ暗な外を眺めるサツキに対し、タバコは吸ってはいけないと改めて決意したフーカは、もう一つ気になっていたことを聞いてみることにした。

「緒方さん」

「今度はなんだ」

「……あの、こまい金髪のお人はどうしたんですか？」

金髪の人。その言葉を聞いた瞬間、サツキは思わず息を詰まらせ、持っていたタバコを落としそうになった。

これまで見せることのなかった、明らかな動揺。頭に驚愕の色を浮かべていたサツキだったが、どこか痛めているかのように顔をしかめると、不本意そうに口を開く。

「……………別れた」

物凄い間があつたものの、サツキはハツキリとそう答えた。タバコを携帯灰皿に押し付けながら。

この言い方だと『恋人と別れた』と受け取られる可能性もあるが、サツキに限って恋愛はまずあり得ない。なので、フーカは言葉通りだと思ふことにした。

「なして、別れたんですか？」

「……………」

口の中に溜まっていた紫煙を外に向かって吐き出し、だんまりとするサツキ。さすがにこれは答えたくなかったようだ。

外から聞こえてくる森の騒めきと動物の鳴き声に、思わずビビってしまうフーカ。とにかく不安を紛らわせようと次の質問を考えていると、サツキが不意に呟いた。

「アイツと東に行った時もこんな夜だったな」

アイツ——件の金髪の人だろう。いや、一度直に会っているので性別が女性であることはわかっている。なのでここは金髪の女性と言うべきか。

今日のサツキは杯を交わして以降、いつもの傲慢な態度を取らなくなり、代わりにどこかしんとした淋しさがみ込んでいるような、そんな雰囲気纏うようになっていた。

自分の質問で昔の出来事でも思い出し、懐かしんでいるのか。もしくはその頃に戻りたいと思っているのか。そう思ったフーカは、失礼であることは承知の上で、ある事を言おうとサツキに三度話しかけた。

「緒方さん」

「さつきから何だテメエ。寝られないなら正直に——」

「過去は過去。今は今です」

フーカは珍しく気を遣うようなサツキの言葉を遮り、非常に真剣な表情で、ありのままの言葉を淡々と、フーカなりに想いを込めて口にしていく。

「思い返すこと悪いことじゃないです。じゃけど、そうしたところ

で何かが変わるわけでもありません。じゃけん——」

一旦言葉を句切ると、フーカはハッキリと続きを告げる。

「——じゃけん、前を向いとってください。わしはその背中を追わせてもらいますんで」

久々の、フーカからのストレートな発言。おそらく去年、フーカに『あんたについていっても良いでしょうか』と言われて以来の、真っ向から自分に歯向かうような発言。

弟子のそんな姿が嬉しいのか、サツキは軽く微笑むと、元々鋭い目付きをさらに鋭くし、フーカの質問に対する答えを口にする。

「上等だコノヤロー。そこまで言うならずっと前を向いてやるよ。だから今まで通りで何とかなるとか、そんな甘えたこと思うんじゃねえぞ?」

「……押忍っ」

サツキの返答に満足し、静かに頷くフーカ。寝袋に入ると、サツキにそっぽを向くように壁の方に顔を向け、眠りの扉を開く。

少ししてフーカが寝息を立て始めたところで、サツキは外を見ながら『やつちまった』と言いたげな表情になり、ため息をついた。

「はア……これで良いのかねえ……」

少し強がってみたは良いものの、結果として『フーカの前では後ろを向かない』という、簡単にできそうで難しい約束をしてしまった。

表面的な強さで勘違いされがちだが、サツキとて人間だ。強がっても不思議ではないし、弱さを見せても不思議ではない。

とりあえずタバコを吸おうとするもポケットに手をつ込んだところでその手を止め、何かを思いついた顔になって呟く。

「そーいやこの森……魔法生物いなかったか?」

さっきのフーカが聞いたように、サツキもまた動物の鳴き声をしっかりと聞いていた。それもフーカより鮮明に、複数の声を。

サツキとしては今から声の主を狩りに行くのもアリだと思っっているが、仮に行つたとしても暗闇には慣れていないフーカがついてこ

れないだろう。

対人戦にはある程度慣れていであろうフーカだが、それ以外のシチュエーションには慣れていない。なので、サツキは近いうちに対生物戦もやらせようと思っていたりする。

「まア……明日のことは明日考えるか」

投げ出すようにそう言うと、サツキは穴の外に出て、猿のように大木の樹上へよじ登っていく。指の力だけで登るといふ、ヤモリも真つ青な方法で。

一番上——樹上まで登ったサツキだが、ここに来たところで一瞬人の気配を感じ取った。わずかだが、殺気の混じった気配を。

「……こんなところに住んでる奴でもいるのか？」

念のために一晩警戒しておくか。暗闇と言っていい周囲を見回し始め、目を細めるサツキ。耳を澄ませ、目を凝らし、鼻を利かせる。

——今晚もまた、眠る暇はなさそうだ。

□

「ふあ〜……川があつて助かったわ」

翌日。サツキとフーカはたまたま近くにあつた川で、急遽木の棒と釣り糸で作り上げた、お手製の釣竿を使って釣りをしていた。

かつてのパートナーともこうして釣りに興じたことはあるが、半分ほど暇潰し目的だった前回とは違い、今回はちゃんと食べられる魚を狙っている。

というのも、お金のケチなサツキが『ただで食料が手に入るならそれに越したことはない』と言い出したのが始まりであり、少なくともフーカの意味ではない。

「はは……」

自分が垂らした釣り糸を見て苦笑いし、自分も寝不足だと言わんばかりに目を軽く擦るフーカ。どうやら風の音と動物の鳴き声で感じた不安を拭い切れなかったせいで眠れなかったようだ。

ついさつきサツキから聞いたことだが、どうもこの森は人の手があまり加えられていないようで、生態系もありのままであるとのこと。それがどういう意味なのかはわからなかったが、サツキがろくでもないことを考えているのは確かだった。

「おつ、デケエな」

サツキが竿を振り上げると、釣り針に付けた虫に魚が食いついていた。大きさは鮭くらいだろうか、川の魚にしてはかなり大きい。

ちなみに釣り餌として使っている虫は今朝、サツキが木の根元を掘りまくって探し出したものだ。フーカも特別虫が嫌いというわけじゃないが、素手で土の中にいる虫を探し出したことはないので、最初はそこまでするかと驚かされた。

釣った魚の頭を近くにあった石に思いっきりぶつけ、魚が動かなくなつたのを確認してその石の上に置くサツキ。この釣り自体予定外だったので、魚を入れられるような容器は持ってきてないのだ。

なるほど、釣り上げた魚はあやまって処理するのか。見たことをそのまま学んでいると、フーカの竿にも動きがあった。

「あつー！」

餌を付けて垂らしていた糸が、川の流れに逆らうという動きを見せたのだ。魚が餌に食らいついたという証拠である。

近代的な釣り竿とは違い、この原始的な竿にはリールという便利な機能が付いていない。そのため糸が切れないよう慎重に引き上げるしかない。

「こ、ここうか……？」

初めての釣りで、しかもサツキからは何も教えられていないのでどうすればいいかわからず、とりあえず竿をグイッと引っ張るフーカが、

「ああつ!?!」

プチンと糸が切れた——のではなく、竿がバキツと音を立てて折れ

た。これにより竿の先端ごと、餌を持っていかれてしまう。

まさかこんな簡単に折れるとは思っていなかったようで、折れた竿を見て呆然とするフーカ。サツキの方へ振り向くも、こつちのことなど知るかと言うように新たな釣り餌を付け、遠くに投げている。

壊してしまったものは自分で何とかしろ。サツキならそう言うと思つたフーカは、すぐ近くに落ちていた太めの枝を拾い上げ、先の方に釣り糸を括り付ける。なんだ、簡単ではないか。

「んしょー」

釣り針に餌の虫を付け、その糸をできるだけ遠くへ投げるフーカ。そうしてる間にも、サツキは四匹目の魚を釣り上げる。さつきよりも小さめの魚だが、逃がしはせずさつきと同じように処理していた。

早くしないと自分は成果なしになってしまう。妙に体と心が固くなり、焦りながらサツキの方をチラチラと見るフーカ。

それでも竿に反応はなく、そうそうと流れる川の音しか聞こえてこない。それ以外で聞こえてくる音と言え、サツキが釣った魚の頭を石にぶつける音ぐらいだ。

「はよお……はよお……」

フーカはトチ狂つたかのように念仏を唱えるかの如く、同じ言葉を何度も呟きながら水に垂れる糸を見つめる。傍から見れば『大丈夫かコイツ』と思われそうな光景だが、本人は至って真面目である。

太陽が真上に来たところで、五匹ほど釣ったサツキが「もういいだろ」と切り上げ始めた。これは本当にマズイ。そう思つたときだった。

「来たあ!!」

フーカの竿に大きな反応があつたのは。

「こ、これでええじゃろ……」

迅速に、かつ竿が折れたり糸が切れないよう慎重に竿を引き上げるフーカ。この動きはさつきの失敗をフーカなりに活かしたものだ。

サツキが魚の鰓の中を見たり、魚の口の中を見たりする中、フーカは糸が浅瀬に来たところで、

「せいっー」



竿を思いつきり引き上げた。釣り糸の先には鮭の成魚に匹敵するほど大きな魚が餌に食らいついており、元気よく体を動かしている。ようやく、しかも大きい奴が釣れた。喜びのあまり、釣った魚をそのままの状態、自分が釣った魚の状態を確認し終えたサツキに、どうだと言わんばかりに見せつけるフーカ。

その魚の大きさにサツキは少し感心するも、すぐさま鬱陶しそうに魚を払い除けた。目と鼻の先に活きが良く、生臭い魚がいれば当然の反応である。

「まア、こっただけ釣れたら充分だろ。火を点けるぞ」

「魔法でも使うんですか？」

「んなもん使ってたまるか。これで点けるんだよ」

そう言つてポケットからマッチ棒を取り出し、先端を箱に擦つて火を付け、あらかじめ積んでおいた木の棒の中へ放り投げるサツキ。本当ならもつと原始的な方法でやろうとしていたのだが、何かを警戒しているサツキは手っ取り早い方法を取ることにしたのだ。

珍しく口頭で、フーカに珍しく口頭でその原始的な火のつけ方を説明しながら、サツキは焚き火となった炎で、串刺しにした魚を焼いていく。身にしっかりと火が通るよう、小さな傷をつけた魚を。

フーカもそれを手伝うように、自分が釣った魚を串刺しにすると、サツキを見習つて魚に小さな傷をつけ、火炙りにしていく。

「……………レヴェントン」

「はい？」

魚を三本まとめ焼いていたサツキだが、いきなり何かを感じ取つたかのように、森の方——その樹上に鋭い視線を向け始めた。

不意を突かれる形で呼ばれ、思わず首を傾げるフーカ。サツキはそれに構うことなく、自分の魚を全部フーカに押し付けて淡々と話す。

「魚、全部食つとけ。それと火の後始末もやつといてくれ」

「えっ、じゃけど緒方さんの分——」

自分の分はどうなるんだ。そう言おうとしたフーカの言葉を最後まで聞くことなく、森の奥へ入っていくサツキ。どこかで同じ状況を経験したことがあるのか、非常に落ち着いている。

森の中をある程度歩いたところで、地面を蹴って樹上に跳び乗り、周囲の様子を見渡す。サツキが探しているのは、昨日から感じていた気配の主だ。

ときどき樹上から樹上へと跳び移り、鼻、目、耳を使って探しに探しまくる。だが、さつきまで微かに感じ取っていた気配が今は微塵も感じられなくなっていた。

「ん……う？」

どこへ消えた。僅かな驚愕の色を顔に浮かべ、辺りをキョロキョロと見回すサツキ。たった今周囲を見渡していたときの動きと比べると、明らかに焦っている。

これはマズイと判断し、樹上を伝ってフーカのいる川から離れていく。まるで猿や忍者のような移動方法だが、足下が不安定な森の中を走るよりはマシだと思っている。欠点があるとすれば足場が安定しない点だろう。

川から約二キロほど離れたところで地上に下り、背中を見せないように木の幹に密着させる。できるだけ後ろを取られないようにするためだ。

「——ここがガラ空きだぞ」

だが次の瞬間、凜とした女性の声と共に脳天へ何かを突き付けられ、反射的に硬直してしまうサツキ。まさか頭上から来るとは思ってもみなかったようだ。

バツと上を向き、突き付けられたものが銃口であることを確認する。そして銃の主は木の幹に跨る形で脚を上手く絡め、見事な体勢を取っていた。

すぐさま銃の主——黒の短髪に白のメッシュが入った少女から距離を取り、警戒して身構える。その顔からは余裕というものが感じられない。

動物並みの五感を持つ自分にすら、気配を感じさせなかった少女。サツキがわざわざ北東部から南東部にまで来て、接触したかった相手

「……テメエがランナーか」

「少し話そうか。亡霊よ」

—— “魔の散弾” ことランナーであった。

## 第24話 「ヤンキーと殺し屋」

「——ッ！」

昨日までしていた自分の体への心配はどこへやら。ランナーを肉眼で確認するや否や、サツキは闘志を剥き出しにして地面を蹴り出した。その顔にはやはり余裕がなく、どこか焦っているように見える。

それなりにあった距離を一気に詰め、途中で跳び上がって左の後ろ蹴りを繰り出すサツキ。それを見てもランナーは動く気配すら見せなかったが——

「ぐがあっ!?!」

——特に動揺することもなく、引き金を引いた。するとその直後、銃口から一発分であろう独特の発砲音が聞こえ、いきなり左側から現れた無数の魔力弾がサツキを襲った。

頭、肩、脇腹に全ての弾丸が直撃し、顔をしかめるサツキ。これといった外傷こそないが、どうやら内部に直撃した弾丸の衝撃が響き渡ったらしい。

引き摺られるように後退しながら着地し、犬のお座りのような姿勢になって弾丸が現れた場所へ視線を向けるサツキだが、そこには何もなかった。強いて言うなら少し球形に抉れた、木の幹があるだけだ。

「んなクソッ！」

サツキは気を取り直すように首を横に振ると、その場で右のハイキックを放ち、放った際に発生した衝撃——蹴圧をランナー目掛けて飛ばす。

が、そこにランナーの姿はなく、空を切った蹴圧はランナーがいた木を薙ぎ倒した。バキバキという音と共に倒れた木の大きな根が露わになる中、わずかに感じる気配を頼りに蹴圧を放ち、次から次へと木を倒していくサツキ。別に環境破壊とかそういうことがしたいわけではなく、あくまで姿の見えないランナーを追って攻撃しているだけである。

「見事な脚力だ。だが——」

「っ!?!」

どこからともなくランナーの声が聞こえると同時に、サツキの背中と後頭部に拡散されたであろう無数の弾丸が直撃し、足場が良くないこともあって前のめりになってしまう。

「——当たらなければどうという事はない」

サツキを小馬鹿にするようにそう言うと、再び気配を消すランナー。どういう原理で消しているのかはわからないが、五感の優れたサツキでも感じ取れない辺り、何かしらの技術を使っているのは確かだろう。

そのまま俯せに倒れてしまわないよう、右足を前に踏み出し、その足が地面に少しめり込むほどの力で踏み込むサツキ。仰向けはまだしも、前に倒れるのはどうしてもお断りのようだ。

「すうううううう……」

後を追うように攻撃するのは今はまだダメだと思ったサツキは、大きく息を吸い込み、

「□□□□□□□□——ッ!!」

天に向かって獣の如き咆哮を上げ、その清々しいほどの大音量でランナーの動きを止めに掛かった。

「——ぐあ?」

しかしそう上手くいくはずもなく、間もなくして正面からランナーの散弾を受けてしまい、雄叫びを強制終了させてしまった。一瞬なので動きを止められていたかはわからないが、強制終了させに掛かったということは、雄叫びはランナーに対して少なからず効果があるようだ。

顔面に三発、鳩尾に二発、喉元に一発食らったせいで、息が詰まって咳き込むサツキ。そんな隙だらけの状態だと言うのに、ランナーは撃って来ない。

サツキはそのことに疑問を持つも、息が整ったのですぐさま脱力した自然体の構えを取り、どこから弾丸が来ても良いようにするも——  
「チィ……ッ!」

——今度は頭上から散弾を食らってしまい、地に付きそうになった膝を両手で必死に支える。

撃ち出された散弾は一発も外れることなく、全弾サツキの脳天と両肩と両腕に命中していた。それでも非殺傷設定なのか、それとも単に威力が低いのか。サツキの体に傷は付いていない。

とはいえダメージそのものは負っており、少し歪めた顔で撃たれた箇所を擦るサツキ。思わず手で押さえるほどの痛みではないようだが……。

「クソが……！」

戦いなら選択肢がいくらでも浮かぶはずなのに、今回に限っては全く浮かんでこない。いや、どの選択肢もことごとく潰されている。こんなことは初めてかもしれない。

そんなことを思うサツキだが、実際は『魔法』という選択肢を避けているせいで選択の幅を意図せずに狭めているに過ぎなかったりする。

「うぐ……!?!」

握り込んだ右の拳を突き出して拳圧を飛ばそうと構えるも、いきなり右側の木の幹から現れた散弾が、サツキの右手・腕・肩に命中する。

最初の狙撃と同じ攻撃。弾が飛んできた方へ視線を向けるも、そこにあるのは少し抉れた木の幹だけ。それ以外の痕跡は何一つ見られない。

自分が翻弄されているという事実。歯を食いしばって怒りを露わにするサツキだったが、いきなり樹上に現れたランナーに話しかけられたことで少しだけ落ち着くことになった。

「待て馬鹿者。私は其方と戦うつもりはない」

「だったら目的はなんだ。昨日から殺気交じりの気配を感じさせやがって」

「話がしたい。そう言っただろう？ 何故死んだはずの者が、現世にいるのか。それが気になって仕方がなかったのにな」

戦うつもりはないと言っておきながらすでに小競り合いへと発展しているのだが、ランナーはそれを気にすることなくサツキへの説得

を続ける。というのも、こうなったのは先に仕掛けてきたサツキが悪いからだ。

「話だア？」

「そうだ。其方には聞きたい事が幾つかある」

地面に足を付け、構えるライフル型のデバイスを、サツキの眉間に照準を合わせながら話し始めるランナー。話そうと言っておきながら、警戒を解くつもりはないようだ。

サツキもサツキで悟られないよう身構えてはいるが、素人ではなくプロの殺し屋であるランナーを誤魔化すことはできないため、実際には何の意味もない。あくまで最低限の備えである。

試しに一步下がるサツキだが、非常に警戒しているランナーは引き金を引く素振りを見せた。少しでも変な動きをすればさつきのように撃つ、というものだろう。

「チツ……話ってなんだ」

やむを得ず一応の警戒をしたまま、木の幹に背を預けて座り込むサツキ。このまま身構えても時間の無駄だと判断したようだ。

ランナーも多少は警戒を解いたようで、愛銃を構えたままサツキと同じように背を木の幹に預け、サツキと正面から向かい合う形で座り込む。警戒を和らげても、構えを解く気まではないらしい。

「先も言ったが、其方はあの日に死んだはずだ。何故生きている？」

「それを言うと思うか？」

土壇場とある小説の主人公の蘇生技を一か八かで試したら何とかなりました、なんてバカ正直に言えるわけがない。あの方法は身体自動操作ありきで実現できたことだし、何よりできるとしてもここで言ってしまうえば対策を取られる可能性がある。

サツキの目を睨むように見つめていたランナーだが、時間を掛けて待っても答えは得られないと判断したのか、次の質問に移った。

「……まあ良い。では次に、何故ここにいる？」

「それはこつちが聞きてえぐらいだ。こんな森林で何してやがった？」

お金の掛からない寝床を探すために森へ足を踏み入れたサツキや

フーカはともかく、どうして殺し屋のランナーが森の中にいたのか。ランナーは東の方角を一瞥すると、別に言っても大丈夫だろうという感じで淡々と答えた。

「近くに拠点の一つがあるのだよ。其方達にも同様のものがあるようにな」

「一つ……？　つまりお前ら殺し屋は自分の隠れ家をいくつか持つてるってことか」

「さてな。他は知らぬ。私は持っている。それだけだ」

これで充分だろうと言いたげに――鬱陶しそうに切り上げたランナーは、まだ聞きたいことがあったようで、周囲の様子を探りながら話を続ける。

「もう一度聞くぞ。――何故この地へ足を踏み入れた？」

それだけで獲物を射抜けそうなほどの目付きになり、少し聞くだけで真剣さが伝わるような声で問い掛けるランナー。まるで自分のテリトリーを荒らされた野生動物のようだ。

ランナーの気迫に反応し、反射的に目を細めるサツキ。向けられているのが殺気ではないこともあり、ビビってはいない様子。

どう答えてやろうか。少し考え込んでいたサツキだが、グチグチと説明交じりで目的を言うよりはマシだと思い、簡潔に答えることにした。

「――お礼参りだ」

たった一言。サツキはそのたった一言で、自分の目的を言い切った。これを聞いたランナーは右の眉をピクリと動かし、訝しげに口を開く。

「……誰にだ？　まさかとは思うが、私か？」

「当たり前だコノヤロー。テメエとアシン以外に誰がいるよ」

あの日。サツキを殺すために参上したのは“蒼天の一閃”ことア



シンと、ここにいる。魔の散弾。ことランナーの二人だけ。やられっぱなしでは気が済まないサツキにとって、この二人を自分の手で倒すことは当然とも言える。

殺気と怒りが交じった声で告げられたサツキの目的だが、ランナーはそれを無碍にするかの如く、半分笑い気味の声で話し出した。

「そういう事であったか。ならば諦めるが良い」

「……はア？」

意味がわからない。捻りを入れることなくそう思って、首を傾げそうになるサツキ。今にも舌打ちしそうな表情で、ランナーに睨みを利かせる。

その睨みをランナーは意に介することなく、ある事を非常に真剣な表情で、強い意志が込められた凜とした声で話していく。

「私は殺し屋という職業に就いている。だから殺しを行うのは仕事の時だけだ。趣味や興味本位、面白半分で人を殺すような者達と一緒にしないでもらいたい」

依頼でもされない限り、サツキに殺しの銃口を向けることはないし、やりたくもない。直接言うのは嫌そうなランナーからの、そういうメッセージも込められているように感じ取れる台詞でもあった。

サツキは納得がいかないと舌打ちをするも、今やり合ってもさつきのように足払われるだけだと判断し、ひとまず落ち着こうとズボンのポケットからタバコを取り出し、ライターで火を付ける。

ランナーもその様子を見て構えを解こうとはしないものの、構えたまま左手で携帯食料を取り出すと、それを口の中に放り込んだ。

「ふう〜……」

「んぐ……」

片やライフル型のデバイスを構えた殺し屋、片や最強クラスのヤンキー。そんな両者が、一服し、間食しているという、何とも言えない光景がそこにはあった。

ある程度吸ったタバコを投げ捨てるサツキと、食べ終えた携帯食料の袋を上着のポケットに仕舞うランナー。どちらも警戒したままなので、動作の一つ一つが慎重になっている。

「さて、もう良いだろう」

そう言うのと愛銃を構えたまま、ゆっくりと立ち上がるランナー。どうやらサツキに聞きたいことは全て聞き終えたらしい。

サツキもランナーの返答に納得がいかないまま、そのランナーを睨みながら立ち上がる。これ以上は会話も続かないと判断したようだ。

「緒方サツキよ」

「あア?」

「其方に一つ言い忘れたことがある」

何かを思い出したように切り出し、警戒心はそのまま、ここに来てようやく構えを解くランナー。一体何を基準にしているのかはわからないが、頃合いだと思っただろう。

「私は殺し屋だ。依頼がない限り、其方と会うこともないし、相まみえることもないだろう。だが——」

一旦言葉を句切ると、ランナーは鋭い視線を向けるサツキを睨み返し、堂々と背を向けながら、

「——依頼があれば話は別だ。どこにしよう、必ずその命もらい受けるぞ」

言葉で言い表せないほどの殺気と共に、そう告げた。

「っ——!?!」

ランナーの殺し屋としての殺気に気圧され、思わず二歩下がってしまふサツキ。これまで様々な種類の殺気を感じてきたし、殺し屋の殺気も知っていた。が、ここまでの殺気はさすがに初めてだ。

サツキは未だに癒えていない腹部を押さえるとその場から動こうとせず、こちらを一瞥して立ち去るランナーの背中をただただ見つめることしかできなかつた。

□

「……………チツ」

ようやくランナーの殺気から解放され、腹部を押さえながら森の中を一人歩くサツキ。その顔には悔恨の色が表れ、古傷の痛みを堪えているかのように歯を食いしばっている。

今回はサハラツタの時とはまた違う屈辱を味わったものの、それに報いる収穫はあった。

まず、この森林地帯がランナーのテリトリーであったこと。つまりこの付近で不祥事を働けば、ランナーが出張ってくる可能性が僅かなからあるのだ。この情報は大きい。

次にランナーの手の内を見れたこと。サツキが味わった屈辱の大半はこれ関連だが、何の成果も得られないよりはマシだろう。あれで全部出したというわけでもないが、それでも充分と言える。

これで残る問題は体調だけとなった。完治とまではいかなくとも、当初の予定通り戦える程度にまで回復しなければならぬ。

「腹減ったなあ……………」

胃袋がキュウーつと鳴り、呆れたようなジト目で眩くサツキ。朝から何も食べておらず、しかも朝食として食べる予定だった魚も全てフーカに譲ったからである。自業自得だろう。

空腹はダメだ、餓死は笑えない。前にも似たような経験をしているのか、サツキはそう思うと焦るように樹上へ跳び上がり、枝に実っていた赤い木の実を二つほど採集する。蹴って落とそうかとも考えたが、余計なものまで落ちてくる可能性を考えて断念した。

取った木の実の臭いを嗅ぎ、上下に振って中身があるかどうかを、凝視して虫が開けた穴がないか確認していく。何も音がしなかったので、食べられるところはちゃんとあるみたいだ。

「いただきますっつと」

確認を終えると同時に、木の実の一つを丸かじりするサツキ。本来なら火を通すなり、消毒するなり、人工栽培したものを採集するなりして安全を確保するものだが、サツキには関係ない。

よく噛んで舌の上でゴロゴロさせてから飲み込み、少し間を置いて

この木の実が食べられることを確信すると、もう一つの木の実も餓鬼のようにガツガツと食べていく。

本来ならこれだけでもお腹が膨れるサツキだが、空腹ともなると話は別。再度樹上へ跳び上がり、さっきの木の実と同じものを腕一杯になるほど採集した。

……実は言うほど空腹ではないのだが、サツキはそのことに気づいていない。最近までとはまともなご飯が食べなくても気にしなかったのだが、何故か今回だけは異様に気にしていた。

「ふう……美味かった」

満足そうにお腹を擦り、口元についた食べかすを舐め取るサツキ。再び取った木の実を、腕一杯に抱えていた木の実を、いつの間にか平らげていた。

食べ終わって歯と歯の間に挟まった食べかすを取るために爪楊枝で穿り出すような感覚で、タバコを一口吸って痰交じりの唾を吐き捨てる。

木の実を食べたことで気力が戻ったのか、三度樹上へ跳び上がると、今度は樹上から樹上へ跳び移るといふ、いつも行っている移動方法に切り替えた。

「これからどうするかねえ……」

目的はどうか達成された。ならば次の段階へ移らなければならぬ。とはいえ、今すぐ移るのはあまり良い選択とは言えない。回復するまで、フーカの教育に専念した方が良さだろう。

教育という選択を当たり前のようにする辺り、自分も変な方向に変わったな、と内心嘆くように思い、立ち止まることなくタバコを吸って、そのまま紫煙を吐き出す。

果てしない緑が広がり、動物の影すらない道中で、吐き出されたそれは一際目立っていた。

## 第25話 「食料と火起こし」

「あつ、緒方さ——緒方さん!」

いきなり目の前に現れたサツキを見て、口をあんどりと開け、目を見開くフーカ。

一方のサツキもどうかフーカのいる河原に戻ったが、自分の体を舐め回すように見て心底驚くフーカに対して、困惑の色を隠せずにいる。

「んがっ……何驚いてんだよ」

「いや驚いて当然じゃろう!? だって……」

もう一度サツキの全身を舐め回すようにジッと観察すると、フーカは事件の犯人を指名する名探偵のように、サツキを震える指で差しながらハッキリと告げる。

「だって今の緒方さん——びしょ濡れの下着姿じゃないですか!」

そう、フーカの言う通り、今のサツキは上下黒の下着姿で、全身がびしょ濡れだ。頭の上には着ていた服が、一か所に纏められており、どこかの民族を彷彿とさせるような状態になっている。

というのも、サツキがびしょ濡れなのは川の中を移動してきたからである。その証拠として、両手にさつき自分達が釣っていた魚を生きたまま持つており、フーカに驚かれるまで口にも一匹啜っていたのだ。

首の動きだけで放り捨てた魚の頭部に手のひらサイズの石を、サッカーボールのように蹴ってぶつけ、元氣よく跳ねていた魚を気絶させるサツキ。両手の二匹も尾びれを持って頭部を足下の石目掛けて振り下ろし、一発で気絶させた。

さらに着替える気配を一向に見せないサツキは気絶させた魚を、刃物のような形状をした石を使い、その場で捌き始めた。どこでそんな石を調達してきたのか気になるところだ。

「せ、せめて服を——」

「今着たらその服が濡れるんだよ。着るにしても体を乾かしてからだ」

頭の上に一つに纏めた服を置き、ズレ落ちないように蔓で固定しているというシユールな外見で、魚の内臓を器用に取り出していく。

できないことを見ていても仕方がない。自分にできることはないかと考えたフーカは、先ほどサツキが置いていったマッチ棒で、一度消した火をもう一度点けることにした。

「火を点けるんは……こんなあでええか」

誰かが捨てたであろう発泡スチロールのようなゴミを拾い、それに火を点けるフーカ。すぐに火の点いたそれを、さつきサツキが積んでいた木の棒——薪の中へ放り込んだ。

発泡スチロールに点いた火は薪に伝って燃え盛り、ぱちぱちと快活な音を立てて薪を鳴かしていく。一度使用した薪だったので焚き火ができるか不安だったが、どうやら杞憂だったみたいだ。

「あとが緒方さんが魚を処理してくれるんを待つだけじゃが……」

肝心の魚は、と思いつながら調理をしているであろうサツキの方へ振り向くも、そのサツキは捌いた魚の一部を刺身にしてそれを川の水で洗い、その場で食べていた。生で大丈夫なのだろうか。

刺身を美味そうに食べていたサツキだが、それだけじゃ物足りなかつたようで、一息つくと調理を再開し始めた。どうやらつまみ食い感覚だったらしい。

未だに下着姿のサツキだが、腹部の痛々しい傷痕もあって、少なくとも色気というものは微塵も感じられない。それどころか無駄に筋肉質な体型のせいで、女性なのに男らしく思えてくる。

フーカはサツキにいい加減服を着ろと言いたいのだが、まだサツキの体が乾いていないせいで急かすことができなかった。そのまま服を着れば肌触りも悪くなるし、服に水が染み込んで重くなるからだ。

一匹の魚を捌いて刺身にすると、今度は調理し終えた二匹目をフーカが点けた火で炙っていくサツキ。同時に全身を乾かす算段のようだ。

「やっぱり火を通すのが一番だな」

じゃあなんでさつき生刺身で食べ、たった今刺身料理を作ったんだ。そう言いかけたフーカだが、魚は色んな料理として食べられることを思い出し、すぐにその疑問を霧散させた。

ただ、自然の物を生や処置なしで食べるのはリスクがそれなりに高いことも、サツキから聞かされているので知っている。言っていた本人がそのリスクを冒していることに納得できないだけだ。

「それ、食ってみろ」

「えっ……」

そう言つてサツキが指差したのは、最初に作った刺身だった。しかも刃物みたいな石で捌いただけの、獲れたてピチピチの生刺身。さすがに骨や内臓は取り除かれているだろうが……。

食べてお腹を壊したりしないだろうか。新たな不安に襲われるフーカだが、サツキが作ったものなら一日は大丈夫だろうと少しズレた結論に辿り着き、腹を括って刺身を一枚口にする。

「もぐもぐ……」

ガラスの欠片でも噛むように、ゆつくりと刺身の食感を味わうフーカ。魚らしく独特の臭いが鼻を擽るも、川の清流の香りと厚みのある味が口の中に広がっていく。

最初は顔を歪めるほど嫌そうにしていたが、刺身の食感を味わっているうちに、いつものほっこりとした緩めの表情に戻っていた。

噛んで小さくした刺身を名残惜しそうに飲む込むと、目を輝かせてサツキに感想を述べる。

「緒方さん！ これ、ぶち美味しいんじゃない?！」

「はいはい。美味しいのはわかったから落ち着け」

フーカの方へ振り向くことなく、火炙りにした魚を丸かじりにするサツキ。口を動かす度に聞こえるバリバリという音からして、骨ごと身を噛み砕いているようだ。

魚一匹をあっという間に平らげると、ようやく体が乾いたのか一つに纏め、頭の上に固定していた服を手に取り、下から順に着始めるサツキ。ここまで体が全く震えていなかったが、寒くはなかったのだろうか。

最後にいつもの灰色パーカーを羽織るように着ると、サツキはズボンのポケットからタバコの箱を取り出し、焚き火の中に放り込んだ。

「それ、中身は大丈夫なんですか……?」

「空っぽだから問題ねえよ」

そう言つて痰を混ぜた唾を吐き捨て、近くに落ちていた太くて長い木の枝を拾い上げると、何らかの音を頼りに再び森の中へ歩き始めるサツキ。

刺身を美味そうに食べていたフーカもそれを見るや否や、残りの分を慌てて平らげ、慌ててサツキの後に続く。まだ刺身を飲み込んでいないためか、頬がハムスターのように膨れてしまっている。

ハムスターみたいになったフーカには目も暮れず、サツキは拾った枝を上手く折つて先端を槍のように鋭利な形状にする。こうすることで獲物に直接突き刺したり、投擲武器として使うこともできるのだ。

「えーっと、確かこつちから足音が聞こえたんだがな……」

「そげな音、わしには——」

聞こえなかった。フーカがそう言おうとしたところで、いつの間にか左にあった茂みからガサガサと、何かが移動している音が聞こえてきた。というか、自分が気づいていなかっただけで森の奥の方へ来てしまっていたようだ。

奥と言つてもそこまで深く進んでいるわけではないので、サツキの耳にはまだ川の流れる音が入っている。フーカには風によつて森がざわめくような音しか聞こえていないが。

他の茂みに隠れるのかと思いきや、フーカに両手で口を塞ぐよう指示すると、フーカの脚を掴んでそのまま木の上に放り投げ、それに続いて自分も跳び乗り、途中でフーカの脚を掴んで回収した。

「んんっ!？」

「口を塞ぐのはもういい。だけど声を、音を出すな」

フーカの耳元でそう囁くと、大きな音を立てないよう慎重に、掴んでいたフーカを比較的太めの、一人くらいなら立っても折れないくらいの枝に下ろすサツキ。



言われた通り慎重に口から手を放し、ゆっくりと息を吐くフーカ。その視線は自分を雑に扱ったサツキではなく、先ほどから何かが潜んでいる茂みの方へ向けられている。

サツキは槍のように鋭い武器となった枝を構えると、それをフーカの視線が向けられている茂みに向かって投げつける。その後、茂みの中から苦しそうな獣の呻き声が聞こえ、茂みの動きが止まった。

「……………」

「ど、どうなりました……？」

恐る恐ると聞いてくるフーカだが、サツキはそれに答えることなく木から跳び下り、一直線に茂みの方へと向かう。フーカも音の正体を確かめようと、サツキに続いて跳び下りた。

茂みに入ったサツキが枝を投げた場所に手を突っ込み、左手で獲物の胴体を、右手で枝を掴んで引き上げると、

「あらよつとおー！」

「おう!？」

脳天を頭蓋骨ごと枝に貫かれた、体長一メートルはあろうかという、猪のような獣が姿を現した。

□

「うし、レヴェントン。火を点けろ」

「は、はいっ」

最初に猪型の獣を狩ってから数時間後。あれから二頭ほど同じ種類の獣を狩ったサツキは、日が傾き始めたのを確認して川に戻ると、手ぶらのフーカに火起こしの指示を出した。

フーカは緊張しながらも、先ほどサツキに教わったことを順番に思い出していく、サツキがいつの間にか持っていた竹のような木を借りるように手に持つ。

それを持ってきたサツキはフーカの火起こしが成功すると思つて

いるのか、手に持っていた獣を下ろすと、石と森で拾った木の枝で、釜戸のようなものを作り始めた。

「こ、こようじゃったかのう……?」

まずは乾いた竹のような木の表面を、サツキから借りた刃物のような石で軽く何度も削っていき、その削りカスを一カ所に集めて火口という、着火に用いる燃料を作っていく。

次に削ったカスが風で飛んでいかないよう、火口に覆い被さるような姿勢で、今度は木の表面に小さな切り込みを入れ、その中心に穴を開ける。

「よ、よしっ」

今開けた穴にもう一本の木の端を合わせ、そのまま横に擦り始めた。こうすることで開けた穴に火種を落とし、火口に着火させるといふ仕組みだ。

力を下に掛け、ひたすら擦っていくフーカ。火種が落ちると煙が出るのでわかりやすいのだが、肝心の煙がなかなか出てこない。そんな状態が三分も続いた。

「もう点いてもええはずなんじゃが……」

そろそろ火が点いてもいい頃だ。ここに来てようやく煙が出てきたが、それでも点火する気配はない。焦げ臭くはなっているのだが……。

さすがにおかしいと思ったフーカは一旦手を止め、穴の開いた木をどけて火口を確認すると、

「う、嘘じゃろ……」

最初の辺りで落ちたであろう、黒くて小さな火種が落ちていた。

「はは……気づかんかった……!」

乾いた笑いと共に口元を引きつらせ、崩れるようにがっくりと項垂れ、思いつき「気づかんかったあー!」と叫ぶフーカ。

サツキはフーカの叫びに反応して視線だけを向けるも、すぐに獣の調理に掛かる。叫んでる暇があるなら何度でもやれ、と言いたげに。

フーカ自身も同じ考えだったのか、小さく息を吐いて意識を切り替えると、木の端を穴に合わせ、火種が落ちるまで擦る作業を再開し始

めた。

「最初の数回じゃったな……」

最初の数回。この火起こしにおける勝負所だ。フーカはそれを思い出し、木を壊さないよう力を調整しつつ、その力を下に掛けて擦っていく。するとさつきとは比べ物にならない量の煙が出たかと思えば、火口の中心が赤くなり始めた。

「き、きたっ」

火種がある火口を両手で覆い、そこへ何度も息を吹き掛けるフーカ。こうして火種に集中的に空気を送ることで、本格的に着火させる魂胆だ。

煙の量が増え、そのせいで目の前が見えなくなってもなお、フーカは息を吹き続ける。と、ここで――

「あつ――っ!？」

――ようやく火が点いた。自分達が当たり前のように使っていたものと、同じものが。

小さいながらも燃える火が消える前に、火種を火口ごと両手で掬うように掴み、サツキの手作り釜戸にそれを放り込み、消えないよう再び息を吹き掛けていく。

そして火がパチパチと燃え始めたのを確認すると、安心してその場に座り込んでしまった。フーカはそのままサツキの方へ振り向き、

「っ、点きましたよ緒方さん……!」

と、酷く息を切らしながらも明るい笑みを浮かべた。自分だつてこれくらいできる。そんなメツセージを込めたような、明るい笑みを。

「……やればできんじやねえか」

直視できないと言わんばかりにフーカから目を逸らしながら、喜びと不器用が混じったような複雑な表情で、フーカの頭を撫でるサツキ。

いつも茶化し目的で頭を撫でてくることはあるが、褒めるという意

味で撫でられたことは一度もなかったのだ、フーカは素直に「おお……」と感心した。

……ただ、問題が一つある。

「く、臭いんじゃないけど……」

その手が非常に獣臭かったのだ。フーカが不快さを通り越して、思わず笑ってしまうほどには。獣を調理していた最中だったので、当然と言えば当然だが。

もうこの臭いに関しては諦めることにし、サツキに褒められたという事実には喜ぶことにした。夢ではないと、頬をつねって確かめながら。

サツキは調理し終えた獣の肉を、一枚一枚串刺しにして火で炙っていく。魚の時と同じように。だが、魚の時とは違い、内臓の食えそうな部分も火で炙る。生で食べるのは得策ではないからだ。

「緒方さん。いつになりやあいがるんですか?」

「いがる……帰る、か」

その辺りは考えていなかったようで、顎に手を当てて考えるサツキ。が、すぐに決めたようできつきとは違ってフーカの顔をしっかりと見つめ、口を開く。

「——お前が一人で狩りをできるようになったら、だな。そうなったらすぐにでも帰ってやるよ」

「わしが一人であれを狩れるようになればええんですね? 忘れんどうかあさいよ?」

嫌な顔をするどころか、今回は珍しくやる気満々のフーカ。どうもこれくらいなら比較的早くできると思っているようだ。前回の無茶ぶりに比べたらマシだというのもあるだろうが。

さっそくサツキが使用した枝と同じものを拾い、それを見様見真似で折るフーカ。しかしそう上手くはいかず、ただ木の枝を真っ二つにするだけの結果となってしまった。

「えっ、あれ……?」

真っ二つになった木の枝を交互に見て、首を傾げるフーカ。納得がいかなかったようで、新しい枝でもう一度試そうとするも、

「やるなら明日にしろ。夜の森は危険だからな」

と、サツキに焼き立ての獣肉を差し出されながら止められてしまった。肉から美味しそうに焼けた音が聞こえ、思わずゴクリと唾を飲み込むフーカ。

その肉を受け取り、焚き火のそばに座り込む。その周りには火を囲うようにサツキが捌いたであろう、今も炙られている串に刺さった大量の獣肉が、焚き火の隣には獣の骨が置かれている。まるで原始時代に戻ったような光景が、そこにはあった。

しかしそんなことにはお構いなく、渡された肉を豪快に食べるフーカ。噛みにくい部分は腕の力も使って噛み千切り、口いっぱい頬張る。

「う、美味しい……!!」

そして頬張った肉をよく噛んで飲み込むと、叫ぶように呟いた。一噛みで口の中に広がる、病みつきになりそうな味わい。見た目以上に、店で食べた焼き肉よりも美味しいと言えるものだろう。

フーカの喜ぶ顔を見て満足でもしたのか、三枚ほど肉を食べたサツキはその場から立ち上がり、フーカに気づかれぬよう、樹上に向かって跳び上がった。

□

「ぐっ……い」

フーカが焼き肉に夢中で自分がいないことに気づいていないのを確認すると、樹上に跳び乗ったサツキは苦しそうに胸元を押さえ始めた。

こうしなければ、胸元を押さえなければならぬほどの痛みを感じ始めたのは昨日から。どこが痛いのかはわからないが、まるで心臓が直接何かに絞め付けられているかのような痛みだ。

最初に感じたそれは激痛そのものだったが、その時はフーカの前

だったこともあり、顔が少し歪む程度に抑え込んでいた。……当のフーカには怪しまれてしまったが。

「どうなっただ……！」

今もジワジワとくる痛みを感じているが、最初よりかはマシになっている。それでも苦しいことに変わりはなく、額には嫌な汗が滲み出ている。

痛みの原因がわからない以上、自然に収まるのを待つしかない。だけど収まらないのなら、このままランナーに挑むしかない。

それにフーカとの約束もある。まだその時じゃない。ここで弱さを見せるわけにはいかないのだ。

「クソが……」

力なく声を出し、痛みを誤魔化すように胸部を拳で叩くサツキ。

視線の先にいるフーカもようやくサツキの不在に気づき、辺りをキョロキョロし始めた。これは戻るしかないだろう。

痩せ我慢をするべく額の汗を拭き、冷静な表情を装って、樹上から跳び下りた。

## 第26話「もう止めだ」

「バグアアアッ！」

「あぶっ!？」

額に鋭い角を生やした狼のような獣が突進し、それをギリギリでかわすフーカ。その獣——一角獣は途中で曲がることなく木に激突し、その木を押し折ってしまった。

フーカはそれを見てふう、と安堵して一息つく。今回はどうにか避けられたが、あの突進が自分に当たっていたらと思うと……。

最悪の結果を想像し、思わず冷や汗を掻く。そんなフーカをよそに、一角獣は頭を横に振り、何事もなかったかのように再び突進してきた。

「のわぁー!？」

これもギリギリのところまで避けるも、額の角がフーカの脇腹を掠めた。

体長約三メートルという巨体でありながら、魔力なしの人間では決して出せないほどの速度で突進してくる。魔法の存在が常識となっているこの世界では軽く見られているかもしれないが、冷静に考えるとなかなか恐ろしいものだろう。

右手に持つ刃のような石と丈夫な木の棒で作った槍を構え、獣を睨みつけるフーカ。いつもなら素手で立ち向かうのだが、今自分が戦っているのは人ではなく野生の獣だ。素手で倒せるほど楽な相手じゃない。

「あれからもう一ヶ月は経つんか……」

サツキに『一人で狩りをできるようになれるまで帰らない』と冗談で言われ、それをフーカが真に受けてから一ヶ月が経った。

後にその発言が冗談だと気づいたフーカだが、指摘はあえてしなかった。この環境での狩りならフィジカル向上のトレーニングにもなるし、世間に溶け込むだけじゃ学べないようなことを、サツキから

教えてもらえるかもしれないと判断したからだ。

最初は得物もまともに作れなかったフーカだが、次第に自然にあるものだけで体を洗う方法や、寝床を作る方法、飲んでも大丈夫な水を確保する方法など、この大自然で生き抜くために様々なことを模索し続けた。今右手に持っている槍もフーカ一人で作ったものである。

そんなフーカにとって一番の成長は、ここまでサツキの助けを借りていないという点だろう。……とはいえ、サツキに教えてほしいことはまだまだあるので、彼女の元から離れる気はないのだが。

フーカは冷静にバックステップで後退し、彼女の頭上を狙って跳躍した一角獣から距離を取る。相手は地球で言う狼に近い生物だ。突進以外の攻撃もできる。

一角獣は着地すると再度跳躍し、木の幹を蹴ってジグザグに動き、またしても上からフーカの顔面へ額の角を突き出す。

「グワアッー」

「うわっ!？」

まだ体勢が整っていなかったこともあり、後ろへ転びそうになりながらも、右手の槍で一角獣を迎撃しようとするフーカ。それに勘付いたのか、一角獣は器用に体を横へ捻らせて突きを回避し、フーカの隣に着地した。

やられる。そう思って少々ヤケになって槍を振るうフーカだが、一角獣はそれを警戒していたのか、迫り来る槍を角で弾くと、唸り声を上げながらゆっくりと後退し始めた。すぐに追撃を加えない辺り、頭は比較的良好いようだ。

その間にフーカも体勢を整え、一角獣から目を離さないように槍を構える。速さは完全に向こうが上なので、少しでも油断すれば命取りになる。

「この前のシシたあ訳が違うのお……」

フーカは以前、というか最初はサツキが仕留めた猪のような獣を狩ろうとしていたのだが、サツキのようにはいかず失敗が続いていた。落とし穴は相手が大きすぎて収まりきらず、奇襲は事前に察知されて返り討ちにされてしまっている。真つ向勝負に至っては論外だ。



が、フーカはその獣を追っているうちに気づいた。この森には猪型を始め、豊富な種類の大型動物が生息していることに。今戦っている一角獣もその一種である。

その場で踏み込みを強く行い、槍の照準を一角獣の鼻っ面に定めるフーカ。次の一手で決めるつもりのようなだ。

「グルルルル……」

一角獣の方もその細い四肢で踏ん張ると、体を少し後ろへ引き始めた。これで勢いよくフーカの頭上へ跳び上がることができるし、そのまま突進することもできる。

お互いに構えたまま微動だにせず、風の音が耳に入らなくなったところで――

「っ――！」

――フーカが動いた。

槍を溜め込むように構えた状態で、地面からはみ出る木の根を上手く伝っていき、一角獣に肉薄する。

「グガアアッ！」

一角獣の方もフーカに肉薄されたと同時に真上に跳び上がり、木の枝を器用に蹴って急降下し、フーカの脳天に穴を開けるべく、額の角を突き出す。

「いけん……い！」

そうは言いながらもそこまで焦った様子は見せず、体勢を崩しつつ槍の穂先を一角獣の鼻っ面に向け、口が開く瞬間を狙い――

――それを、投げるように突き出した。

□

「おーおー、派手にやってんじゃねえか」

同時刻。ちょうどフーカが森の守護獣のような姿をした一角獣とやり合っている頃、サツキはサツキである事をしていた。

大きな石の上で座禅を組み、感覚を研ぎ澄ますべく、ゆつくりと目を閉じる。これを行うにおいて、一番邪魔になるのは視界なのだ。

最初に浮かび上がるは——自分が殺し屋のランナーに、一本取られた瞬間。続いて自分達が今いる森の内部。そこから、

地形。

木の一本一本。

地面の細かいヒビ。

風の強さや気温、湿気。

等々。自分の目で見て、五感を駆使して得た情報が、形となって、文字となって鮮明に出てくる。

次に自分の持つ情報も入れてパズルのように組み立て、シチュエーションを自分とランナーが再戦している場面へと切り替える。

まるで本当に対峙しているかのように、たった今現実で起きているかのように鮮明な光景が浮かぶ中——

——サツキから仕掛けた。

いつものように真っ直ぐではなく、右から回り込み、体を独楽のように回転させながら、右の回し蹴りをランナーの首元へ繰り出す。

が、前に対峙したときと同じくランナーが愛銃の引き金を引いた瞬間、すぐそばにあった左の木の幹から挟まれるような音と独特の発砲音が同時に聞こえ、サツキの左肩、脇腹、左脚に無数の魔力弾が直撃した。

これにより体勢を崩し、放った蹴りの軌道が後頭部の方へと大きく逸れ、空を切る。蹴圧が吹き荒れ、近くにあるいくつかの木に挟り傷をつけていく。

それでも最初のようにはいかないと言わんばかりに、サツキは宙で

体勢を崩したまま、左の足でランナーの下顎を蹴り上げようとするも、今度はランナーがその場から姿を消したことでまたしても空を切り、再び発生した蹴圧で、今度は木の幹に刀で縦に斬ったかのような傷がつけられた。

僅かに感じる気配を頼りに、何も無いところへ蹴りの風圧——蹴圧を連続で飛ばすサツキ。当然姿の見えないランナーに当たるとは無く、放たれた圧の軌道上にある木々が次々と薙ぎ倒されていく。

続いてランナーの動きを先読みするかの如く、後ろへ向くと同時に右の拳を全力で突き出し、その際に発生する衝撃——拳圧を飛ばす。が、それも空を切るだけに終わり、頭上から魔力の散弾で脳天・両肩を撃たれてしまう。

サツキはそれを耐え抜くと今度は弾丸が撃ち出された場所へ跳び上がり、ランナーが立っついていそうなどころへ蹴りを放つも、まるでそう来ることはわかっていたかのように、さらに上の方から散弾が現れた。

すぐさま太めの木の枝に乗っかり、両手で迫り来る弾丸を弾いていくサツキ。弾かれた弾丸に追尾機能はないのか、次々と地面に穴を開けていく。

散弾は弾ける。つまり最大限に上手くやれば、ランナーに弾丸を弾き返せる可能性もある。その事実に対し希望を抱くも、そうする前に撃たれてしまつては意味がないとすぐに切り替える。

一旦地面に足を付け、背中を木の幹にピタリとくっ付けるサツキ。そして——

「□□□□□□□□——ッ!!」

——獣の如き咆哮による大音量の振動波で、辺り一面を薙ぎ払い始めた。

動きを止めに掛かった前回とは違い、今回は姿を隠しているランナーを炙り出すつもりらしい。

その振動で地面が抉れていき、同時にサツキの口元からは血が垂れ

ていく。どうやらこの使い方はかなりの負担が掛かるようだ。

が、これを以てしてもランナーを捉えることはできず、背後から撃たれた散弾を後頭部と背中に食らってしまい、前回のようには咆哮を強制終了させられる。

ならばこれはどうか。サツキはそう言いたげに木の幹を両手で掴むと、そのまま自分の身長のおよそ四倍はあろう大きな木を力づくで引っこ抜き、咆哮の時と同じく薙ぎ払うように振り回す。

これによりさつきは蹴圧で倒れていなかった木々が次々と押し折られていき、サツキを中心にその一帯がまるで伐採されたかのように開けていく。

——それなのに。

ランナーは姿を現さない。それどころか、全く手応えを感じない。木を振り回した際に生じる風圧にすら、何かが引つ掛かったという感覚はない。

これはやるだけ無駄だと判断し、振り回していた木を遠くへ投げ飛ばすサツキ。そしてすぐに平地となったその場から離れる。

ただでさえ相手が百発百中なのに、障害物のない平地となれば格好の餌食だろう。……尤も、木という障害物があってもなお、ランナーの狙撃からは逃げられなかったわけだが。

サツキが焦るようにそう思っていると、それ見たことかと言わんばかりに、右側にそびえ立つ木から決める音と例の発砲音と共に、無数の魔力弾が彼女を襲った。しかも今度は打撃程度の威力ではなく、弾丸が直撃した部位から出血するほどの威力で。

文字通り体——正確には頭部を庇った右腕、無防備だった右脇腹と右脚に穴を開けられ、体勢を崩すサツキ。いくら彼女でも右脚を潰されては、まともに立つのは難しいだろう。

どうにか反対側の木にもたれ掛かり、倒れ込むのを阻止するサツキ。撃たれた部位からは血が流れ出し、足下を濁った赤に染めていく。

残った力を振り絞り、まずは視野を広げて今自分がいる場所を把握する。次にそこに向かって撃ち出されるであろう弾丸の軌道を予想し、前方に蹴りの風圧を、頭上に拳の風圧を飛ばす。

しかし、それらの攻撃がランナーに当たることではなく、さらに攻撃に集中し過ぎて防御が疎かになったこともあり、後頭部を散弾で撃ち抜かれたところで――

――座禅を組んでいたサツキは目を開けた。

「クソが……ッ」

想像の中とはいえ、自分が容易に撃ち殺されたという結果に思わず舌打ちするサツキ。今彼女が行っていたのは、世間で言うところのイメージトレーニング。そう、イメージ”トレーニング”だ。

サツキは生まれてから今に至るまで、トレーニングというものを行ってことがない。強いて言うなら幼少期、母親と一緒に経験した山籠もりと魔法の基礎練がそれに該当するのかもしれないが、少なくともフィジカル向上をメインとしたトレーニングは一度もしていない。

これに関してはサツキ自身が力を求めず、自由を求めたのが最大の要因だろう。それなのに実際は長年求めた自由ではなく、長年必要としなかった強さばかりを得ている。ひたすら力を求める者、サツキの本意を知らない者からは羨まれているが、サツキにとっては正直不快でしかない。皮肉とはまさにこの事である。

だが、今回に関してはそうも言っていられない。何せ相手は本気を出すことなくサツキを制した、プロの殺し屋なのだから。フィジカルトレーニングとまではいかなくとも、イメージトレーニングくらいは必要だと、サツキが自分で判断したのだ。

「けッ、ぐり押しも読み合いもダメか。どうやつても最後は殺されちまう……」

立ち上がって石の上から跳び下り、タバコの代わりに小さな木の棒を啜るサツキ。その表情にいつもの余裕はなく、無情に過ぎていく時間に苛立っているようにも見える。

この一ヶ月間、イメージトレーニングでサツキなりにあらゆる方法でランナーの攻略を試みたものの、どれも姿と気配を消されて回避されてしまっている。しかも向こうはいとも簡単に背後や頭上を取ってくる始末だ。

フィジカル的にはさほど手強い相手ではないのだが、鍛錬で身に付けるような技術となれば話は別。アスリートのそれとは違う、確実に人を殺すための技術。どうにかして攻略の糸口を掴まない限り、勝ち目はない。

——使うしか、ないのか。

「魔法……」

力を込めた右掌をジツと見つめ、忌々しそうにその単語を口に出す。

魔法。それはこの世界における常識の一つであり、サツキの人生を変えた要素の一つだ。

生まれ持った力ではない、突如発現した力。だからこそ、サツキは忌み嫌った。この力に頼って依存してしまうことを恐れた。

それでも得てしまったものは仕方がない。魔法という力を持つ代わりに、極力使うことを避け、依存してしまわないよう細心の注意を払い続けることにした。

……一時出場していた競技大会や、よほどの緊急事態に限り、やむを得ず頻繁に使用していたが。

「っ……!?!」

右手に魔力を込めようとするも、体が反射的にそれを拒む。サツキの意思ではなく、本能によるものだ。

「この……!」

アタシには魔法なんていらぬ。生まれ持った力——身体能力だけでやれる。今までそうしてきたし、結果として次元最強と言われる奴とも対等に渡り合った。だから、これからもそうすれば……!」

「……………はア」

そこまで考えたところで、バカバカしそうにため息をつくサツキ。アホか。それじゃ今と何も変わらねえだろ。変わらねえってことはランナーにも勝てないままじゃねえか。

額から嫌な汗が出ようとお構いなく、右手に魔力を込めていく。しかし、なりふり構っていられなかつた時とは違い、己の本能が全力で拒んでくる。それは使うな、使ってはいけないと。

これが最終警告だと言わんばかりに、一ヶ月前に感じた胸部からの激痛を再び覚えようと、魔力を溜めるのをやめようとはしない。

魔力が溜めきつたサツキは腹を括って真剣な顔になると、魔力を宿したことで赤紫色に光り出した右手を、さつきまで自分が座っていた石に向け、わずかに震える掌から魔力の衝撃波を放つ。石は破碎音を立てて粉々になり、小さな破片が川に降り注いでいく。

足下に巨大な正三角形の陣——古代ベルカ式の魔法陣を展開し、激痛が治まらない胸元を押さえながらも、開いている右手を拳に変え、意を決したような声で呟く。

「拘るのはもう——やめだ」

その表情はとても悔しそうで、大切なものを手放すかのように切なげだった。

□

「ふう、どうにか治まったか……」

胸の痛みを感じてから二時間後。ようやくそれが治まったことに安堵し、口元を緩めるサツキ。近いうちにランナーとやり合うんだ。手負いのままじゃ話にならない。

本当なら今すぐにでも魔法の感覚を取り戻したかったが、痛みがなかなか引かなかつたせいでそんな余裕はなかった。

今日のところは切り上げることにし、沈んでいく夕日を見ながらフーカの帰りを待つ。一ヶ月は経った今でもなお、フーカは獣を狩れていない。そろそろ狩れても良い頃だが……。

「お、緒方さーんー！」

「おっ……ん？」

戻ってきたか。そう思いながら腰を上げたところで、何かを引き摺るような音が微かに聞こえてきた。そうか、やっと狩りを成功させたんだな。

サツキが安心したように一息つく、森の方から狩りに出ていたフーカが、泥や傷で汚れ切った顔を歪ませながら出てきた。

——体長三メートルはあろうかという、狼のような獣を引き摺りながら。

「……………」

フーカの狩ってきた獲物が予想外過ぎるあまり、思わず言葉を失うサツキ。確かに狩りを成功させるとは言ったが、まさか猪以外の大型獣を狩ってくるとは思っていなかった。

狩ってきた張本人であるフーカは、息を整えてどうだと言わんばかりにこちらを見ているが、サツキはそれに応えることなく、今思ったことをそのまま口にする。

「これ、食えるのか？」

「えっ」

そこまでは考えていなかったのか、ドヤ顔で固まるフーカ。この獣を狩るのによほど必死だったのだろう。

サツキは称賛のつもりでフーカの頭をポンと軽く叩き、暗くなりつつある空を見上げる。フーカが狩りを成功させた以上、ここで暮らす必要はない。明日にでも街へ戻るか。

もう半月は吸っていないタバコの味を恋しく思いつつ、視線を狼型の獣へと向ける。……今日の晩飯は狼の挽肉になりそうだ。